仙台市文化財調査報告書第405集

郡山遺跡 他

発掘調査報告書

－ 郡山遺跡第 206 次・郡山遺跡第 209 次・
養種園遺跡第 8 次・富沢遺跡第 143 次 －

2012. 3

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第405集

郡山遺跡 他

発掘調査報告書

－ 郡山遺跡第 206 次・郡山遺跡第 209 次・
養種園遺跡第 8 次・富沢遺跡第 143 次 －

２０１２．３

仙 台 市 教 育 委 員 会

序　文

日ごろより、仙台市の文化財保護行政に対しまして、ご理解とご協力を賜り感謝申し上げます。

始めに、平成23年3月11日に発生した東日本大震災では、市内の各所で甚大な被害があり、文化財の被害も数多くありました。そのような状況の中で、仙台市文化財課では埋蔵文化財包蔵地での住宅の建替えや宅地造成工事に先立つ調査に、関係者と協議をしながら順次対応しているところであります。市民の皆さまの早期復興を願いますとともに、今後とも埋蔵文化財保護行政へのご協力とご理解をお願い申し上げます。

さて、本報告書には、宅地造成工事に先立つ郡山遺跡の発掘調査報告、店舗建築工事に先立つ養種園遺跡の発掘調査報告、平成22年度に実施した太白区立体駐車場建築工事に先立つ富沢遺跡発掘調査報告を収録しています。

今回収録した各々の発掘調査は、これまでの調査成果に加え、より一層仙台の歴史について理解を深めることができる貴重な歴史資料の発見となっております。

本報告書が、学術研究のみならず学校教育や生涯学習など、あらゆる場面で活用され、市民の皆さまの埋蔵文化財への関心とご理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の発掘調査や報告書作成に際して、多くの方々にご協力いただきましたことを、心より感謝申し上げます。

平成24年3月

仙台市教育委員会
教育長　　青沼　一民

例　言

1．本書は、仙台市教育委員会により、平成23年度に実施した宅地造成工事に先立つ郡山遺跡の発掘調査報告並びに店舗建築工事に先立つ養種園遺跡の発掘調査報告、及び平成22年度に実施した仙台市公共工事事業に先立つ富沢遺跡の発掘調査報告書の合本である。

2．本書の執筆は、次のように分担して行なった。

第1章　郡山遺跡第206次発掘調査報告：大久保弥生
　　郡山遺跡第209次発掘調査報告：大久保弥生・佐藤正弥
第2章　養種園遺跡第8次発掘調査報告：1～5　廣瀬真理子　6・7　小泉博明
第3章　富沢遺跡第143次発掘調査報告：廣瀬真理子

3．第1章Ⅲ 郡山遺跡第206次発掘調査の内容は、既に公開されている「平成23年度宮城県遺跡調査発表会発表会発表要旨」に優先する。

4．本書に係わる出土遺物、実測図、写真などの資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡　例

1．断面図の標高値は、海抜高度を示している。但し、海抜高度及び座標系は、平成23年（2011）3月11日の東日本大震災以前の値を使用している。

2．第1章郡山遺跡の平面図に示した座標系は、郡山遺跡内に昭和56年に設定し、平成8年度に改訂した任意の座標系（X＝0、Y＝0を通る磁北線（1984年頃の偏角で、真北から6°44′7″西傾））で表記している。なお、文中での方位は真北を基準としている。

3．第2・3章での図中の方位は真北を基準としている。

4．遺構の略称は次のとおりである。なお、遺構番号について、第1章郡山遺跡は、これまで調査された調査区を通しての番号順、ピットは調査区毎となっている。第2章養種園遺跡、第3章富沢遺跡は、調査次数毎に付している。

SB：掘立柱建物跡　SD：溝跡　SI：竪穴住居跡　SK：土坑　SX：性格不明遺構　P：ピット

5．第1章Ⅲの遺構図に使用したスクリーントーンは、下記の通りである。

：炭化物範囲　：焼土範囲

6．第1章Ⅲの建物跡模式図中の記号は、以下の基準により図示した。

●：柱痕跡が検出されたもの　○：柱穴掘り方のみ検出されたもの　◌：想定される柱穴

7．出土遺物の略号は次のとおりである。

B：弥生土器　C：土師器（ロクロ不使用）　D：土師器（ロクロ）　E：須恵器
F：丸瓦・軒丸瓦　G：平瓦・軒平瓦　I：陶器　J：磁器　K：礫石器
N：金属製品　P：土製品

8．土師器実測図における網掛けは、黒色処理が施されていることを示している。その他の付着物や痕跡については図上に示している。

9．遺物観察表中の（　）が付いた数字は、図上で復元した推定値である。

10．土色については「新版標準土色帖」（小山・竹原1989）を使用した。

11．本書中の地形図は、国土地理院発行の1:25000「仙台東南部」、「仙台東北部」と1:10000「長町」、「西多賀」の一部を使用している。

12．本文中の「灰白色火山灰」は県内で広域に分布する「灰白色火山灰」（山田・庄子1980）と同義である。これまでの仙台市域の調査報告や東北地方中北部での研究から、「十和田a火山灰（To－a）」（大池1972）と考えられている。現在、降下年代は西暦915年と推測されており（町田・新井1992、小口2003など）、本書もこれに従う。

目　次

序文
例言・凡例
目次

第１章　郡山遺跡

Ⅰ．調査要項…… 1
Ⅱ．遺跡の位置と環境…… 2
Ⅲ．郡山遺跡第 206 次発掘調査報告
1　調査に至る経緯と調査方法 …… 4
2　基本層序 …… 8
3　発見遺構と出土遺物 …… 9
4　まとめ ……21
Ⅳ．郡山遺跡第 209 次発掘調査報告
1　調査に至る経緯と調査方法 ……33
2　基本層序 ……34
3　発見遺構と出土遺物 ……36
4　まとめ ……37

第２章　養種園遺跡第８次発掘調査報告

1　調査要項 ……40
2　調査に至る経緯と調査方法 ……41
3　遺跡の位置と環境 ……41
4　基本層序 ……42
5　発見遺構と出土遺物 ……42
6　出土遺物についての考察 ……47
7　まとめ ……48

第３章　富沢遺跡第 143 次発掘調査報告

1　調査要項 ……52
2　調査に至る経緯と調査方法 ……52
3　遺跡の位置と環境 ……53
4　基本層序 ……54
5　発見遺構と出土遺物 ……55
6　まとめ ……55

第１章　郡山遺跡（第 206 次・第 209 次）発掘調査報告

Ⅰ．調査要項

〈郡山遺跡第 206 次調査〉

遺 跡 名　郡山遺跡（宮城県遺跡登録番号　01003）
調査地点　仙台市太白区郡山二丁目８－１ほか
調査期間　平成 23 年６月 30 日～平成 23 年８月 25 日
調査面積　300㎡
調査原因　宅地造成工事
調査主体　仙台市教育委員会
調査担当　仙台市教育委員会生涯学習部文化財課
担当職員　整備活用係　係長　長島栄一　　主査　木村浩二　　主事　大久保弥生
　　文化財教諭　佐藤正弥　　文化財教諭　菊地貴博
　　調査調整係　主事　小泉博明　　文化財教諭　石山智之　　文化財教諭　吉野 信
　　文化財教諭　佐藤洋平　　文化財教諭　橋本勇人

〈郡山遺跡第 209 次調査〉

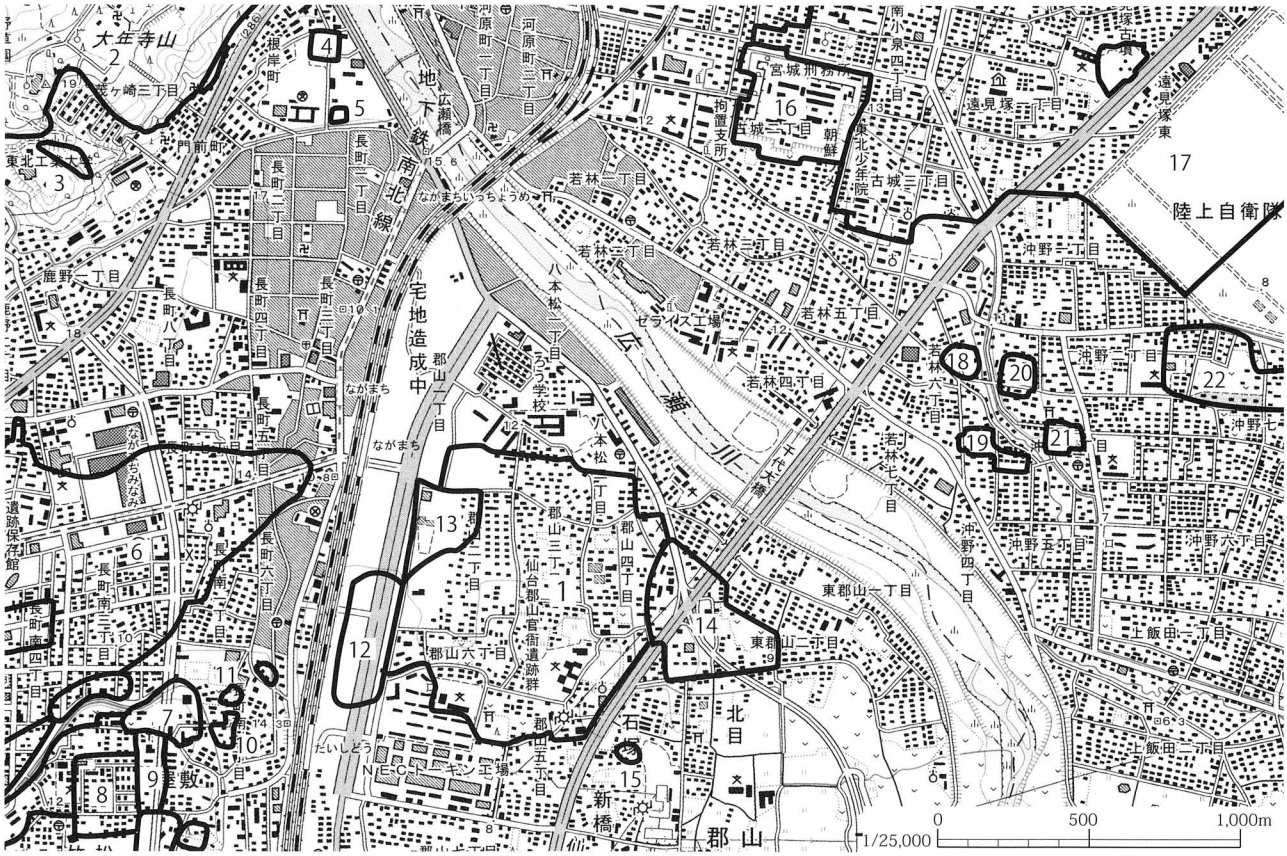
遺 跡 名　郡山遺跡（宮城県遺跡登録番号　01003）
調査地点　仙台市太白区郡山５丁目 40－１・42－１
調査期間　平成 23 年９月１日～平成 23 年９月 15 日
調査面積　280㎡
調査原因　宅地造成工事
調査主体　仙台市教育委員会
調査担当　仙台市教育委員会生涯学習部文化財課
担当職員　整備活用係　係長　長島栄一　　主事　大久保弥生
　　文化財教諭　佐藤正弥　　文化財教諭　菊地貴博
　　調査調整係　主事　小泉博明　　文化財教諭　石山智之　　文化財教諭　吉野 信
　　文化財教諭　佐藤洋平　　文化財教諭　橋本勇人

Ⅱ．遺跡の位置と環境

郡山遺跡は仙台市の東南部、太白区郡山二～六丁目地内に所在する。当遺跡は、北を広瀬川、南を名取川に挟まれ、その両河川の合流点から北西約 2km に位置する。遺跡の範囲は東西 800 m、南北 900 mで、面積は約 60 万㎡に及んでいる。その一部は、平成 18 年に「仙台郡山官衙遺跡群　郡山遺跡　郡山廃寺跡」として国史跡に指定されている。

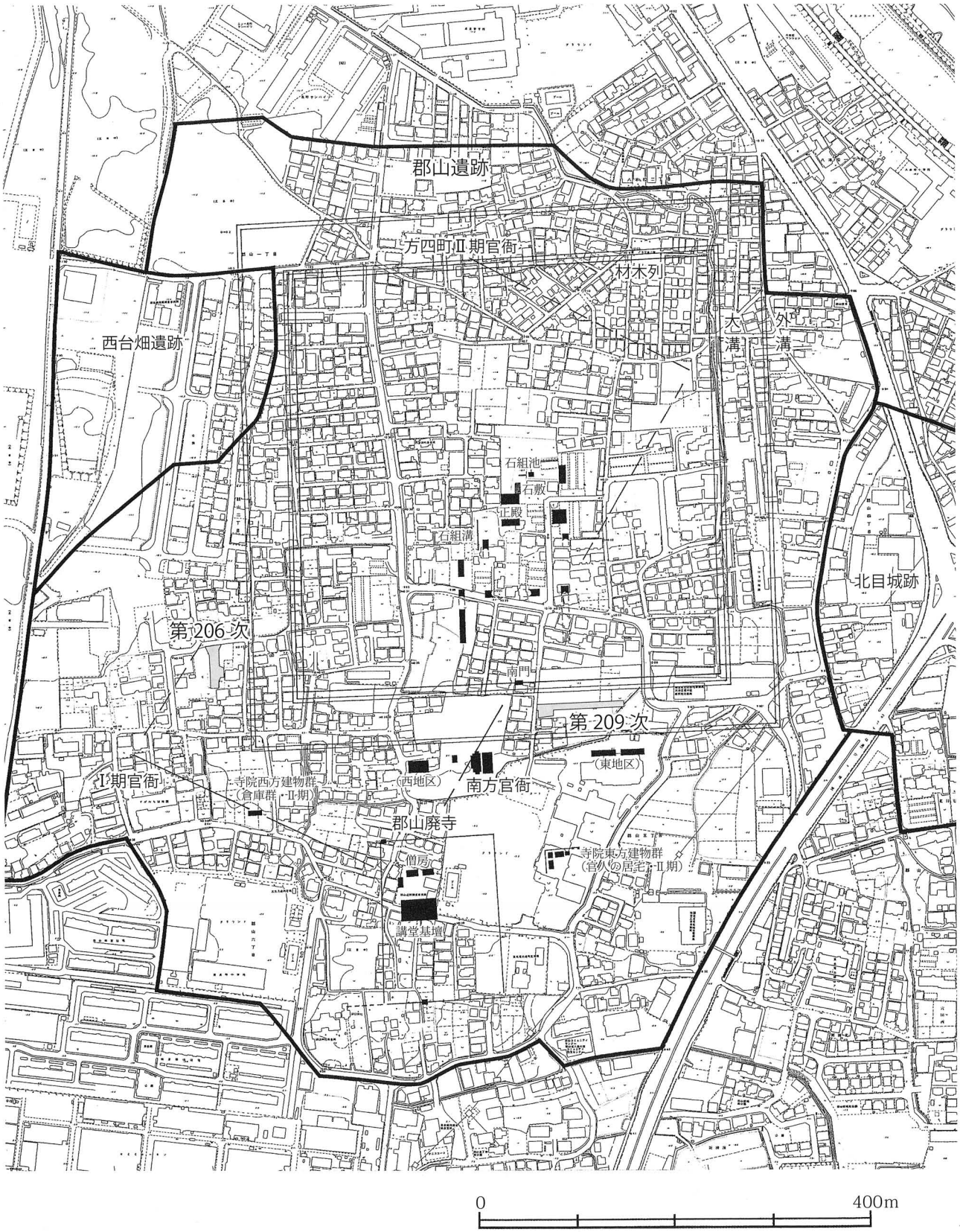
官衙は、「Ⅰ期官衙」と「Ⅱ期官衙」の２時期がある。Ⅰ期官衙は７世紀中頃から後半にかけて機能し、陸奥国の拠点となる柵跡と考えられる（今泉 2005）。Ⅱ期官衙は、Ⅰ期官衙を取り壊し、建物や塀などの施設の基準を真北方向に揃えた、多賀城創建期までの陸奥国府跡と考えられる。

周辺の遺跡には、西側に隣接して長町駅東遺跡と西台畑遺跡が位置し、郡山遺跡と同時期の 500 軒を越える竪穴住居跡が発見されている。また東側に隣接して近世の屋敷跡である北目城跡がある。北西約 3km 地点の大年寺山・愛宕山丘陵面にある向山横穴墓群は、副葬品の中に当遺跡と共通性が認められる土器類があり、関連が窺われる遺跡である。また、当遺跡から南西約 1.5km には、大野田官衙遺跡がある。現在、６棟の大型掘立柱建物跡が方形の溝の内部に整然と配置されていることが確認されており、建物跡の規模や出土遺物などから、郡山遺跡Ⅱ期官衙と関連がある遺跡である（仙台市教育委員会 2010）。なお、郡山遺跡の歴史的環境の詳細については、仙台市文化財調査報告書第 283 集『郡山遺跡発掘調査報告書－総括編（1）』（2005）のほか、既発行の郡山遺跡発掘調査報告書を参照していただきたい。



No.	遺跡名	種別	立地	時代	No.	遺跡名	種別	立地	時代
1	郡山遺跡	官衙跡、寺院跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代	12	長町駅東遺跡	集落跡	自然堤防	弥生、古墳、古代
2	茂ヶ崎城跡	城館跡	丘陵	中世	13	西台畑遺跡	集落跡、甕棺墓	自然堤防	縄文、弥生、古墳
3	茂ヶ崎横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳、奈良	14	北目城跡	城館跡、集落跡、水田跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代、近世
4	兜塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳	15	矢来遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代
5	小兜塚古墳	円墳	自然堤防	古墳	16	若林城跡	円墳、集落跡、城館跡	自然堤防	古墳、古代、中世、近世
6	富沢遺跡	包含地、水田跡	後背湿地	旧石器、縄文、弥生、古墳、古代～近世	17	南小泉遺跡	集落跡・屋敷跡	自然堤防	弥生、古墳、古代、中世、近世
7	元袋遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	弥生、古代、中世、近世	18	砂押Ⅰ遺跡	散布地	自然堤防	古代
8	大野田官衙遺跡	官衙跡	自然堤防	古代	19	砂押Ⅱ遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代
9	大野田遺跡	祭祀、集落跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代	20	神柵遺跡	建物跡	自然堤防	古代
10	新田遺跡	散布地	自然堤防	古代	21	中柵西遺跡	散布地	自然堤防	弥生、古墳、古代
11	長町南遺跡	散布地	自然堤防	古代	22	沖野城跡	城館跡	自然堤防	中世

第１図　郡山遺跡と周辺の遺跡


郡山遺跡
方四町Ⅱ期官衙
材木列
大溝
外溝
西台畑遺跡
石組池
石敷
正殿
石組溝
北目城跡
第 206 次
南門
第 209 次
Ⅰ期官衙
寺院西方建物群
（倉庫群・Ⅱ期）
（西地区）
南方官衙
（東地区）
郡山廃寺
僧房
寺院東方建物群
（官人の居宅・Ⅱ期）
講堂基壇
0
400m

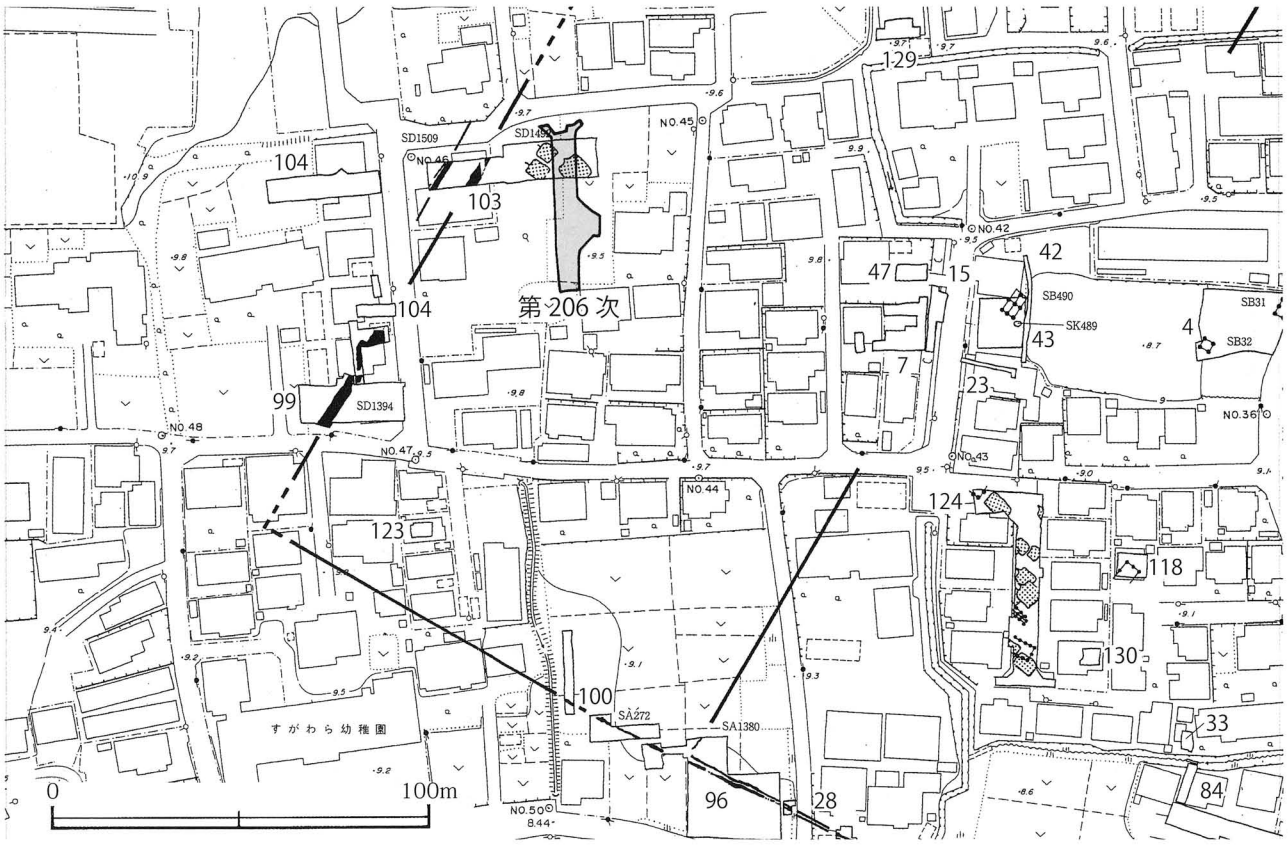
第２図　郡山遺跡全体図

Ⅲ．郡山遺跡第 206 次発掘調査

１　調査に至る経緯と調査方法

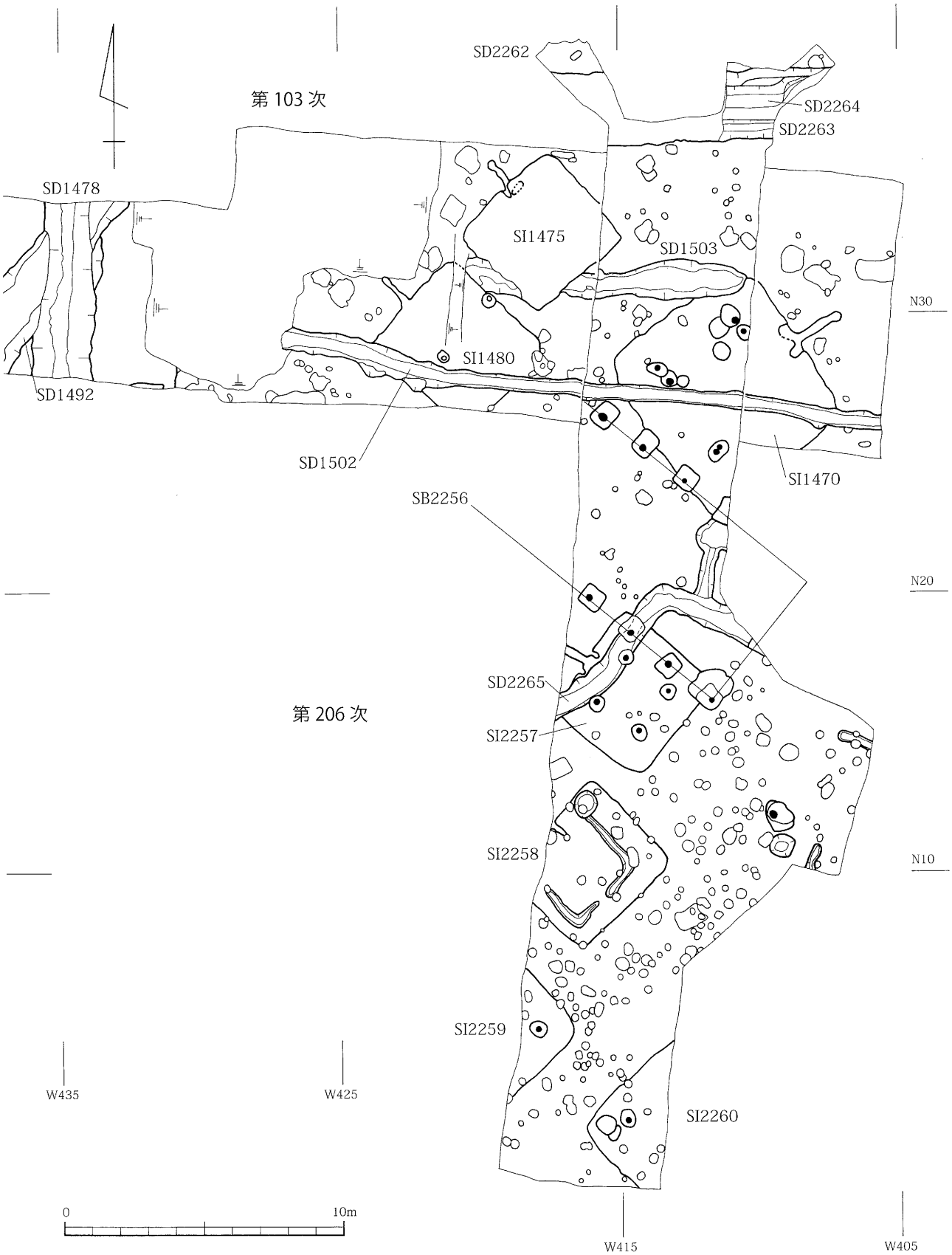
第 206 次調査は、宅地造成工事に先立つ本発掘調査である。セキスイハイム東北株式会社より平成 23 年 4 月 4 日付で「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」が提出された。計画地は、平成 6 年度に国庫補助事業における重要遺跡の範囲確認調査で実施した第 103 次調査区と一部重複しており、官衙以前の時期の住居跡や郡山遺跡Ⅰ期官衙にかかわる溝跡などが多数検出されていた。協議の結果、宅地内道路部分の地下に埋設管を付設するための掘削により、遺構が削平されることが想定されため、宅地内の道路部分を本発掘調査の対象とし発掘調査を実施することとなった。

調査区は、宅地内道路工事部分にあたる東西 6 m×南北 50 mに設定した。調査面積は約 300㎡である。調査は 6 月 30 日から重機で盛土および旧耕作土であるⅠ層及びⅡ層の除去を開始した。遺構は、Ⅲ層上面で検出し、精査を行った。遺構実測のための基準杭は、郡山遺跡発掘調査基準点を用いて測量し、調査区内に基準杭を設けた。遺構平面図は、基準杭を設定し、適宜簡易遣り方を組んで縮尺 1/20 で作成し、断面図も縮尺 1/20 で作成した。記録写真は、フィルムカメラ（35㎜カラーリバーサル・同モノクロ）及びデジタルカメラを使用した。



第３図　第 206 次調査区位置図（S=1/2000）

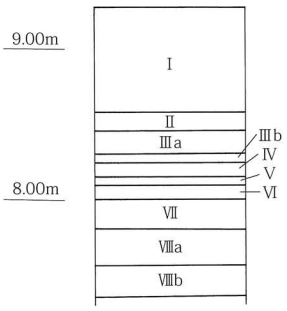
第４図　第 206 次調査区平面図（S=1/100）



第 5 図　第 103 次・第 206 次遺構配置図（S ＝ 1/200）

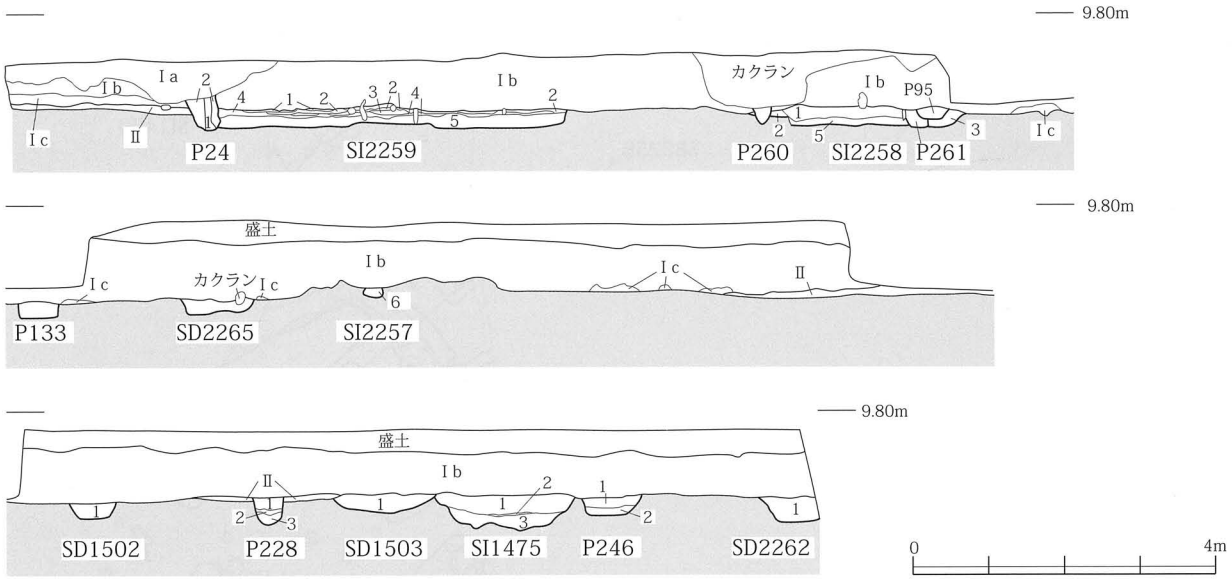
2　基本層序

基本層の観察は、地表面から約２ｍの深さまで観察し、Ⅰ～Ⅷ層まで大別した。Ⅰ層は盛土以前の耕作土で、地点により３層に細別された。その下層のⅡ層上面で小ピットを検出した。古代の遺構は、標高 8.5 ｍ前後のⅢ層上面で検出している。



層位	色　調	土　質	備　考
Ⅰａ	10YR3/3　暗褐色	シルト	盛土以前の畑の耕作土である。
Ⅰｂ	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	酸化鉄粒、マンガン粒を多く含み、Ⅰｂ層土やⅡ層土ブロックを少量含む。 畑の耕作土で、天地返しされた層の最下部に相当する。
Ⅰｃ	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	Ⅰｂ層土ブロックを少量含む。酸化鉄粒、マンガン粒を多量に含む。
Ⅱ	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	マンガン粒を少量含む。
Ⅲａ	10YR5/6　黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄、マンガン粒を非常に多く含む。古代の遺構検出面。
Ⅲｂ	10YR6/4　にぶい黄橙色	粘土質シルト	酸化鉄粒を全体にやや多量に含む。
Ⅳ	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土ブロックを下面に層状に少量含み、酸化鉄粒をやや多量に含む。
Ⅴ	10YR3/1　黒褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土ブロックを少量含み、酸化鉄粒を微量含む。
Ⅵ	10YR5/2　灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒を全体に少量含む。
Ⅶ	10YR7/3　にぶい黄橙色	粘土質シルト	酸化鉄粒を全体に少量含み、下面に浅黄橙色シルト土を層状に含む。
Ⅷａ	10YR5/2　灰黄褐色	粘土質シルト	長さ３～ 5cmの縦筋状の酸化鉄を全体に少量含む。
Ⅷｂ	2.5Y6/1　黄灰色	粘土質シルト	長さ３～ 5cmの縦筋状の酸化鉄を全体に微量含む。

第６図　基本層柱状図（S=1/50）



遺構名	層　位		色　調	土　質	備　考
SI2258	1	ａ期埋め戻し土 ｂ期堀方埋土	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色（10YR4/3）粘土質シルト土粒を多量に含み、マンガン粒を少量含む。
	2		10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	マンガン粒を多量に含み、黒褐色（10YR3/1）粘土質シルト土ブロックをやや多量に含む。
	3	ａ期カマド内堆積土	10YR3/1　黒褐色	粘土質シルト	焼土ブロックを多量に含み、炭化物ブロックを少量含む。
	4	ａ期周溝堆積土	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色（10YR5/3）粘土を粒～ブロック状に多量に含む。人為的埋め立てとみられる。
	5	ａ期掘り方埋土	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	にぶい黄褐色（10YR5/3）粘土質シルト土ブロックを多量に含む。
SI2259	1	堆積土	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒を多量に含み、炭化物粒を微量含む。
	2	堆積土	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	炭化物粒を非常に多く含む。
	3	貼床	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄橙色（10YR7/2）シルト土小ブロックを少量含む。
	4	貼床	10YR6/2　灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒を下面にやや多く含む。
	5	堀り方埋土	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色（10YR5/3）土ブロックを多量に含む。
SD2265	1	堆積土	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒、炭化物ブロックを多量に含む。
SI2257	6	煙道堆積土	10YR2/3　黒褐色	粘土質シルト	マンガン粒をやや多量に含み、酸化鉄粒を少量含む。
SI1475	1	―	―	―	第 103 次調査　埋め戻し土
	2	床面	10YR4/1　褐灰色	シルト	
	3	掘り方埋土	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄橙色（10YR7/2）シルト土ブロック、黒褐色（10YR3/1）シルト土ブロック、マンガン粒を少量含む。
SD1502	1	―	―	―	第 103 次調査　埋め戻し土
SD1503	1	―	―	―	第 103 次調査　埋め戻し土
SD2262	1	堆積土	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒を多量に含み、にぶい黄橙色（10YR6/3）シルト土粒を微量含む。
P24	1	堀り方埋土	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土粒を少量含む。
	2	柱痕跡	10YR2/1　黒色	粘土質シルト	Ⅲ層土ブロックを微量含む。
P39	1		10YR2/2　黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色（10YR5/3）粘土質シルト土ブロックと焼土を少量含む。
P132	1		10YR4/4　褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒をやや多く含み、炭化物粒を微量含む。
P133	1		10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	黒褐色粘土質シルト土ブロック、酸化鉄粒をやや多く含む。
P228	1		10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色（10YR5/3）粘土を粒～ブロック状に多量に含む。
	2		10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色（10YR5/3）粘土を粒～ブロック状に少量含む。
	3		10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	
P246	1		10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色（10YR5/2）粘土質シルト土ブロック状に少量含み、炭化物粒を微量含む。
	2		10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色（10YR5/2）粘土質シルト土ブロック状にやや多く含む。

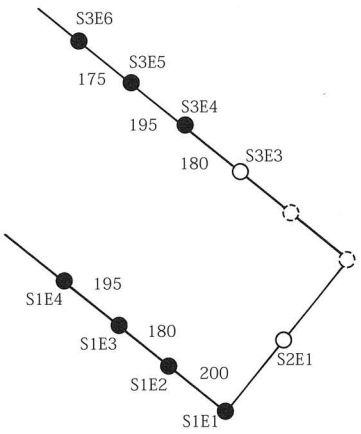
第７図　第 206 次調査区西壁断面図（S ＝ 1/100）

3　発見遺構と出土遺物

第 206 次調査では、第 103 次調査で検出されていた竪穴住居跡２軒（SI1470・SI1475）、溝跡２条（SD1502・SD1503）のほか、新たに掘立柱建物跡１棟、竪穴住居跡５軒、溝跡６条、土坑８基、ピットが検出された。

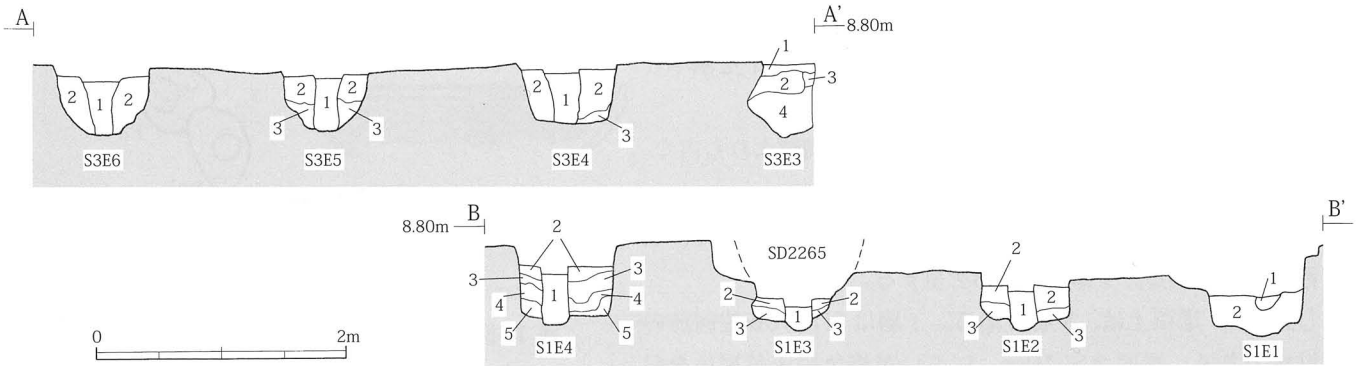
(1) 掘立柱建物跡

SB2256 掘立柱建物跡　規模は、桁行５間もしくは５間以上（柱間寸法 1.75 ～ 2.0 m）、梁行２間（柱間寸法 1.6 ～ 2.7 m、総長 5.4 ～ 5.45 m）で、S1E1、S2E1 柱穴が東妻柱列となる東西棟の建物跡である。検出した９基の柱穴のうち、S2E1 と S3E3 柱穴は柱穴掘り方の一部を検出した。柱列方向は、南桁行で N － 57°－ W である。柱穴掘り方は、一辺 70 ～ 92㎝、隅丸長方形で、長辺と短辺の方向にばらつきがある。SI1470・2257 竪穴住居跡よりも新しく、SD2265 溝跡、SK2270 土坑よりも古い。



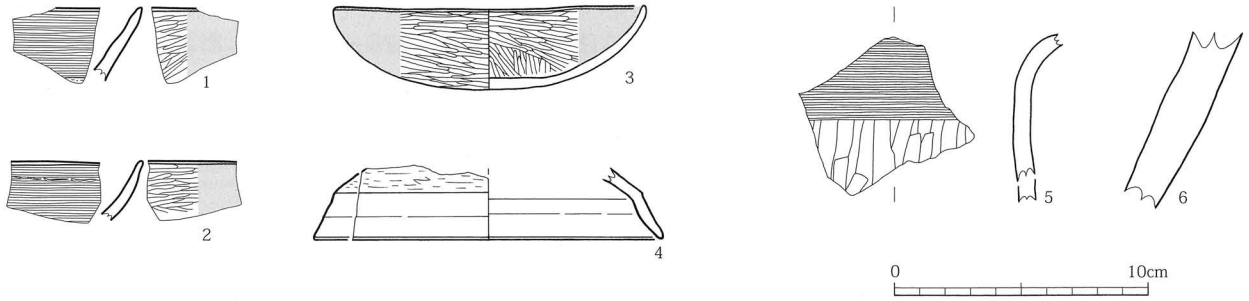
第８図　SB2256 模式図

遺物は、各柱穴の掘り方埋土中から土師器の坏や甕、須恵器蓋、拳大の河原石、礫石が出土している。細片が多く、図示したのは５点である。S1E1 掘り方埋土中からは、体部が肥大し口縁部がわずかに外反する C － 1062 土師器坏（第 10 図 1）、体部が直線的に外傾する C － 1063 土師器坏（第 10 図 2）が出土した。また S1E1 柱痕跡土中からは、内外面にミガキと黒色処理が施された金属器模倣の C － 1066 土師器坏（第 10 図 3）が出土した。S1E2 掘り方埋土中からは、天井部に回転ケズリが施され、天井部と体部の境に明瞭な稜があり、体部が直線的に外傾する E － 553 須恵器蓋（第 10 図 4）や、体部外面に細身の道具による縦方向のヘラナデが施され、口縁部にヨコナデが施される C － 1064 土師器甕（第 10 図 5）が出土した。また、S1E4 の検出面では、体部外面に平行叩きを施し、内面に青海波文のある E － 554 須恵器甕（第 10 図 6）の体部破片が出土している。



遺構名	層位		色調	土質	備考
SB2256 -S1E1	1	柱痕跡	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	焼土粒、炭化物粒を少量含む。
	2	掘り方埋土	10YR3/1　黒褐色	粘土質シルト	褐色（10YR4/4）粘土質シルト土粒、にぶい黄橙色（10YR6/3）粘土質シルト土ブロック、黒色（10YR2/1）粘土質シルト土ブロックを多量に含み、炭化物粒、焼土粒を少量含む。
SB2256 -S1E2	1	柱痕跡	10YR2/2　黒褐色	粘土質シルト	暗褐色（10YR3/4）シルト土ブロック、焼土粒、炭化物粒を含む。河原石１点（加工？）を含む。
	2	掘り方埋土	10YR2/3　黒褐色	シルト質粘土	褐色（7.5Y4/4）シルト土ブロック、黒色（10YR1.7/1）シルト土ブロック、焼土粒、炭化物粒を含む。
	3	掘り方埋土	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	褐色（7.5Y4/4）粘土ブロックを多量に含む。焼土粒、炭化物粒を含む。
SB2256 -S1E3	1	柱痕跡	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	黄褐色（2.5Y5/3）シルト質粘土小ブロックを含む。河原石１点含む。
	2	掘り方埋土	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	褐色（10YR4/4）粘土ブロックを混合。炭化物粒を含む。
	3	掘り方埋土	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	黒褐色（10YR2/2）粘土ブロックを含む。
SB2256 -S1E4	1	柱痕跡	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	
	2	掘り方埋土	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	暗褐色（10YR3/4）シルト土ブロックを含む。
	3	掘り方埋土	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	黒褐色（10YR2/2）シルト質粘土ブロックを混合。
	4	掘り方埋土	10YR2/2　黒褐色	シルト質粘土	暗褐色（10YR3/4）シルト質粘土小ブロック、炭化物粒を含む。
	5	掘り方埋土	10YR4/6　褐色	シルト質粘土	褐色（10YR4/6）シルト質粘土ブロック、黒褐色（10YR2/2）粘土ブロックを混合。
SB2256 -S3E3	1	掘り方埋土	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	黒色（10YR2/1）土ブロック、酸化鉄粒を少量含む。
	2	掘り方埋土	10YR3/1　黒褐色	粘土質シルト	
	3	掘り方埋土	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	マンガン粒を少量含む。
	4	掘り方埋土	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	黒褐色（10YR3/1）粘土質シルト土ブロックを少量含む。
SB2256 -S3E4	1	柱痕跡	10YR3/1　黒褐色	シルト質粘土	Ⅳ層土粒，マンガン粒を少量含む。
	2	掘り方埋土	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	黒色（10YR2/1）粘土ブロック、にぶい黄橙色（10YR7/2）粘土ブロックを多量に含み、マンガン粒、酸化鉄粒を少量含む。
	3	掘り方埋土	10YR6/6　明黄褐色	粘土質シルト	黒色（10YR2/1）粘土質シルト土を底面に層状に含み、にぶい黄橙色（10YR7/2）粘土質シルト土ブロックを少量含む。
SB2256 -S3E5	1	柱痕跡	10YR3/1　黒褐色	シルト質粘土	
	2	掘り方埋土	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	黒色（10YR2/1）粘土ブロック、にぶい黄橙色（10YR7/2）粘土ブロックを多量に含み、マンガン粒、酸化鉄粒を少量含む。
	3	掘り方埋土	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	黒色（10YR2/1）粘土質シルト土ブロック、にぶい黄橙色（10YR7/2）粘土質シルト土ブロック、酸化鉄ブロックを全体に多量に含む。
SB2256 -S3E6	1	柱痕跡	10YR3/1　黒褐色	シルト質粘土	
	2	掘り方埋土	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	黒色（10YR2/1）粘土質シルト土ブロック、にぶい黄橙色（10YR7/2）粘土質シルト土ブロック、酸化鉄ブロックを全体に多量に含む。

第９図　SB2256 掘立柱建物跡断面図（S ＝ 1/60）



図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量（cm）	外面調整	内面調整	写真図版
				遺構名	層位				
1	C-1062	土師器	坏	SB2256 － S1E1	掘り方埋土		口縁部：ヨコナデ　体部：ケズリ	口縁部：ミガキ　黒色処理	7 － 1
2	C-1063	土師器	坏	SB2256 － S1E1	掘り方埋土		口縁部：ヨコナデ	口縁部：ミガキ　黒色処理	7 － 2
3	C-1066	土師器	坏	SB2256 － S1E1	柱痕跡	口径：12.2　器高：3.2	ミガキ　黒色処理	ミガキ　黒色処理	7 － 4
4	E-553	須恵器	蓋	SB2256 － S1E2	掘り方埋土	口径：（13.8）	口縁部：ロクロナデ　体部：回転ケズリ	口縁部：ロクロナデ　灰被り	7 － 3
5	C-1064	土師器	甕	SB2256 － S1E2	掘り方埋土		口縁部：ヘラナデ後ヨコナデ　体部：ヘラナデ	口縁部：ヨコナデ　体部：ヘラナデ	7 － 5
6	E-554	須恵器	甕	SB2256 － S1E4	検出面		体部：平行叩き目	体部：青海波文	7 － 6

第 10 図　SB2256 掘立柱建物跡出土遺物

(2) 竪穴住居跡

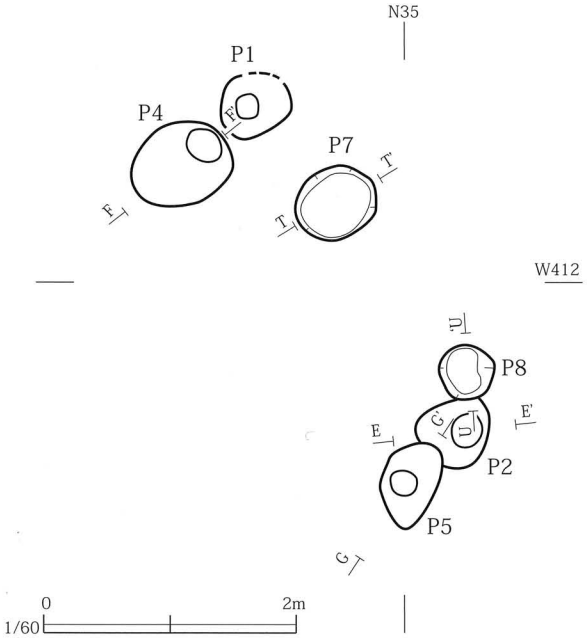
SI1470a・b 竪穴住居跡（第 11・12 図）

第 103 次調査で住居跡の全範囲を検出し、床面までの精査を行っている。本調査の結果、主柱穴の位置を外側に移し、床面の一部を補修あるいは嵩上げをして住居の拡張を行っていることが明らかとなった。よって、改築前の住居を SI1470a、改築後の住居跡を SI1470b として記述する。

[検出位置・方向] 調査区の北部に位置し、住居跡の西半部を検出した。方向は、第 103 次調査で検出したカマドを基準とするとＮ－ 50°－Ｅである。

[重複]SB2256 掘立柱建物跡、SD1502・1503 溝跡よりも古く、SK2267 土坑よりも新しい。

[規模・平面形] SI1470b 住居跡の規模は、南北 670㎝、東西 650㎝を測る。平面形は方形を呈する。



第 11 図　SI1470 竪穴住居跡柱穴平面図

[堆積土] 堆積土は、８層である。１層は SI1470b 住居跡の貼床である。層厚２～ 10㎝、にぶい黄橙色や灰黄褐色を呈する。硬化した層で、住居跡のほぼ全面で検出された。２層は SI1470a 住居跡の機能時の堆積土である。層厚２～６㎝、炭化物や焼土を多量に含む層で、部分的に検出した。３～８層は SI1470a 住居跡の掘り方埋土である。

[壁] 壁面は、ほぼ垂直に立ち上がる。

[床面] SI1470a 住居跡は、掘り方埋土を床面としている。SI1470b 住居跡は、にぶい黄橙色や灰黄褐色の粘土質シルトを入れ、嵩上げし、床面としている。

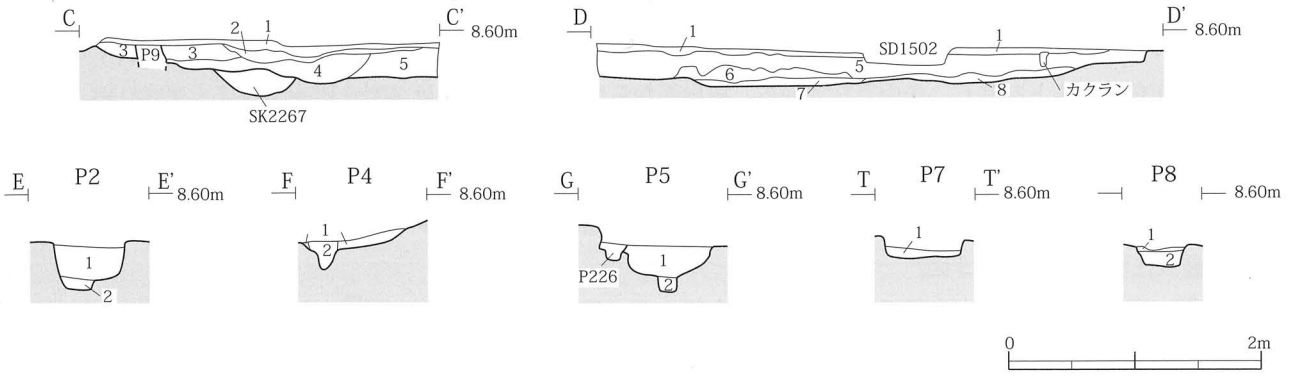
[柱穴] ９基（P1 ～ 9）確認した。P1、P2、P3 は、SI1470a 住居跡の主柱穴である。P1 は直径 60㎝不整円形を呈し、柱痕跡の直径は 20㎝である。P2 は直径 60㎝の不整円形を呈し、柱痕跡の直径は 26㎝である。P3 の掘り方は P6 に壊されており不明である。柱痕跡の直径は 22㎝である。

P4、P5、P6 は、SI1470b 住居跡の主柱穴である。P4 は直径 70㎝の円形を呈し、柱痕跡の直径は 25㎝である。P5 は長軸 75㎝、短軸 65㎝の楕円形を呈し、柱痕跡の直径は 16㎝程である。P6 は長軸 85㎝、短軸 53㎝の楕円形を呈し、柱痕跡の直径は 26㎝である。

P7、P8、P9 は、SI1470a、b 住居跡のいずれに伴うものか不明である。

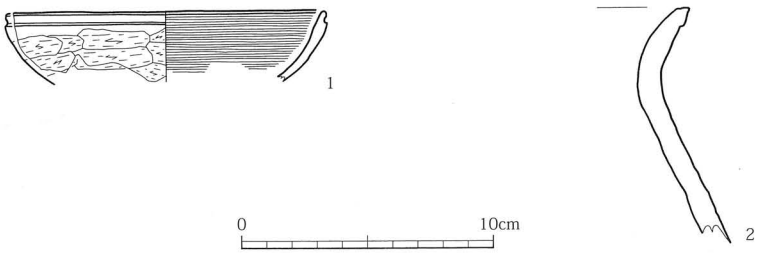
[カマド] 第 103 次調査で検出された北東辺に付設するカマドは、検出することができなかった。

[掘り方] 底面はほぼ平坦である。



遺構名	層位		色調	土質	備考
SI1470	1	b 期貼床	10YR4/1　褐灰色	シルト	にぶい黄橙色（10YR7/2）～灰黄褐色（10YR6/2）シルト土ブロック、マンガン粒を多量に含む。
	2	a 期機能時堆積土	10YR4/1　褐灰色	シルト	炭化物を層状に含み、焼土粒を多量に含む
	3	掘り方埋土	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	焼土粒を少量含む。
	4	掘り方埋土	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄橙色（10YR7/2）粘土質シルト土ブロック、黄褐色（10YR5/6）シルト土ブロックを多量に含み、炭化物粒を少量含む。
	5	掘り方埋土	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄橙色（10YR7/2）シルト土ブロック、黒褐色（10YR3/1）シルト土ブロック、マンガン粒を少量含む。
	6	掘り方埋土	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄橙色（10YR7/2）粘土質シルト土ブロック、マンガン粒を多量に含み、黒褐色（10YR3/1）土ブロックを少量含む。
	7	掘り方埋土	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	マンガン粒を多量に含み、黒褐色（10YR3/1）土ブロックを極少量含む。
	8	掘り方埋土	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒を多量に含み、黒褐色（10YR3/1）粘土質シルト土ブロックを極少量含む。
SI1470-P2	1	切取穴	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄橙色（10YR7/3）粘土質シルト土ブロック、酸化鉄粒を多量に含み、炭化物粒を少量含む。人為埋土か。
	2	柱痕跡	10YR3/1　黒褐色	粘土質シルト	
SI1470-P4	1	掘り方埋土	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄橙色（10YR7/2）粘土質シルト土ブロック、焼土ブロック、炭化物ブロックを多量に含む。
	2	柱痕跡	10YR3/1　黒褐色	粘土質シルト	
SI1470-P5	1	切取穴	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄橙色（10YR7/2）、Ⅴ層土ブロックを多量に含む。
	2	柱痕跡	10YR3/1　黒褐色	粘土質シルト	
SI1470-P7	1		10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	炭化物ブロック、焼土粒を全体に少量含む。
SI1470-P8	1		10YR2/1　黒色	シルト	炭化物粒、焼土粒を少量含む。
	2		10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	炭化物粒、焼土粒を少量含む。
SI1470-P9	1		10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	
P226	1		10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	
SK2267	1		10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄橙色（10YR7/2）粘土質シルト土ブロックを極少量含み、炭化物ブロック、焼土粒を多量に含む。
	2		10YR6/6　明黄褐色	粘土質シルト	Ⅴ層土ブロックを少量含む。

第 12 図　SI1470 竪穴住居跡・SK2267 土坑断面図（S=1/60）



図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量（cm）	外面調整	内面調整	写真図版
				遺構名	層位				
1	C-1083	土師器	坏	SI1470	掘り方埋土	口径：（12.6）	口縁部：ヨコナデ　体部：手持ちケズリ	口縁部～体部：ヨコナデ	7－8
2	C-1080	土師器	甕	SI1470	掘り方埋土		口縁部：ヨコナデ　体部：ハケメ	口縁部：ナデ　体部：ハケメ	7－12

第 13 図　SI1470 竪穴住居跡出土遺物

［出土遺物］SI1470b 住居跡の床面から、C－1090 土師器高坏（写真図版７－７）の脚部破片など、土師器の小片が多く出土した。掘り方埋土中からは、C－1083 土師器坏（第 13 図 1）、C－1080 土師器甕（第 13 図 2）、C－1082 土師器坏（写真図版７－10）など、土師器杯や甕の小片が多く出土した。C－1083 土師器坏は、体部がやや内湾し、口縁部に段を有する関東系土師器である。

SI1475 竪穴住居跡（第４・７図）

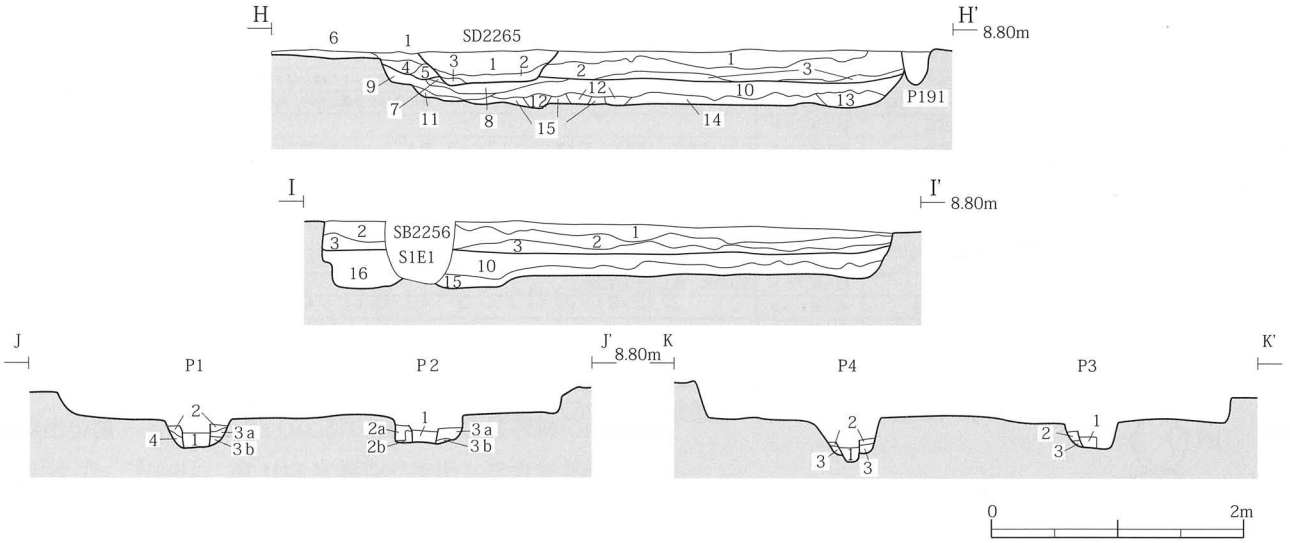
第 103 次調査で住居跡を検出し、床面までの精査を行っている。ここでは、今回の調査で検出した範囲の報告を行うこととし、これ以外の詳細については、『仙台市文化財報告書第 194 集　郡山遺跡ＸＶ』を参照していただきたい。

［検出位置・方向］調査区の北西端に位置し、住居跡の南東隅を検出した。

［重複］SD1503 溝跡よりも古い。

［規模］住居跡の北東辺 105㎝、南東辺 110㎝を検出した。
［堆積土］今回の調査で、新たに貼り床（２層）と掘り方埋土（３層）を確認した。
［床面］褐灰色のシルトを貼り、床面としている。検出面から床面までの深さは 20 ～ 25㎝である。
［掘り方］底面はほぼ平坦である。
［出土遺物］出土していない。

SI2257 竪穴住居跡（第４・13 図）
［検出位置・方向］調査区の中央部で検出した。方向は、カマドを基準とするN―55°―Wである。
［重複］SB2256 掘立柱建物跡、SD2265 溝跡、SK2270 土坑よりも古い。
［規模・平面形］規模は、東西 450㎝、南北 400㎝を測る。平面形は方形を呈する。
［堆積土］堆積土は 16 層に細分された。１～３層は住居内堆積土である。黒褐色や暗褐色の粘土質シルトなどで、Ⅲ層土のブロックを多く含み、人為的埋土の可能性がある。４・５層はカマド崩落土、６層は煙道内堆積土、７～ 11



遺構名		層　位	色　調	土　質	備　考
SI2257	1	住居内堆積土	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄ブロックを多量に含む。
	2	住居内堆積土	10YR2/2　黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄ブロックを多量に含む。
	3	住居内堆積土	10YR2/2　黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒を多量に含み、褐色（10YR4/4）土ブロックを少量含む。
	4	カマド崩落土	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	焼土粒を多量に含む。
	5	カマド崩落土	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	焼土ブロックを多量に含む。
	6	カマド煙道堆積土	10YR2/3　黒褐色	粘土質シルト	マンガン粒をやや多量に含み、酸化鉄粒を少量含む。
	7	カマド掘り方埋土	5YR4/3　にぶい赤褐色	シルト	
	8	カマド掘り方埋土	10YR3/3　暗褐色	シルト	
	9	カマド掘り方埋土	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	
	10	カマド掘り方埋土	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	Ⅲ層土ブロックを少量含む。
	11	掘り方埋土	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	Ⅳ層土ブロックをやや多量に含み、Ⅴ層土ブロックを少量含む。マンガン粒を多量に含む。
	12	掘り方埋土	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	Ⅴ層土ブロック、Ⅲ層土ブロックを微量含む。
	13	掘り方埋土	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	Ⅴ層土ブロック、Ⅲ層土ブロック、マンガン粒を微量含む。
	14	掘り方埋土	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	Ⅳ層土ブロックを少量含み、マンガン粒を多量に含む。
	15	掘り方埋土	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土ブロック（10YR6/4 ～ 7/4）を中量含み、マンガン粒を微量含む。
SI2257-P1	1	柱痕跡	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	黒色（10YR2/1）粘土ブロック、酸化鉄ブロックをやや多量に含む。
	2	掘り方埋土	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土ブロックをやや多量に含み、マンガン粒を多量に含む。
	3a	掘り方埋土	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土ブロックを多量に含み、酸化鉄粒を少量含む。
	3b	掘り方埋土	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土ブロック、酸化鉄ブロックを少量含む。
	4	掘り方埋土	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒を少量含む。
SI2257-P2	1	柱痕跡	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土ブロックを多量に含み、黒褐色（10YR3/1）粘土ブロックを少量含む。
	2a	掘り方埋土	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土ブロックを極多量に含む。
	2b	掘り方埋土	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土粒、酸化鉄粒、黒褐色（10YR3/1）シルト質粘土粒を全体に多量に含む。
	3a	掘り方埋土	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	マンガン粒を多量に含み、Ⅲ層土ブロックをやや多量に含む。
	3b	掘り方埋土	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土ブロックを多量に含む。
SI2257-P3	1	柱痕跡	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土粒を少量含む。
	2	掘り方埋土	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土ブロックをやや多量に含む。
	3	掘り方埋土	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土ブロックを少量含む。
SI2257-P4	1	柱痕跡	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土粒をやや多量に含む。
	2	掘り方埋土	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土ブロックを多量に含む。
	3	掘り方埋土	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土粒を少量含む。
SD2265	1		10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒、炭化物ブロックを多量に含む。
	2		10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒を多量に含む。
	3		10YR2/2　黒褐色	粘土質シルト	焼土ブロックを極多量に含む。

第 14 図　SI2257 竪穴住居跡・SD2265 溝跡断面図（S=1/60）

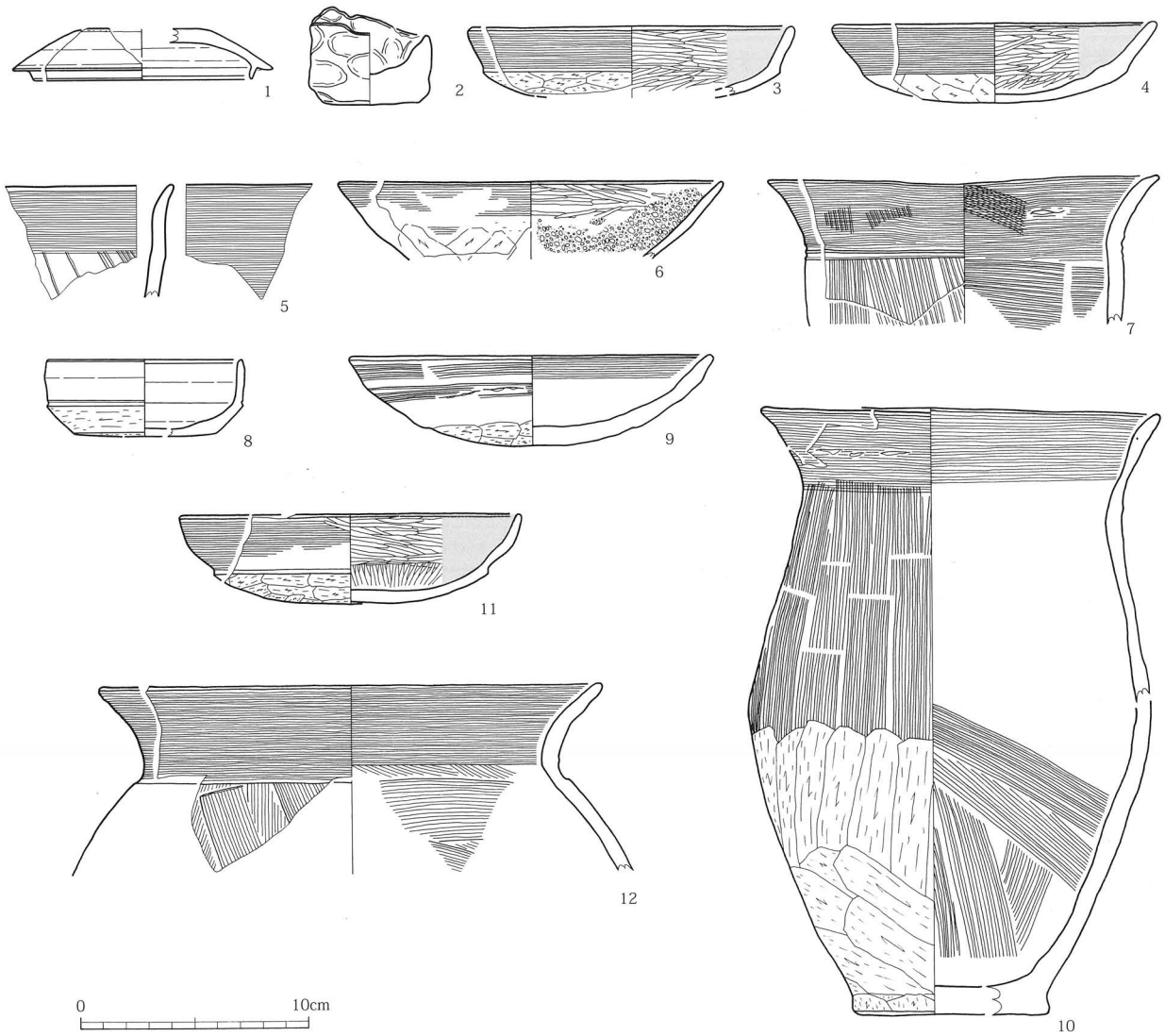
層はカマド掘り方埋土、12 ～ 15 層は掘り方埋土である。

［壁］やや外側に開いて外傾して立ち上がる。床面までの残存高は 15cm である。

［床面］掘り方埋土上面を床面とする。

［柱穴］４基（P1 ～ 4）確認した。柱穴掘り方の平面形は円形で、直径 50 ～ 60cm である。柱痕跡は、直径 15 ～ 20cm である。

［カマド］北西壁に付設される。カマドの側壁は、基本層Ⅲ層を削り出して造られている。焚口部は SD2265 溝跡によっ



図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量（cm）	外面調整	内面調整	写真図版
				遺構名	層位				
1	E-547	須恵器	蓋	SI2257	住居内堆積土	口径：（9.5）	ロクロナデ　天井部：回転ケズリ	ロクロナデ	8－1
2	C-1044	土師器	ミニチュア土器	SI2257	住居内堆積土	口径：5.1　底径：4.1　器高：4.3	体部：オサエメ	体部：オサエメ	8－2
3	C-1047	土師器	坏	SI2257	住居内堆積土	口径：（14.4）	口縁部：ヨコナデ　体部：手持ちケズリ	ミガキ　黒色処理	8－3
4	C-1108	土師器	坏	SI2257	住居内堆積土	口径：（14.4）　器高：3.5	口縁部：ヨコナデ 体部：手持ちケズリ（摩滅著しい）	ミガキ　黒色処理	8－4
5	C-1043	土師器	甕	SI2257	カマド内堆積土		口縁部：ヨコナデ　体部：ハケメ	口縁部～体部：ヨコナデ	8－16
6	C-1051	土師器	坏	SI2257	住居内堆積土	口径：（8.8）	口縁部：ヨコナデ　体部：軽い手持ちケズリ	口縁部～体部：ミガキ　漆膜付着	8－5
7	C-1059	土師器	甕	SI2257	床面	口径：（17.0）	口縁部：ハケメ→ヨコナデ　体部：ハケメ	口縁部：ハケメ→ヨコナデ　体部：ハケメ	8－20
8	E-552	須恵器	坏	SI2257	床面	口径：（8.5）　底径：6.2 器高：3.3	口縁部～体部：ロクロナデ 体下部～底部：回転ケズリ	ロクロナデ	8－18
9	C-1046	土師器	坏	SI2257	床面	口径：（16.0）　器高：（4.0）	口縁部：ヨコナデ　体部：ハケメ、ケズリ 底部：ケズリ、ナデ	口縁部：ヨコナデ	8－19
10	C-1061	土師器	甕	SI2257	床面	口径：17.2　底径：（8.2） 器高：26.7	口縁部：ヨコナデ　体部：ハケメ 体下部：ハケメ→手持ちケズリ	口縁部：ヨコナデ　体部：ハケメ	8－17
11	C-1042	土師器	坏	SI2257	掘り方埋土	口径：（14.4）	口縁部：ヨコナデ　体部：手持ちケズリ	口縁部～体部：ミガキ　黒色処理	8－21
12	C-1045	土師器	甕	SI2257	住居内堆積土	口径：（22.0）	口縁部：ヨコナデ　体部：ヘラナデ	口縁部：ヨコナデ　体部：ヘラナデ	8－13

第 15 図　SI2257 竪穴住居跡出土遺物

て壊されており、詳細は不明である。燃焼部の底面は概ね平坦で、煙道との境は 10cm 程の段となっている。煙道は、住居奥壁から 88㎝検出した。幅 20 ～ 30cm で、深さは 5cm である。

［出土遺物］住居堆積土中からは、土師器坏・甕、須恵器蓋・坏、ミニチュア土器が出土している。

土師器坏には、外面に段がある C － 1047（第 15 図 3）・C － 1116 土師器坏（写真図版８－ 11）、器壁が厚く外面に稜があり、内面底部に粘土紐の痕跡がある C―1108 土師器坏（第 15 図 4）、内面に漆皮膜が付着している C － 1051（第 15 図 6）、胎土に海面骨針体を多く含み、底部と体部の境にわずかに段がある C － 1060 土師器坏（写真図版８－ 8）、器壁が厚く、体部半ばに幅 5㎜程の沈線が施された C － 1050 土師器坏（写真図版８－ 9）がある。

土師器甕には、体部と口縁部の境に段がある C － 1045 土師器甕（第 14 図 12）、直線的に立ち上がる体部で、口縁部が L 字状に開く C － 1058 土師器甕（写真図版８－ 15）、球状に近い体部で、口縁部が垂直気味に立ち上がる C － 1100 土師器壺（写真図版８－ 12）が出土している。ミニチュア土器には、手捏ねの C － 1044 ミニチュア土器（第 15 図 2）がある。

須恵器には、内面にカエリがある E － 547・E － 567 須恵器蓋（第 15 図 1、写真図版８－ 6）、器台の脚部と考えられる E － 549 須恵器(写真図版８－ 7)、体部と底部の境に稜があり、体部が短く立ち上がる E － 550 須恵器坏(写真図版８－ 10)、還元不良の E － 551 須恵器坏の底部（写真図版８－ 14）がある。

カマド崩落土中からは C － 1043 土師器甕（写真図版８－ 16）が出土した。

床面からは、土師器坏・甕、須恵器坏が出土した。土師器坏は、丸底で浅い椀形を呈し内面に黒色処理が施されない C―1046 土師器坏 (第 15 図 9) が出土した。土師器甕には、頸部に２条の沈線が施され、口縁部がやや外反する C―1059 土師器甕（第 15 図 7）、体部半ばに最大径がある C － 1061 土師器甕（第 15 図 10）がある、須恵器は、平底で体下部に段を持ち、体部が直立する E － 552 須恵器坏（第 15 図 8）が出土した。

掘り方埋土中からは、土師器坏や甕の小片や鉱滓が出土した他、外面に段があり、口縁部が内湾する C － 1042 土師器坏（第 15 図 11）が出土している。

SI2258a・b 竪穴住居跡（第４・16 図）

２時期の変遷を確認した。古い時期の住居跡を SI2258a、SI2258a を東西南北方向に拡張した新しい時期の住居跡を SI2258b として記述する。

［検出位置・方向］調査区の南部に位置する。方向は、住居北東辺を基準として、N － 49°－ W である。

［重複］SK2271 土坑よりも古い。

［規模］SI2258a は、東西 330㎝、南北 305㎝である。SI2258b は、東西 400㎝、南北 450㎝である。平面形は、方形を呈する。

［堆積土］５層に細分される。１・２層は、基本層Ⅲ層の粘土質シルトを粒状に多く含む黒褐色やにぶい黄褐色の粘土質シルトである。SI2258b の掘り方埋土である。３層は焼土や炭化物をブロック状に含む黒褐色の粘土質シルトである。SI2258a に伴うカマド内堆積土である。４層は、にぶい黄褐色の粘土を粒状、ブロック状に多量に含む黒褐色の粘土質シルトである。SI2258a に伴う周溝内堆積土で、SI2258b を構築するときに人為的に埋め戻されたものである。５層は、にぶい黄褐色の粘土質シルトをブロック状に多量に含む灰黄褐色のシルトである。SI2258a に伴う掘り方埋土である。

［壁］SI2258a 住居跡の壁は、SI2258b 住居跡の構築時に削平され、不明である。SI2258b 住居跡の壁についても、削平され、不明である。

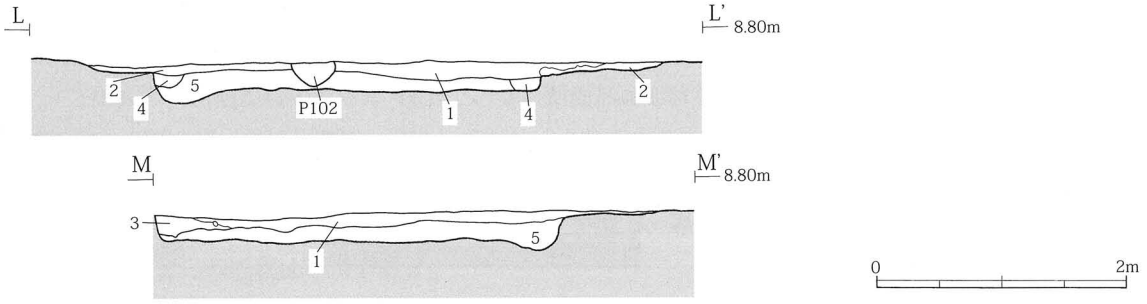
［床面］SI2258a 住居跡は、掘り方埋土上面を床面としている。SI2258b 住居跡は、削平され不明である。

［柱穴］検出されなかった。

［周溝］SI2258a 住居跡に伴う周溝を検出した。一部途切れるが、規模は、上幅 15 ～ 30㎝、深さ 10㎝である。断面形は U 字形を呈する。

［カマド］北西壁中央に付設される。右側壁を一部検出したが、削平が著しく、詳細は不明である。

［出土遺物］１層から土師器坏や甕の小片が出土した。床面からは、土師器坏や甕の小片や河原石が出土した。その中には、器形が半球形を呈し、体部内外面にミガキと黒色処理を施した C － 1054 土師器坏（第 19 図 1）出土している。



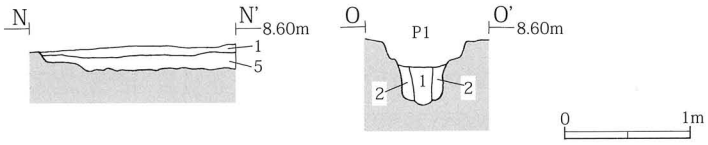
遺構名	層位		色調	土質	備考
SI2258	1	a 期埋め戻し土	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色（10YR4/3）粘土質シルト土粒を多量に含み、マンガン粒を少量含む。
	2	b 期掘り方埋土	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	マンガン粒を多量に含み、黒褐色（10YR3/1）粘土質シルト土ブロックをやや多量に含む。
	3	a 期カマド内堆積土	10YR3/1　黒褐色	粘土質シルト	焼土ブロックを多量に含み、炭化物ブロックを少量含む。
	4	a 期周溝堆積土	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色（10YR5/3）粘土を粒～ブロック状に多量に含む。人為的埋め立てとみられる。
	5	掘り方埋土	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	にぶい黄褐色（10YR5/3）粘土質シルト土ブロックを多量に含む。

第 16 図　SI2258 竪穴住居跡断面図（S= 1 /60）

SI2259 竪穴住居跡（第４・17 図）

［検出位置・方向］調査区の南端部に位置する。北東辺を基準として、N － 39° － W である。

［規模］北東辺 309㎝以上、南西辺 369㎝以上で、調査区外に延びる。平面形は、方形を基調とするものとみられる。



遺構名	層位		色調	土質	備考
SI2259	1	住居内堆積土	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒を多量に含み、炭化物粒を微量含む。
	5	掘り方埋土	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色（10YR5/3）土ブロックを多量に含む。
SI2259-P1	1	柱痕跡	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	炭化物ブロックを含む。
	2	掘り方埋土	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色（10YR5/3）粘土ブロックを含む。

第 17 図　SI2259 竪穴住居跡断面図（S= 1 /60）

［堆積土］５層に細分される。１層は、黒褐色の粘土質シルトで、住居内堆積土である。２層は炭化物を粒状に多量に含む暗褐色の粘土質シルトである。３・４層はにぶい黄褐色や灰黄褐色の粘土質シルトで、貼り床である。５層は、にぶい黄褐色のシルトをブロック状に含む黒褐色の粘土質シルトで、掘り方埋土である。

［壁］床面からわずかに開き気味に立ち上がる。床面までの深さは、２～８㎝である。

［床面］にぶい黄褐色や灰黄褐色の粘土質シルト土を貼り、床面としている。

［柱穴］１基（P1）確認した。柱穴掘り方の平面形は円形で、規模は直径 60㎝である。柱痕跡の直径は 20㎝である。

［出土遺物］１層から土師器坏や甕の小片、河原石が出土した。P1 の掘り方埋土中からは C-1057 土師器坏（写真図版７ - 16）が出土した。床面からは、口縁部がわずかに内湾し内面にミガキと黒色処理が施された C － 1056 土師器坏（第 19 図２）が出土している。

SI2260 竪穴住居跡（第４、18 図）

［検出位置・方向］調査区の南端部に位置する。南西辺を基準として、N － 42° － W である。

［重複］P261 よりも新しい。

［規模］北西辺 309㎝以上、南西辺 369㎝以上で、調査区外に延びる。平面形は、方形を基調とするものとみられる。

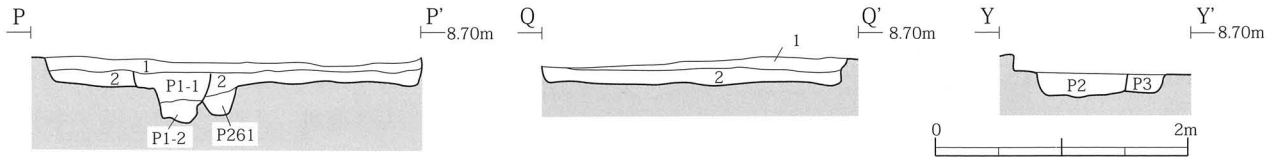
［堆積土］２層に細分される。１層は、黒褐色の粘土質シルトで、住居内堆積土である。２層は、黄褐色の粘土質シルトをブロック状に少量含む黒褐色の粘土質シルトで、掘り方埋土である。

［壁］床面からわずかに開き気味に立ち上がる。床面までの深さは、２～ 10㎝である。

［床面］掘り方埋土を床面としている。

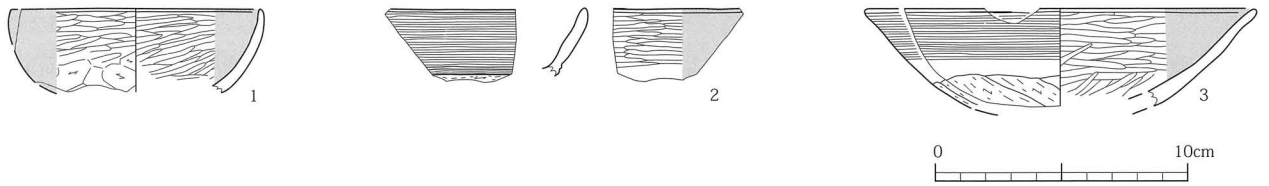
［柱穴］３基（P1 ～ 3）確認した。P1 は主柱穴とみられる。柱穴掘り方の平面形は円形で規模は直径 60㎝である。柱痕跡の直径は 15㎝である。P2 の平面形は楕円形で、規模は長軸 71㎝、短軸 57㎝、深さ 19㎝である。堆積土は１層である。P3 の平面形は楕円形で、規模は長軸 62㎝、短軸 30㎝以上、深さ 15㎝である。堆積土は１層である。

［出土遺物］ 1 層から土師器坏や甕の小片が出土した。床面からは、体部がわずかに外湾しながら外傾し、外面の体部に手持ちケズリ、口縁部にヨコナデを施し、内面にミガキと黒色処理を施した C － 1093 土師器杯（第 19 図 3）が出土している。



遺構名	層	位	色　調	土　質	備　考
SI2260	1	住居内堆積土	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒を全体にやや多量に含み、Ⅲ層土ブロックを少量含む。
	2	掘り方埋土	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土ブロックを少量含む。
SI2260-P1	1	掘り方埋土	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒を少量含む。
	2	掘り方埋土	10YR2/3　黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄ブロックをやや多量に含む。
SI2260-P2	1		10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土ブロックを少量含み、酸化鉄ブロックを微量含む。
SI2260-P3	1		10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土ブロックを少量含む。
P261	1		10YR4/4　褐色	粘土質シルト	酸化鉄ブロックをやや多量に含む。

第 18 図　SI2260 断面図 (S=1/60)



図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量（cm）	外面調整	内面調整	写真図版
				遺構名	層位				
1	C-1054	土師器	坏	SI2258	床面	口径：(10.0)	口縁部～体部：ミガキ　体下部：軽い手持ちケズリ　黒色処理	ミガキ　黒色処理	7 － 14
2	C-1056	土師器	坏	SI2259	床面		口縁部：ヨコナデ　体部：手持ちケズリ	ミガキ　黒色処理	7 － 15
3	C-1093	土師器	坏	SI2260	床面	口径：(15.4)	口縁部：ヨコナデ　体部：手持ちケズリ	ミガキ　黒色処理（被熱により一部色落ち）	7 － 17

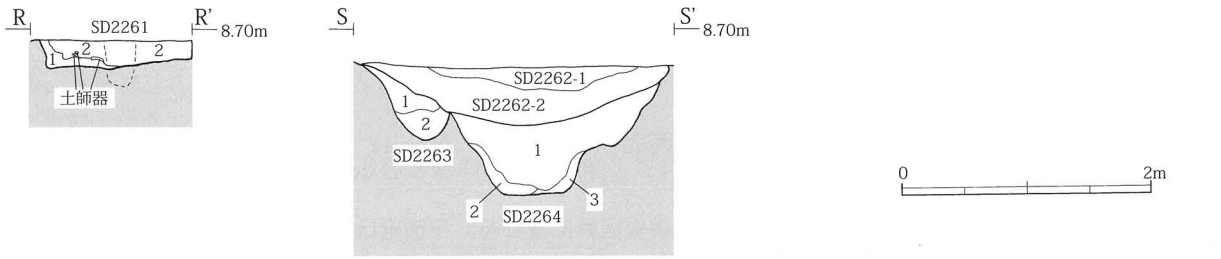
第 19 図　SI2258・2259・2260 出土遺物

（3）溝跡

SD2261 溝跡（第 20 図）

調査区中央部東端付近で検出した。検出長は 1.25 m で、さらに東へ延びる。方向は N － 64° － W である。上幅 31 ～ 32cm、底面幅は 28 ～ 30cm、検出面からの深さは 23cm である。堆積土は 2 層に分層される。1 層は炭化物と焼土を含む黒褐色粘土質シルト土で、2 層は非常に多量の炭化物が層状に含まれている黒褐色粘土質シルト土である。堆積土の含有物から、住居跡の煙道である可能性が考えられる。

遺物は、2 層上面から体部上半部が垂直気味に立ち上がり、口縁部はほぼ直線的に外傾する C － 1074 土師器甕（第 21 図 1）が出土した。



遺構名	層	位	色　調	土　質	備　考
SD2261	1		10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	焼土粒を少量、マンガン粒を多量に含む。Ⅲ層土ブロック、炭化物ブロックを多量に含む。
	2		10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	炭化物ブロックを極多量に含む。Ⅲ層土ブロックを少量含む。
SD2262	1		10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒を多量に含み、にぶい黄橙色（10YR6/3）シルト粒を微量含む。
	2		10YR4/1　褐灰色	粘土	灰黄褐色（10YR5/2）粘土質シルト土をラミナ状に含み、灰黄褐色（10YR5/2）土ブロックを底面に微量含む。
SD2263	1		10YR3/1　黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄橙色（10YR6/3）粘土質シルト土を底面にラミナ状に含む。
	2		10YR3/1　黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄橙色（10YR6/3）粘土質シルト土ブロックを底面に含む。
SD2264	1		10YR4/1　褐灰色	粘土	有機物（木片）を少量含む。
	2		N3/0　暗灰色	粘土	オリーブ灰色（2.5GY6/1）粘土粒を少量含む。
	3		5Y3/1　オリーブ黒色	粘土	オリーブ灰色（2.5GY6/1）粘土粒を多量に含む。

第 20 図　SD2261・2262・2263・2264 溝跡断面図 (S=1/60)

SD2262 溝跡（第 20 図）

調査区北端で検出した。検出長は 10.1 ｍで、さらに東西に延びるものと推定される。方向はＮ－ 83°－Ｅである。上幅は 230 ～ 240㎝、検出面からの深さは 46㎝である。断面形は皿状を呈する。堆積土は２層に分層され、レンズ状に堆積している。SD2263・2264 溝跡と重複しており、これらよりも新しい。

遺物は、堆積土中から土師器坏や甕、須恵器甕の小片や、河原石が出土したほか、Ｅ－ 555 須恵器蓋（第 21 図 2）が出土している。Ｅ－ 555 須恵器蓋は、復元口径が 9.5㎝と小型で、端部は短く斜め下方に折れ、内面にやや外側に反るカエリがある。つまみの形状は不明である。

SD2263 溝跡（第 20 図）

調査区北端で検出した。検出長は 3.0 ｍで、さらに東西に延びるものと推定される。方向はＮ－ 83°－Ｅである。上幅は 74㎝、検出面からの深さは 60㎝である。断面形は、北側上端が SD2262 溝跡に壊されているが、南側上端の形状からＵ字形を呈すると推定される。堆積土は２層に分層される。SD2262 溝跡よりも古い。SD2264 溝跡と接するが、新旧関係は不明である。

遺物は出土していない。

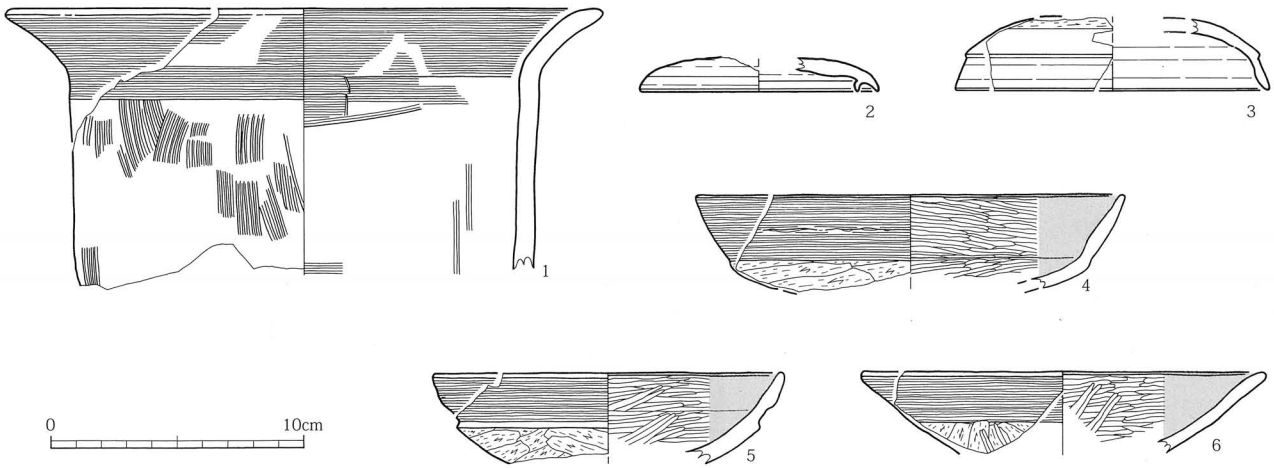
SD2264 溝跡（第 20 図）

調査区北端で検出した。検出長は 1.9 ｍで、さらに東西に延びるものと推定される。方向はＮ－ 83°－Ｗである。上幅は 61 ～ 77㎝、検出面からの深さは 51㎝である。壁は、南半部と北半部で形状が異なり、南半部は緩やかに外傾して立ち上がり、北半部は底面から外傾しながら立ち上がり、底面より 35㎝のところに平坦面があり、さらに上方は外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は３層に分層される。SD2262 溝跡よりも古い。

遺物は、土師器坏・甕、須恵器片が少量出土した。

SD2265 溝跡（第 20 図）

調査区中央部東壁からＮ－ 54°－Ｅの方向に延び、そこから 1.5 ｍ程で屈曲し、調査区西壁へ向かい、さらに西に延びるものと推測される。東壁から３ｍで北側に分岐している。上幅は 50 ～ 90㎝、底面幅 19 ～ 59㎝で、検出面からの深さは 30㎝である。断面計は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は３層に分層される。



図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量（㎝）	外面調整	内面調整	写真図版
				遺構名	層位				
1	C-1074	土師器	甕	SD2261	２層上面	口径：（23.0）	口縁部：ヨコナデ　体部：ハケメ（摩滅著しい）	口縁部：ヨコナデ　体部：ヘラナデ	９－１
2	E-555	須恵器	蓋	SD2262		口径：（9.5）	口縁部～体部：ロクロナデ	ロクロナデ	９－２
3	E-563	須恵器	蓋	SD2265	１層	口径：（12.2）	ロクロナデ　回転ケズリ	ロクロナデ	９－７
4	C-1077	土師器	坏	SD2265	１層	口径：（8.5）	口縁部：ヨコナデ　体部：手持ちケズリ	ミガキ　黒色処理	９－６
5	C-1076	土師器	坏	SD2265	１層	口径：（7.0）	口縁部：ヨコナデ　体部：手持ちケズリ	ミガキ　黒色処理	９－５
6	C-1069	土師器	高坏	SD2265	１層	口径：（16.0）	口縁部：ヨコナデ　体部：手持ちケズリ→ミガキ	ミガキ　黒色処理	９－４

第 21 図　SD2261・2262・2265 溝跡出土遺物

SB2256 掘立柱建物跡、SI2257 竪穴住居跡と重複し、これらよりも新しい。

遺物は、１層から土師器坏・高坏・甕の小片、須恵器蓋・甕の小片、鉱滓が出土した。土師器坏には内外面の底部と体部の境に段がある C － 1077 土師器坏（第 21 図 4）、外面の底部と体部の境の凹みが明瞭である C － 1076 土師器坏（第 21 図 5）、体部が直線的に外傾する C － 1069 土師器坏（第 21 図 6）がある。また、天井部と口縁部の境に段があり、口縁部が外下方に短くのびる E － 563 須恵器蓋（第 21 図 3）が出土した。

SD2266 溝跡（第４・12 図）

調査区中央東端で検出した。方向は N － 13°－ E である。検出長は 96 cm で、規模は上幅 15 ～ 33cm、底面幅 10 ～ 20cm である。検出面からの深さは 20cm 程で、断面形は皿状を呈する。堆積土は１層である。

遺物は、１層中から土師器坏や甕の小片が少量出土した。

（４）土坑

SK2267 土坑（第４・12 図）

SI1470 竪穴住居跡の掘り方埋土の底面で検出した。規模は、長軸 69㎝、短軸 60㎝以上、検出面からの深さは 22 ㎝である。平面形は楕円形を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。断面形は皿状である。堆積土は２層に分層される。SI1470 竪穴住居跡よりも古い。

遺物は、１層から土師器甕の小片が少量出土した。

SK2270 土坑（第４・22 図）

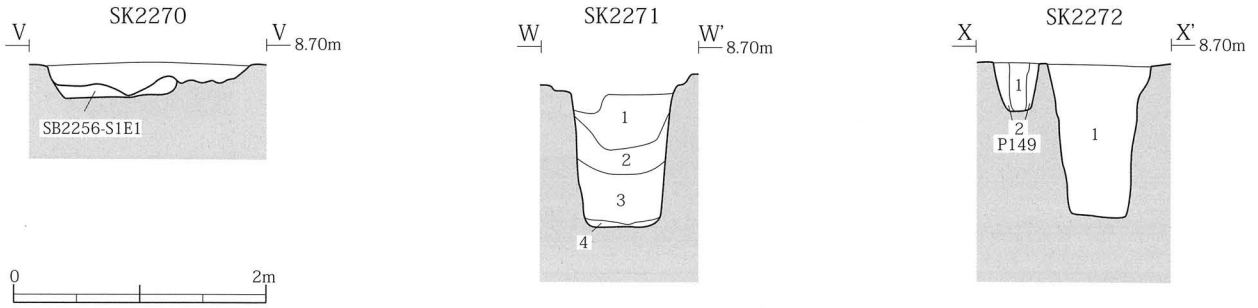
調査区中央で検出した。長軸 139㎝、短軸 127㎝で、検出面からの深さは 25㎝である。平面形は不整円形を呈し、壁面は緩やかに立ち上がる。断面形は皿状で、底面には凹凸がある。堆積土は１層である。SB2256 掘立柱建物跡 S1E1、SI2257 竪穴住居跡と重複し、これらよりも新しい。

遺物は、堆積土１層から土師器坏や甕の小片、礫石のほか、C － 1065 土師器坏（写真図版９－３）が出土した。

SK2271 土坑（第４・22 図）

調査区中央で検出した。規模は長軸 102㎝、短軸 83㎝で、検出面からの深さは 106㎝である。平面形は楕円形を呈する。断面形は円筒状である。堆積土は４層に分層される。いずれも自然堆積土である。形態や堆積土の状況から、素掘りの井戸跡の可能性がある。SI2258 竪穴住居跡よりも新しい。

遺物は、１層から磨面のある河原石、土師器坏・高坏・甕が出土した。土師器には、口縁部と体部の境に段があり、底部の丸みが弱い有段丸底の C － 1070 土師器坏（第 23 図 1）、体部が垂直気味に立ち上がり、口縁部が急激に外反する C － 1072 土師器甕（第 23 図 3）、口縁部がやや外反する C － 1067 土師器甕（第 23 図 2）、坏部が欠損し、



遺構名	層	位	色　調	土　質	備　考
SK2270	1		10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	焼土ブロック、炭化物粒を多量に含む。
SK2271	1		10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	褐色 (10YR4/4) 粘土質シルト土ブロックを少量含む。
	2		10YR3/1　黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒をやや多量に含む。
	3		10YR3/1　黒褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土ブロックをやや多量に含み、酸化鉄粒を多量に含む。
	4		10YR2/2　黒褐色	粘土	Ⅲ層土小ブロックを若干含む。機能時堆積とみられる。
SK2272	1		10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土ブロックを少量含む。

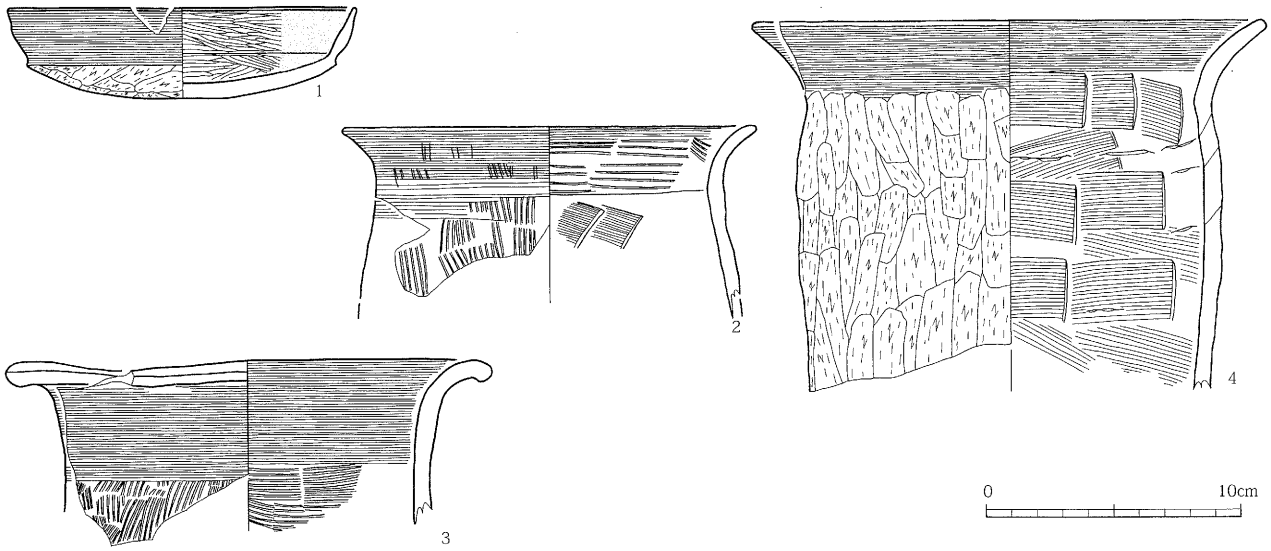
第 22 図　SK2270・2271・2272 土坑断面図（S=1/60）

脚柱部が「八」の字形に外下方にのび、裾部が外側に短く折れるＣ－1068 土師器高坏（写真図版９－15）が出土した。

SK2272 土坑（第４・22 図）

調査区中央東端で検出した。規模は長軸 83㎝、短軸 77㎝、検出面からの深さは 123㎝である。平面形は楕円形を呈し、壁は円筒形に垂直に立ちあがり、底面はほぼ平坦である。SK2271 土坑とほぼ同規模であり、素掘りの井戸跡の可能性がある。P149 よりも古い。

遺物は、１層から土師器甕の小片のほか、口縁部と体部の境にわずかな屈曲があり、口縁部内外面にヨコナデ、体部外面に手持ちケズリ、体部内面にヘラナデが施されたＣ－1109 土師器甕（第 23 図４）が出土した。



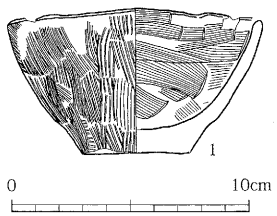
図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量（cm）	外面調整	内面調整	写真図版
				遺構名	層位				
1	C-1070	土師器	坏	SK2271	１層	口径:13.3　器高:3.6	口縁部：ヨコナデ　体部：手持ちケズリ	ミガキ　黒色処理	９－12
2	C-1067	土師器	甕	SK2271	１層	口径:(16.0)	口縁部：ハケメ→ヨコナデ　体部：ハケメ	口縁部：ヨコナデ→ハケメ　体部：ヘラナデ	９－14
3	C-1072	土師器	甕	SK2271	１層	口径:(18.8)	口縁部：ヨコナデ　体部：ハケメ	口縁部：ヨコナデ　体部：ハケメ	９－13
4	C-1109	土師器	甕	SK2272		口径：(19.8)	口縁部：ヨコナデ　体部：手持ちケズリ	口縁部：ヨコナデ　体部：ヘラナデ　輪積み痕	９－16

第 23 図　SK2271・2272 土坑出土遺物

（５）ピット

ピットは、Ⅲ層上面で 261 基検出した。重複関係やでⅡ層上面から掘り込まれているものもあり、主な遺構より新しいものが大半を占める。各ピットの規模や深さは一定していない。また、掘り方の平面形もさまざまで、円形、楕円形、隅丸方形などを呈する。柱痕跡の平面形は、円形あるいは半円形のものもある。ピットの堆積土中からは、土師器、須恵器などの小片が出土した。そのうち、P150 からは、Ｃ－1096 ミニチュア土器（第 24 図１）が出土した。また、P7 の底面から礎板と考えられるＫ－334（写真図版９－19）が出土している。

なお、調査区平面図（第４図）、調査区西壁断面図（第７図）及び遺構断面図（第 12・14・16・18・22 図）中において、遺構と重複するピットについて位置等を示している。



図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量（cm）	外面調整	内面調整	写真図版
				遺構名	層位				
1	C-1096	土師器	ミニチュア土器	P150		口径：(10.4)　底径:4.6 器高:6.1	口縁部～体部：ハケメ	ヘラナデ	９－20

第 24 図　P150 出土遺物

（6）その他の出土遺物

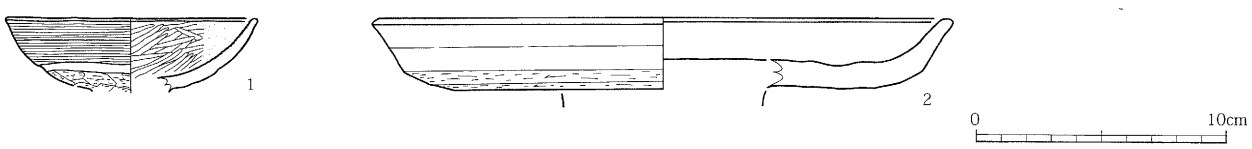
基本層中からは、以下の特徴を有する遺物が出土した。

Ｉｂ層からは、土師器坏・蓋・甕・壺、須恵器蓋・甕、陶器、土製品が出土した。

土師器坏には、口縁部から体部にかけて緩やかに内湾し、内面に黒色処理が施されたＣ－1099 土師器坏（第 25 図 1）、底部が平底風で、内面にミガキと黒色処理が施されたＣ－1094・Ｃ－1101 土師器坏（写真図版 10－2・写真図版 10－6）、丸底で口縁部がやや外反するＣ－1102 土師器坏（写真図版 10－7）、丸底で体下部に稜があり、体部から口縁部にかけて外傾し、内面にミガキと黒色処理が施されたＣ－1103 土師器坏（写真図版 10－8）、半球形の体部で、口縁端部が短く直立する関東系土師器のＣ－1104 土師器坏（写真図版 10－9）、口縁部が短く直立し、内面に黒色処理が施されたＣ－1105 土師器坏（写真図版 10－10）がある。その他、土師器には内外面にミガキが施されたＣ－1097 土師器蓋（写真図版 10－4）、小型のＣ－1098 土師器壺（写真図版 10－5）、小片のＣ－1106 土師器甕（写真図版 10－11）がある。

須恵器には、脚部が欠損し、底部と体部面に回転ケズリが施されたＥ－561 須恵器脚付盤（第 25 図 2）、口縁部が短く下方に屈曲するＥ－556 須恵器蓋（写真図版 10－12）、肩部に浅い沈線が２条施されたＥ－557 須恵器瓶類の小片（写真図版 10－13）、口縁端部がやや外側に張り出すＥ－560 須恵器甕片（写真図版 10－14）がある。陶器には、Ｉ－60 陶器（写真図版 10－15）、Ｉ－61 陶器（写真図版 10－16）があり、土製品にはＰ－64 紡錘車（写真図版 10－17）、Ｐ－65 土錘（写真図版 10－18）がある。

基本層Ⅱ層からは、土師器片、須恵器片が多数出土した。土師器には、体部から口縁部にかけてのＣ－1107 土師器坏片（写真図版 10－19）がある。須恵器には、底部が平底を呈し、SI2257 竪穴住居跡出土のＥ—552 須恵器坏と器形が類似するＥ－566 須恵器坏片（写真図版 10－24）、小片のＥ－558 須恵器高坏脚部片（写真図版 10－20）、内面に短いカエリが付くＥ－559 須恵器蓋（写真図版 10－22）、小片のＥ－564 須恵器高坏脚部片（写真図版 10－21）、口縁部が短く下方に屈曲するＥ－565 須恵器蓋片（写真図版 10－23）が出土している。

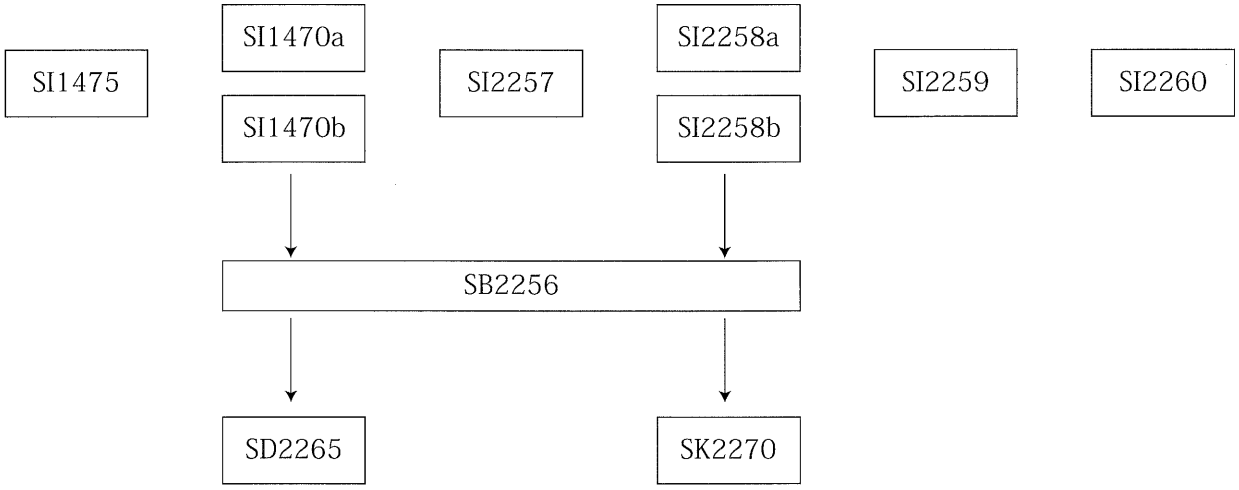


図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量（cm）	外面調整	内面調整	写真図版
				遺構名	層位				
1	C-1099	土師器	高坏		Ｉｂ層	口径（10.0）	口縁部：ヨコナデ　体部：手持ちケズリ　浅い沈線あり	口縁部～体部：ミガキ　黒色処理	10－1
2	E-561	須恵器	脚付盤		Ｉｂ層	口径：（23.2）	体部：ロクロナデ　底部～体下部：ロクロナデ→回転ケズリ	ロクロナデ	10－3

第 25 図　Ｉｂ層出土遺物

４　まとめ

今回の調査の調査では、郡山遺跡Ⅰ期官衙に関連する掘立柱建物跡と、郡山遺跡Ⅰ期官衙からⅡ期官衙にかけての時期と推測される竪穴住居跡が検出された。各遺構の重複関係や時期差については、以下のとおりである。ただし、並列して表記した遺構は、必ずしも同時期を示すものではない。



(1) SB2256 掘立柱建物跡について

SB2256 掘立柱建物跡は、柱穴掘り方の規模にばらつきがあるが、一辺１mに近い掘り方、柱痕跡も 20 ～ 27㎝で、方向も南桁行でＮ－ 57°－Ｗであり、Ⅰ期官衙を構成する建物跡と考えられる。これまでⅠ期官衙西辺付近で桁行が５間あるいはそれ以上の建物となる可能性のあるものは検出されていなかった。Ⅰ期官衙内でも丁寧に造られた遺構であり、Ⅰ期官衙西南辺付近でも重要な役割を果たしていたものと考えられる。

Ⅰ期官衙の全体からみれば、南西辺が中枢付近より拡大されたと考えられている（仙台市教育委員会 2005）ので、後半期に属するものと考えられるが、西南辺付近での官衙の機能がどのようなものであったか、今後、周辺での遺構のあり方を把握しながら検討していくべき課題である。

(2) 竪穴住居跡について

第 206 次調査では、第 103 次調査で検出されていた住居跡と、建て替えのある住居跡を含めて８軒が検出された。これらの住居跡の中でも、出土遺物によって時期を検討できるのは SI2257 竪穴住居跡のみである。

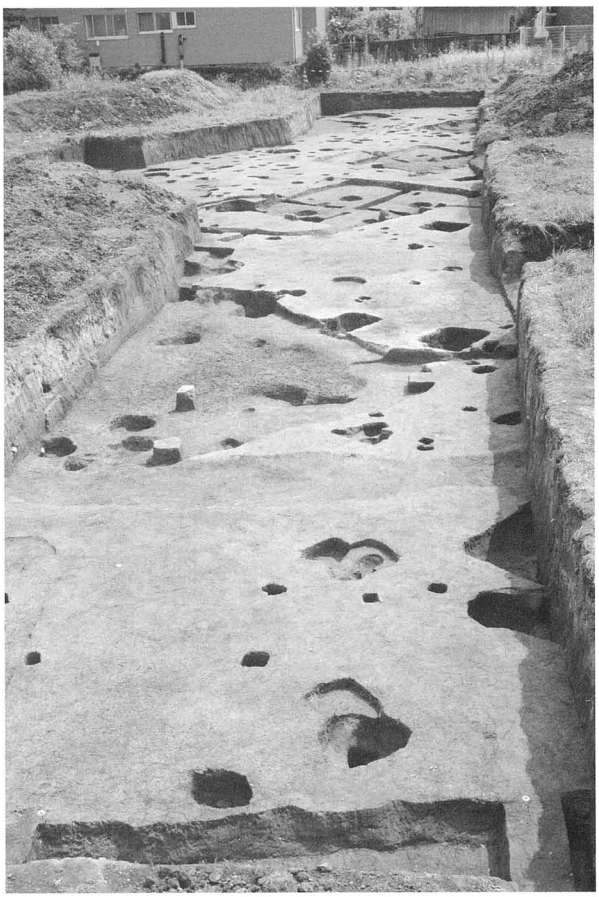
SI2257 竪穴住居跡は、Ⅰ期官衙期に属すると考えられる SB2256 掘立柱建物跡より、重複関係で古いことから、それ以前の遺構である。そこから出土しているＥ－ 552 須恵器坏（第 15 図８）は、郡山遺跡Ⅰ期官衙を構成する遺構である SI412 竪穴住居跡（第 35 次調査）から出土しているＥ－ 179 須恵器坏と同様の特徴を示すものである。SI412 竪穴住居跡において共伴している須恵器蓋（Ｅ－ 217・219）は、内面にカエリのあるもののみで、後にⅠ期官衙の南半部で検出された SX2093 性格不明遺構(第 147 次調査)から出土している須恵器蓋類と同様のものであり、この SX2093 性格不明遺構がⅠ期官衙の後半期に属することから、この須恵器類もその時期に属するものと考えられる。また、床面より出土しているＣ－ 1061 土師器甕（第 15 図 10）についてもⅠ期官衙に含まれる可能性を持つ SE1658 井戸跡（第 110 次調査）底面より出土しているＣ－ 778 土師器甕（第 110 次調査）と体部下半のケズリ調整の有無を除いては同様の形態、調整を示すものであるので、概ねⅠ期官衙期の中で捉えられるものと考えられる。したがって、この SI2257 竪穴住居跡も SB2256 掘立柱建物跡と同様にⅠ期官衙の時期に該当する遺構と考えられる。

その他、SI2258・2259・2260竪穴住居跡については、遺構の残存状況が良好ではなく、出土遺物も少ないことから、時期の決定が困難である。

＝引用・参考文献＝

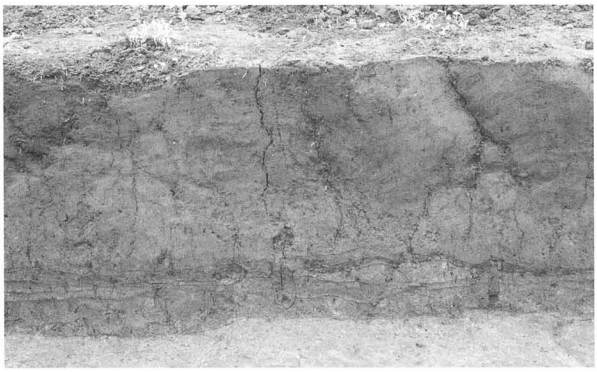
今泉隆雄　2005「付章　古代国家と郡山遺跡」『郡山遺跡発掘調査報告書　総括編(1)』
仙台市文化財調査報告書第283集
小山正忠、竹原秀雄　1989『新版標準土色帖』1989年版　日本色研事業株式会社
小口雅史　2003「古代北東北の広域テフラをめぐる諸問題」『日本律令制の展開』吉川弘文館
古代土器研究会2005「宮城県中央部」『東北古代土器集成 - 古墳後期～奈良・集落編 -〈宮城〉』
仙台市教育委員会　1984「Ⅲ　第35次調査」『郡山遺跡Ⅳ』仙台市文化財調査報告書第64集
仙台市教育委員会　1995「Ⅳ　第103次調査」『郡山遺跡ＸＶ』仙台市文化財調査報告書第194集
仙台市教育委員会　1997「Ⅲ　第110次調査」『郡山遺跡ＸⅦ』仙台市文化財調査報告書第215集
仙台市教育委員会　2004「Ⅲ　第147次調査」『郡山遺跡24』仙台市文化財調査報告書第269集
仙台市教育委員会　2005『郡山遺跡発掘調査報告書　総括編(1)』仙台市文化財調査報告書第283集
仙台市教育委員会　2010「大野田官衙遺跡」『第36回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』pp.51-58
仙台市教育委員会　2011「第8節大野田官衙遺跡」『下ノ内遺跡・春日社古墳・大野田官衙遺跡ほか』
仙台市文化財調査報告書第390
長島榮一　2009『郡山遺跡』同成社
町田洋・新井房夫2003『新編　火山灰アトラス』東京大学出版会
村田晃一　2007「Ｖ．宮城県中部から南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』

1.　調査区全景（南から）



2.　調査区全景（北から）

3.　調査区西壁断面（南端部）

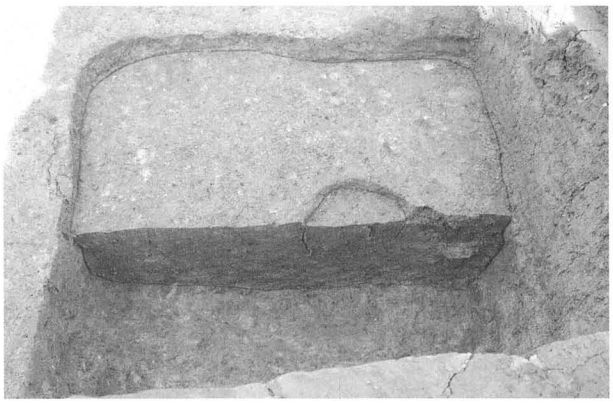


4.　調査区西壁断面（中央部）

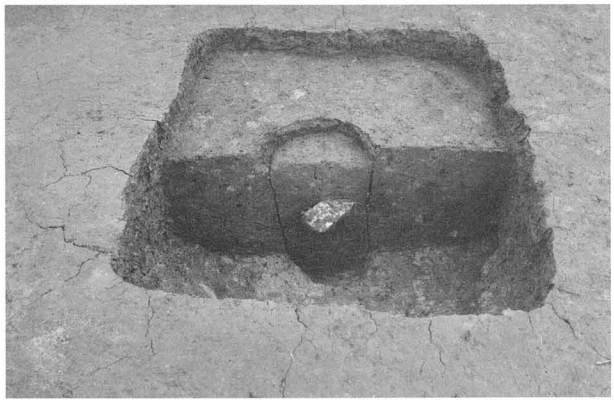
5.　土層断面

写真図版 1　調査区全景・土層断面

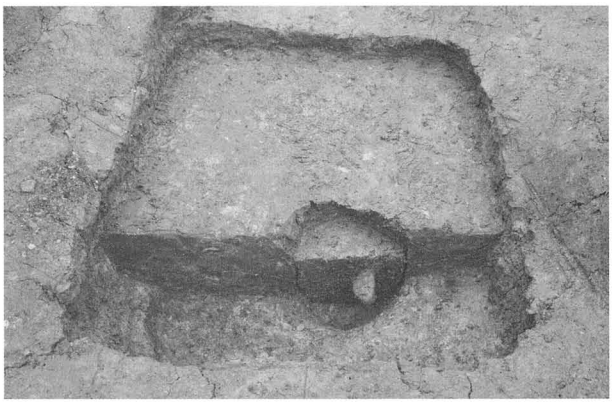
1.　S1E1 ～ S1E4 検出状況（南東から）



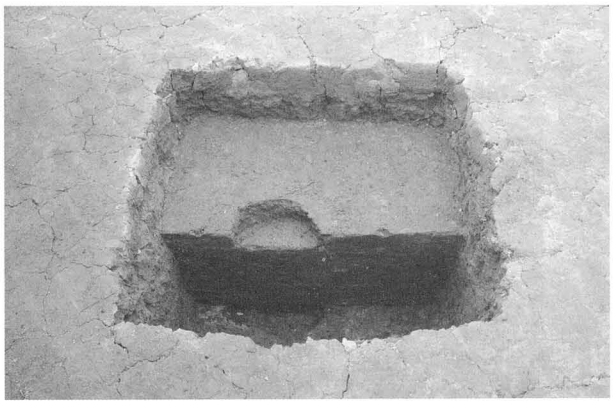
2.　S1E1 断面（南から）



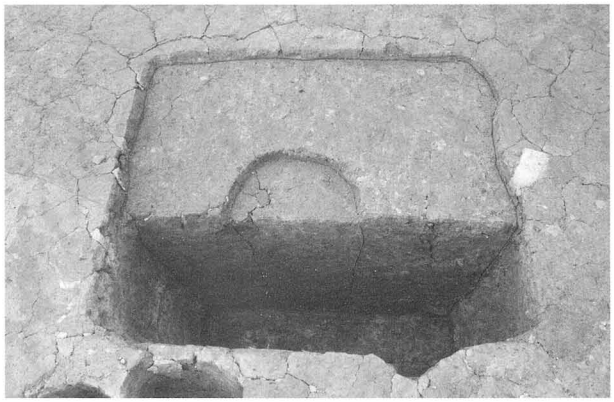
3.　S1E2 断面（南西から）



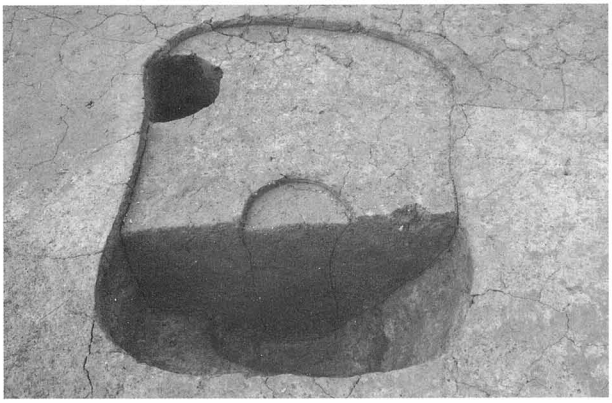
4.　S1E3 断面（南西から）



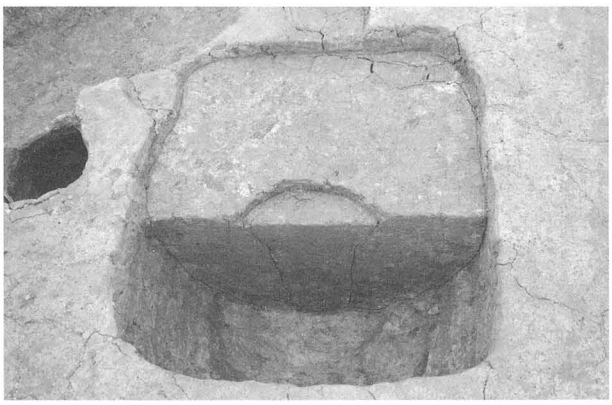
5.　S1E4 断面（南西から）



6.　S3E4 断面状況（南西から）



7.　S3E5 断面状況（南西から）



8.　S3E6 断面状況（南西から）

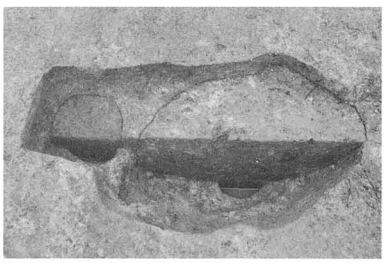
写真図版 2　SB2256

1.　SI1470 炭化物範囲確認状況（南東から）

2.　SI1470 ピット検出状況（南東から）

3.　SI1470 東西ベルト断面（南西から）

4.　SI1470-P2 断面（東から）

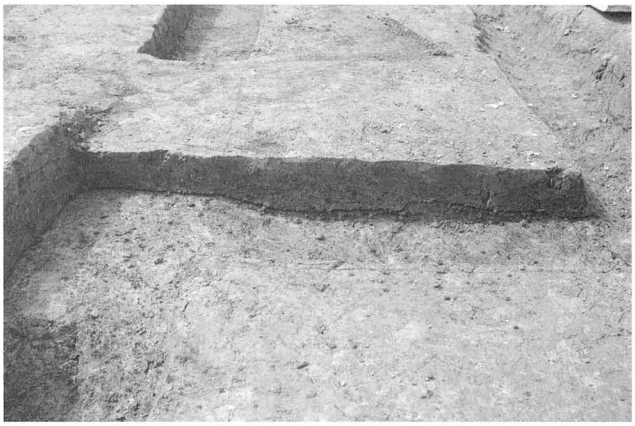


5.　SI1470-P5 断面（南から）

6.　SI1475 掘り方断面状況（北東から）

7.　SI1475 完掘状況（北東から）

8.　SI2258 全景（南東から）

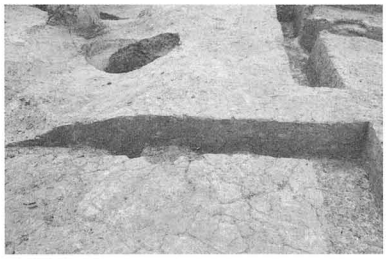


9.　SI2258 南北ベルト北側断面（東から）

写真図版 3　SI1470・SI1475・SI2258

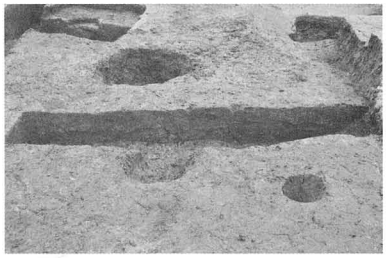
1.　全景（南東から）

2.　カマド完掘状況（南東から）

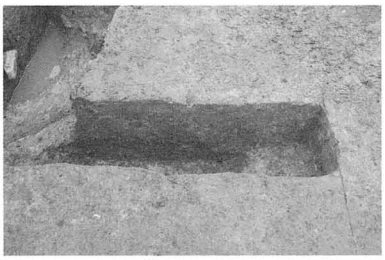


3.　東西ベルト西側断面（南から）

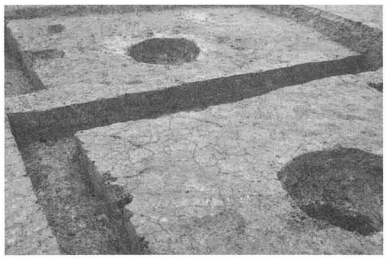
4.　東西ベルト東側断面（南から）



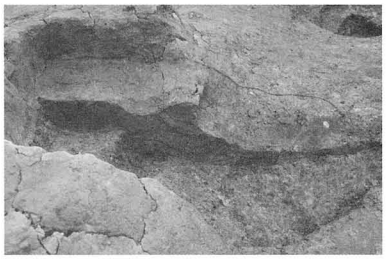
5.　東西ベルト東側断面（南から）



6.　南北ベルト北側断面（西から）

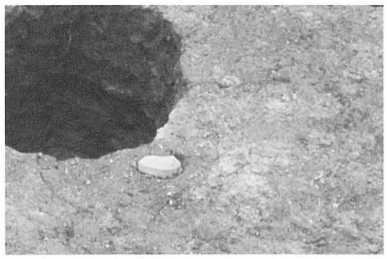


7.　南北ベルト南側断面（西から）

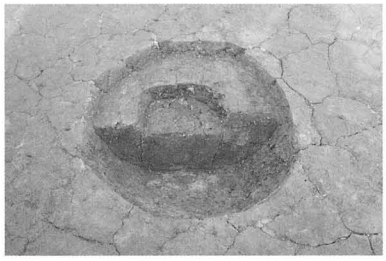


8.　カマド堀方断面（南西から）

9.　C-1061 土師器甕出土状況（南東から）



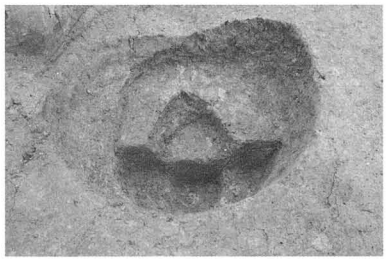
10.　E-552 須恵器坏出土状況（南東から）



11.　P1 断面（南西から）

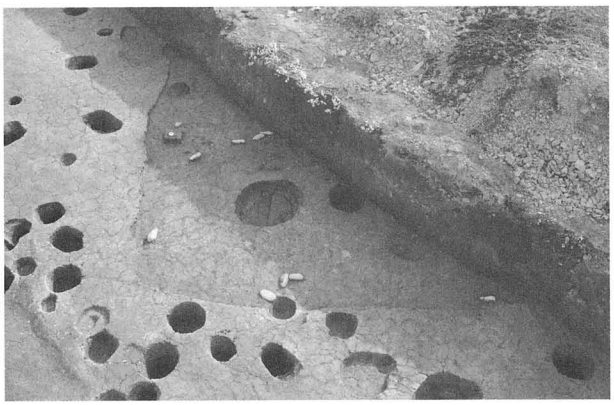
12.　P2 断面（南西から）

13.　P3 断面（南西から）



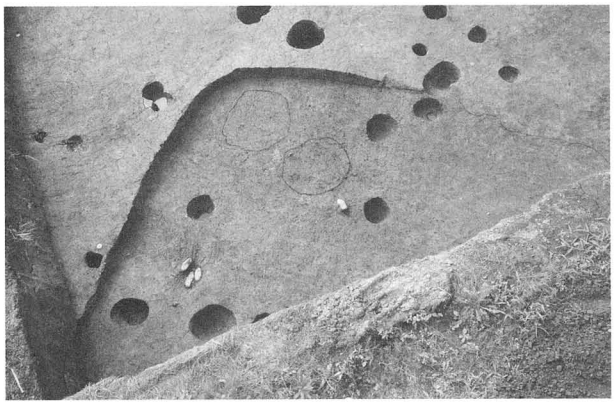
14.　P4 断面（南西から）

写真図版4　SI2257

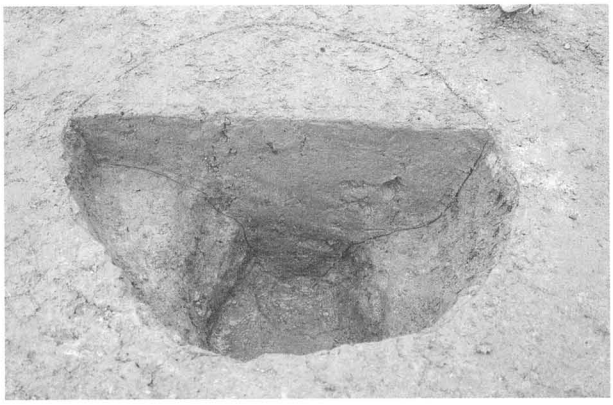


1.　SI2259 床面検出状況（北東から）

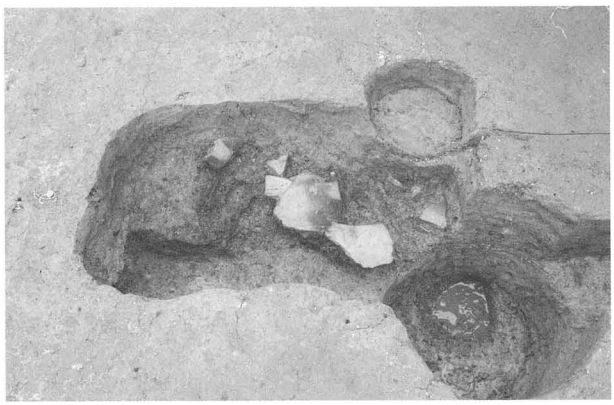
2.　SI2259 断面（北東から）



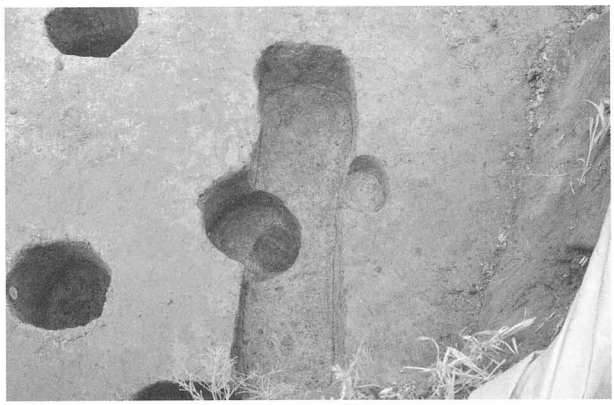
3.　SI2260 床面検出状況（東から）



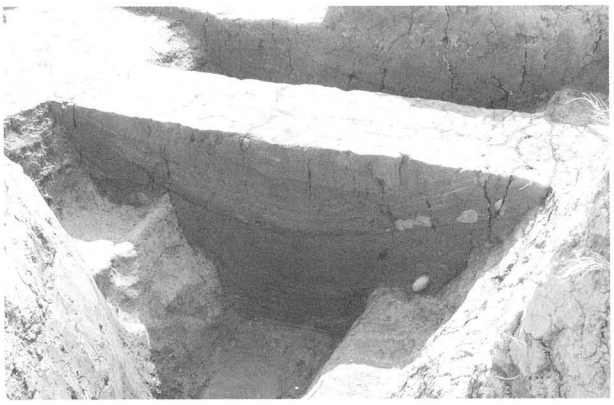
4.　SI2260-P1 断面（南西から）



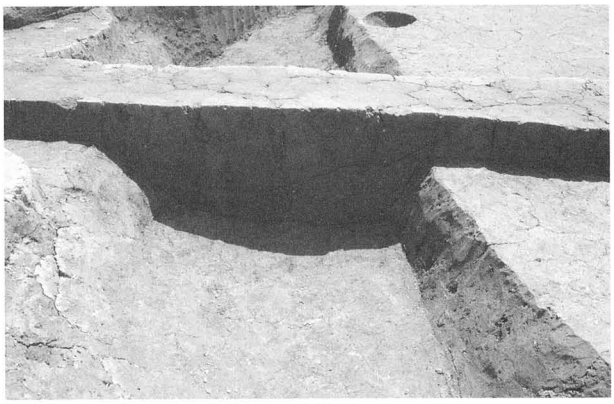
5.　SD2261 遺物出土状況（南から）



6.　SD2261 完掘状況（東から）

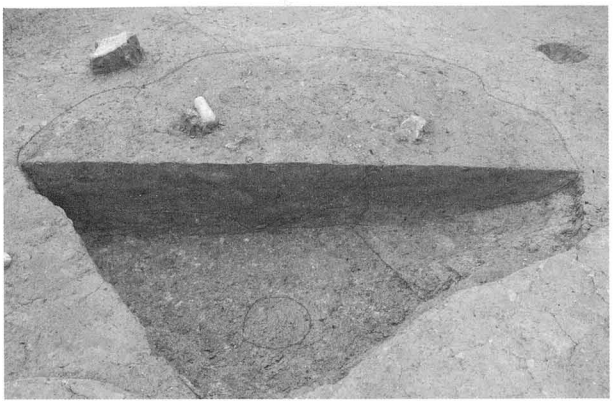


7.　SD2262・2263・2264 断面（北東から）

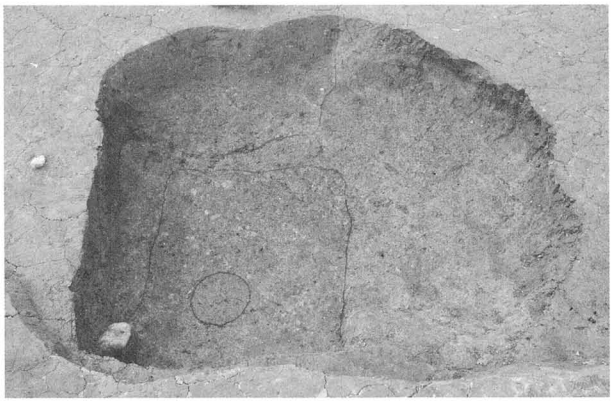


8.　SD2265 断面（西から）

写真図版 5　SI2259・SI2260・SD2262・SD2263・SD2264・SD2265

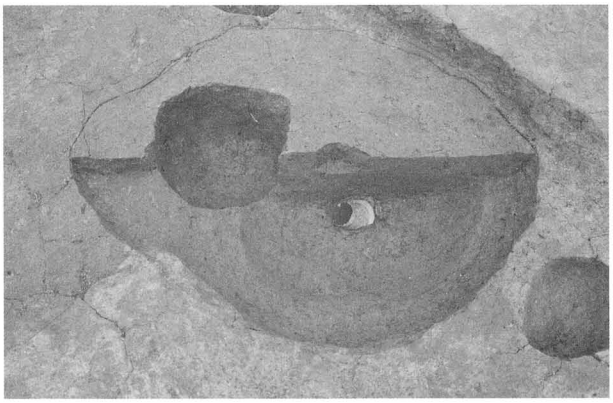


1.　SK2270 断面（南東から）

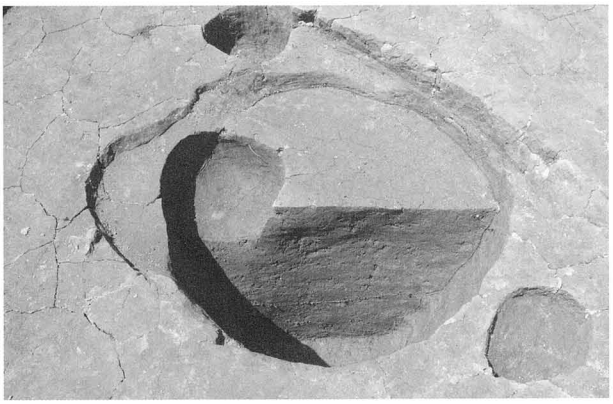


2.　SK2270 完掘・SB2256-S1E1 検出状況（東から）

3.　SK2271 上層遺物出土状況（南から）

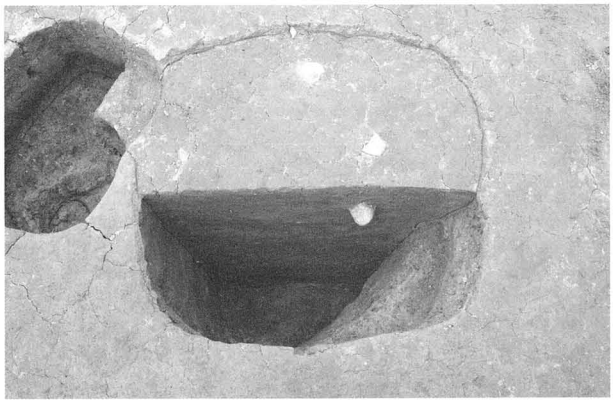


4.　SK2271 遺物出土状況（南から）



5.　SK2271 断面（東から）

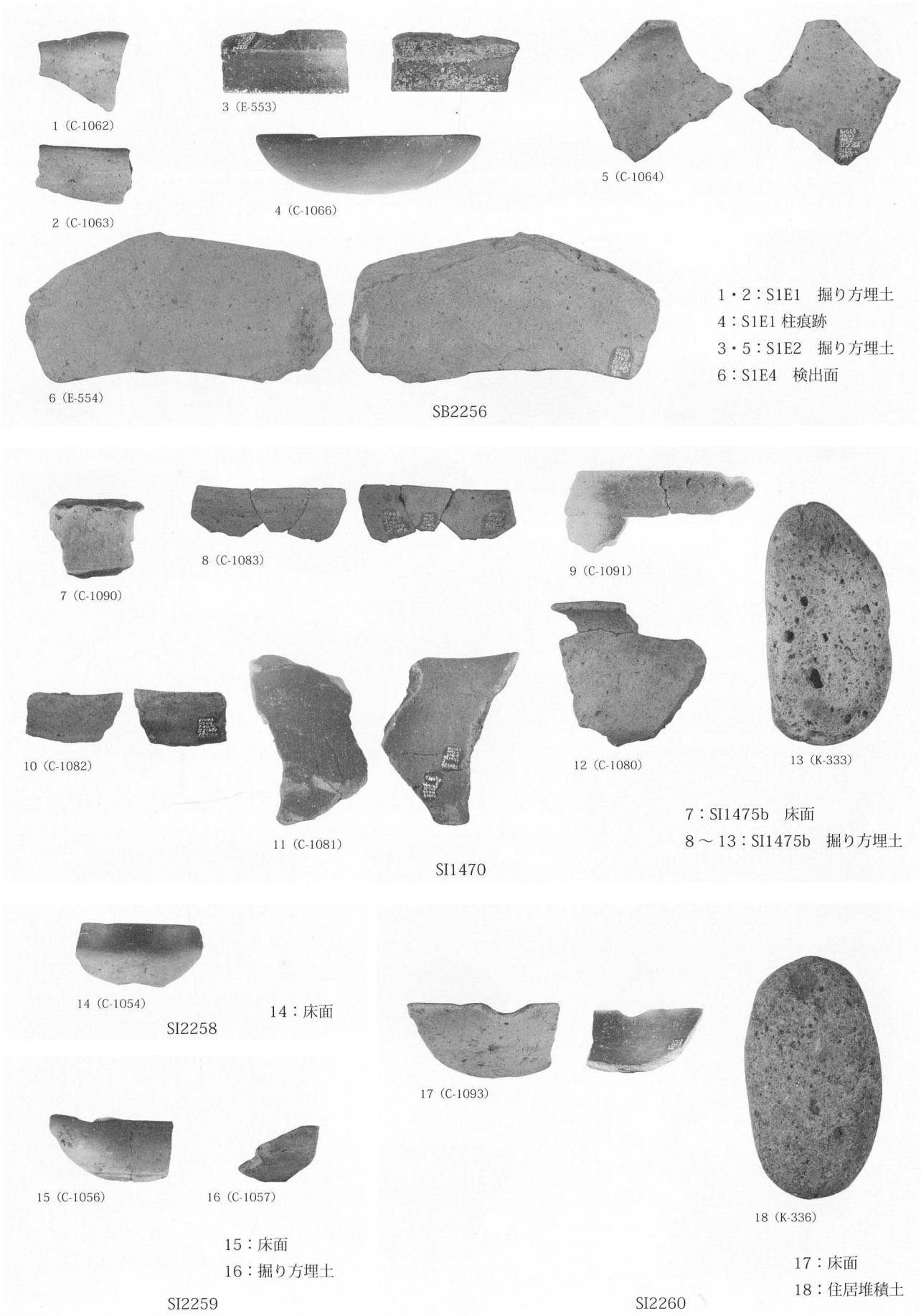
6.　SK2271 完掘状況（南西から）



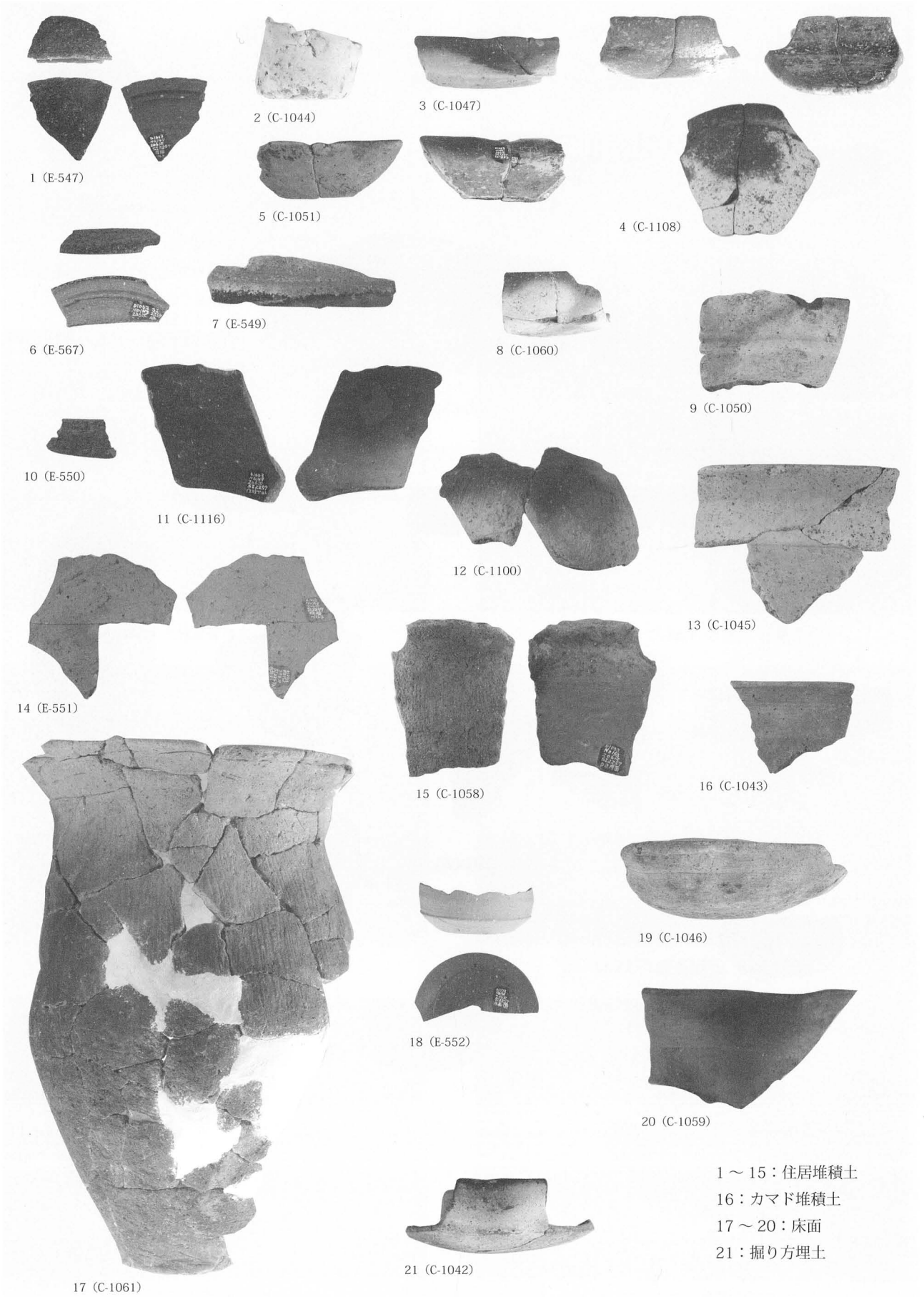
7.　SK2272 断面（南から）

8.　P7 礎板石検出状況（南から）

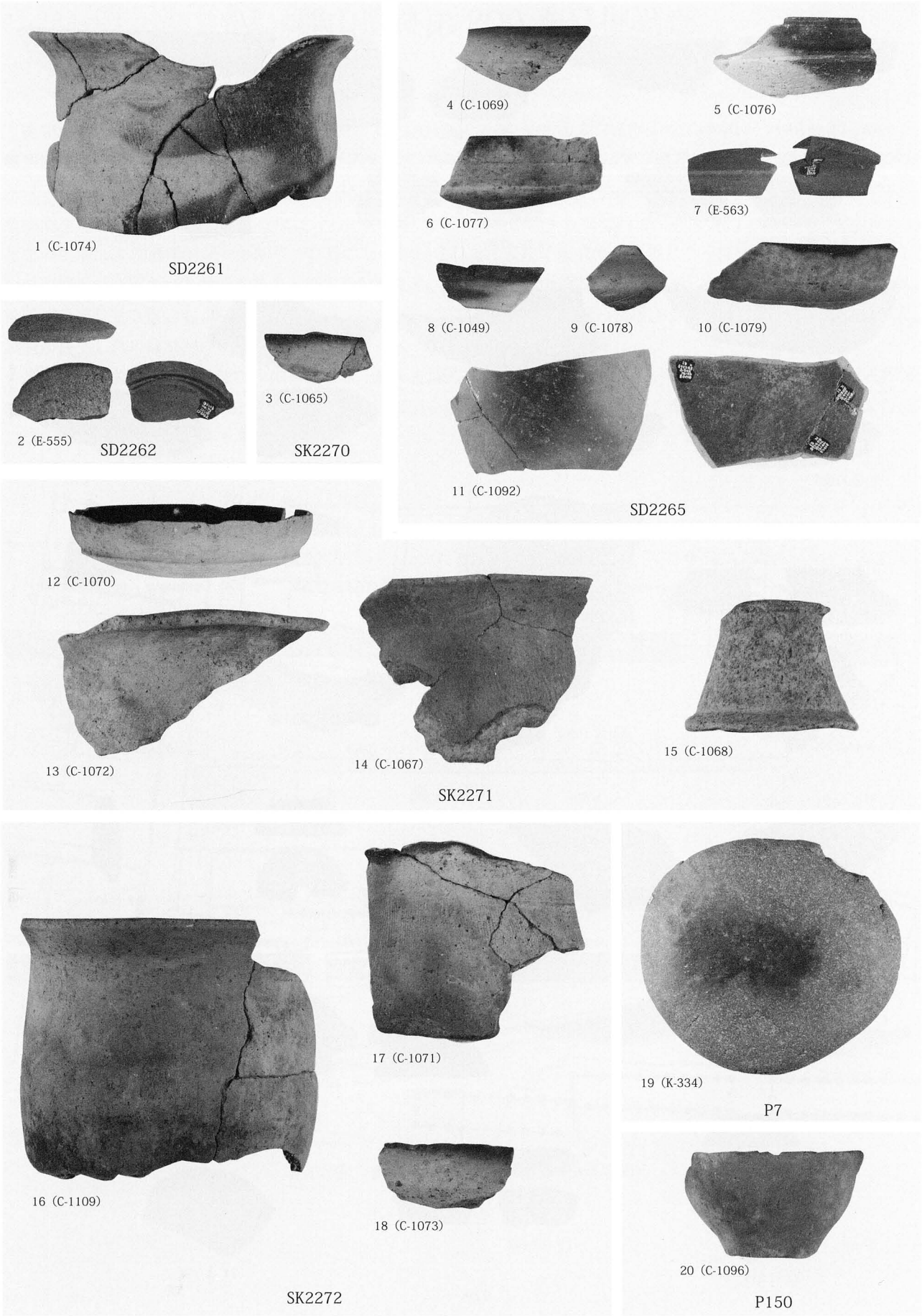
写真図版 6　SK2270・SK2271・SK2272・P7



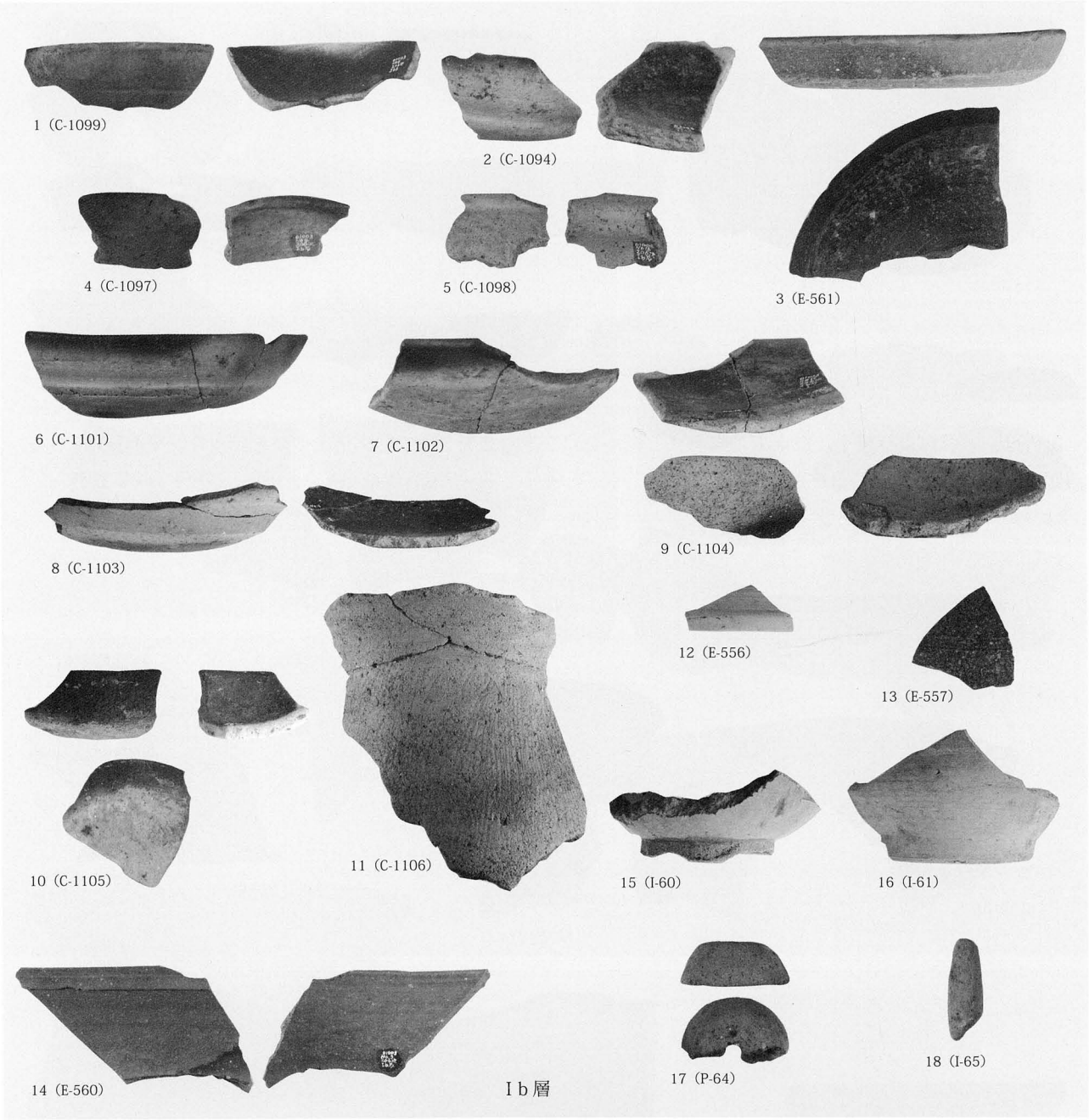
写真図版7　SB2256・SI1470・SI2258・SI2259・SI2260出土遺物

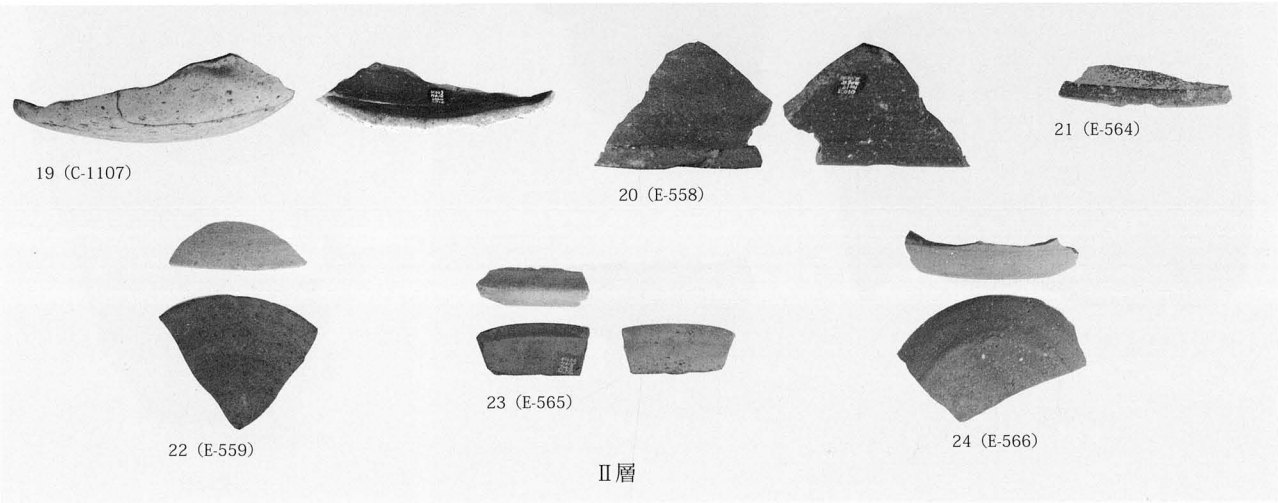


写真図版8　SI2257出土遺物



写真図版 9　SD2261・SD2262・SD2265・SK2270・SK2271・SK2272・P7・P150 出土遺物





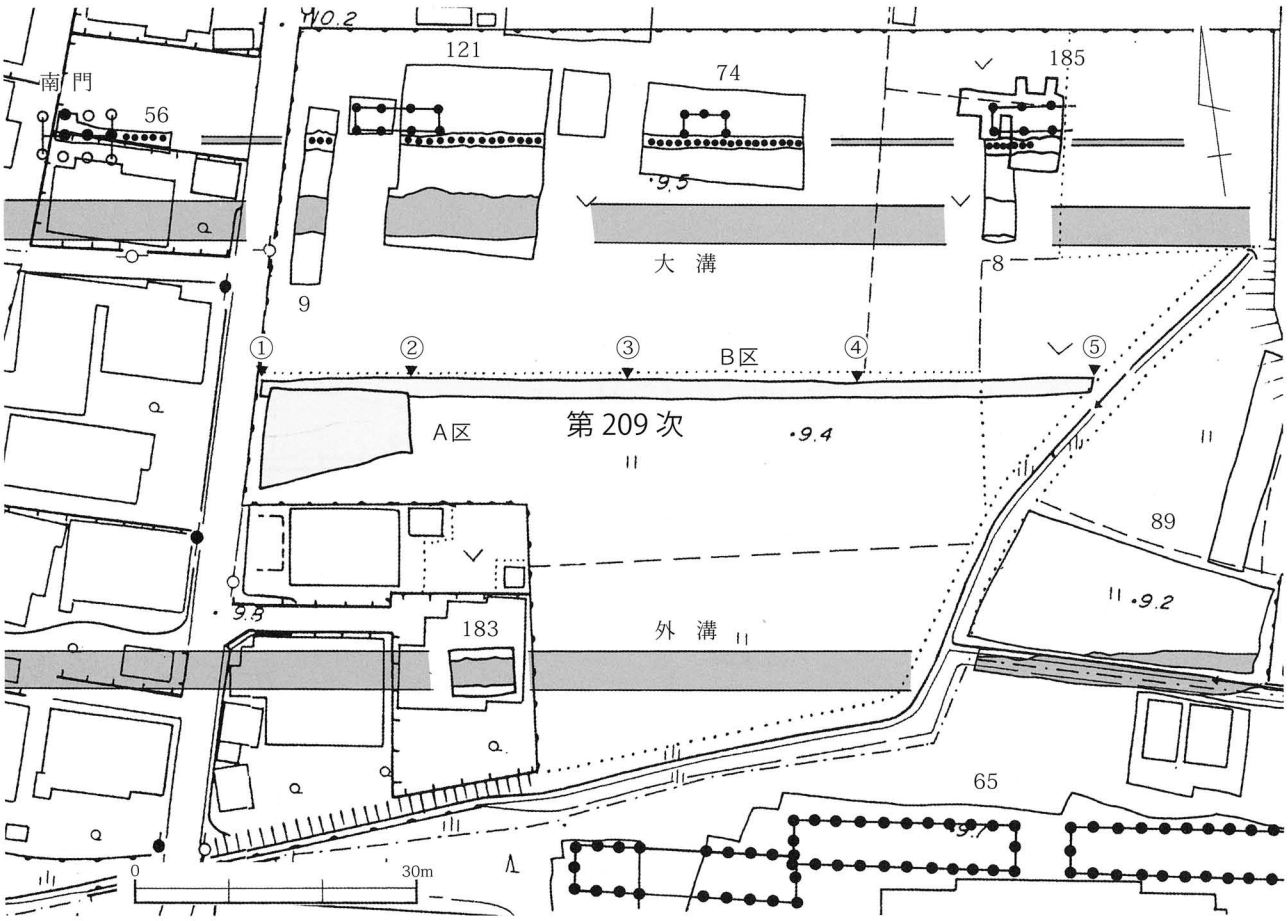
写真図版10　Ⅰb層・Ⅱ層出土遺物

Ⅳ．郡山遺跡第 209 次発掘調査

１　調査に至る経緯と調査方法

第 209 次調査は、宅地造成工事に伴う事前の本発掘調査である。仙台市太白区郡山５丁目 40 － 1・42 － 1 において、株式会社サンホームズより宅地造成工事が計画され、平成 23 年５月 30 日付で「開発行為事前協議書」が提出された（平成 23 年６月６日付 H23 教生文第 358 号で回答）。これを受けて、造成計画地内の汚水枡設置箇所において遺構面までの深さ確認調査を行ったところ、西側の既存道路と接続する宅地内道路部分の約 160㎡が、埋設管付設などの工事により遺構面が一部削平されることが想定された。また、造成地の北辺となる擁壁工事部分についても、一部遺構面が削平される箇所があると想定されたため、合計 280㎡の本発掘調査を実施した。宅地内道路部分をＡ区、擁壁工事部分をＢ区とし、平成 23 年９月１日から９日までＡ区の調査を行った後、Ｂ区の調査を 12 日から開始した。調査が終了したのは９月 15 日である。

調査は、重機により盛土及び水田耕作土（Ⅰ層）を除去後、Ⅱ層上面で遺構検出作業を行った。平面図は、遺構配置図を平板によって縮尺 1/50 で作成し、遺構詳細図を縮尺 1/20 で適宜作成した。断面図は縮尺 1/20 で作成した。記録写真は、フィルムカメラ（35㎜カラーリバーサル、同モノクロ）及びデジタルカメラを使用した。

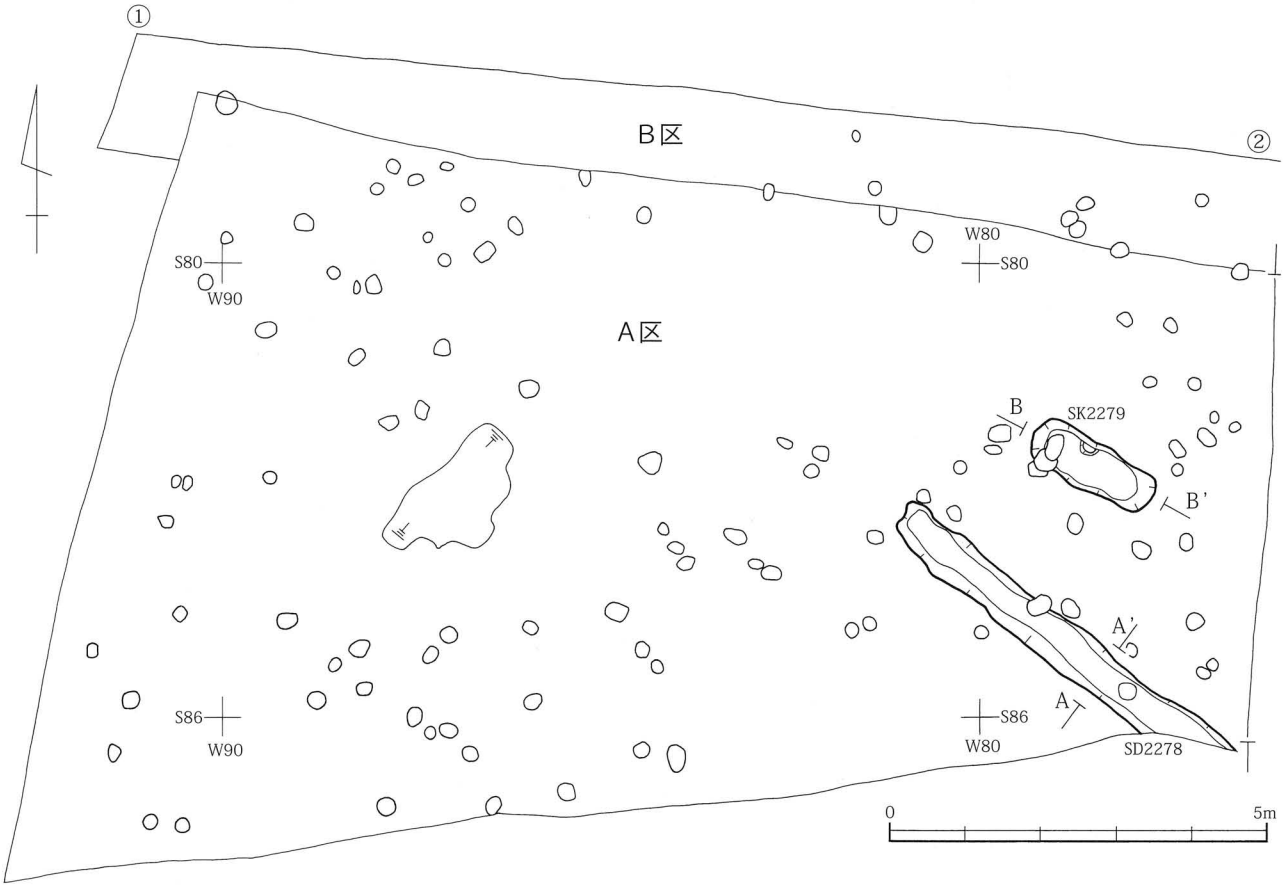


第 26 図　第 209 次調査区位置図（S=1/800）

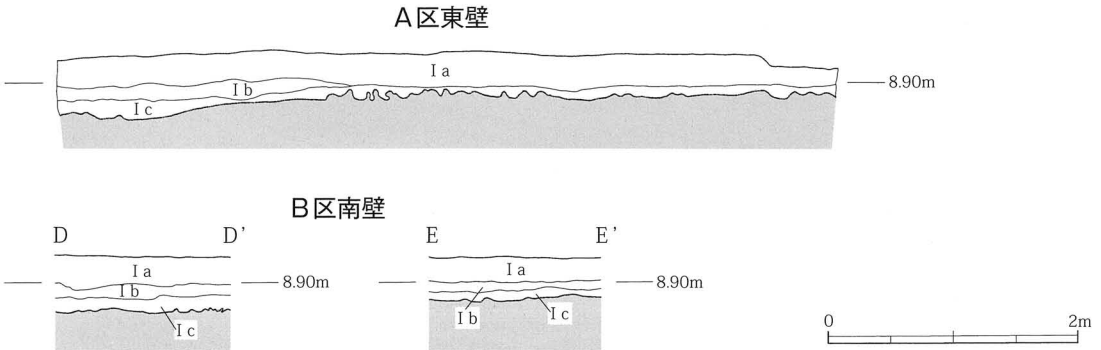
2　基本層序

調査区は、近年まで水田として利用されており、耕作土であるＩａ・Ｉｂ・Ｉｃ層があり、その下のⅡ層上面で遺構が検出された。

Ｉａ層　10YR6/2　灰黄褐色　シルト　酸化鉄を多量に含む。
Ｉｂ層　10YR5/2　灰黄褐色　シルト　酸化鉄を多量に含む。
Ｉｃ層　10YR4/1　褐灰色　シルト　酸化鉄を下面に多く含み、マンガン粒を少量含む。
Ⅱ　層　10YR6/4　にぶい黄橙色　粘土質シルト　酸化鉄をやや多く含む。

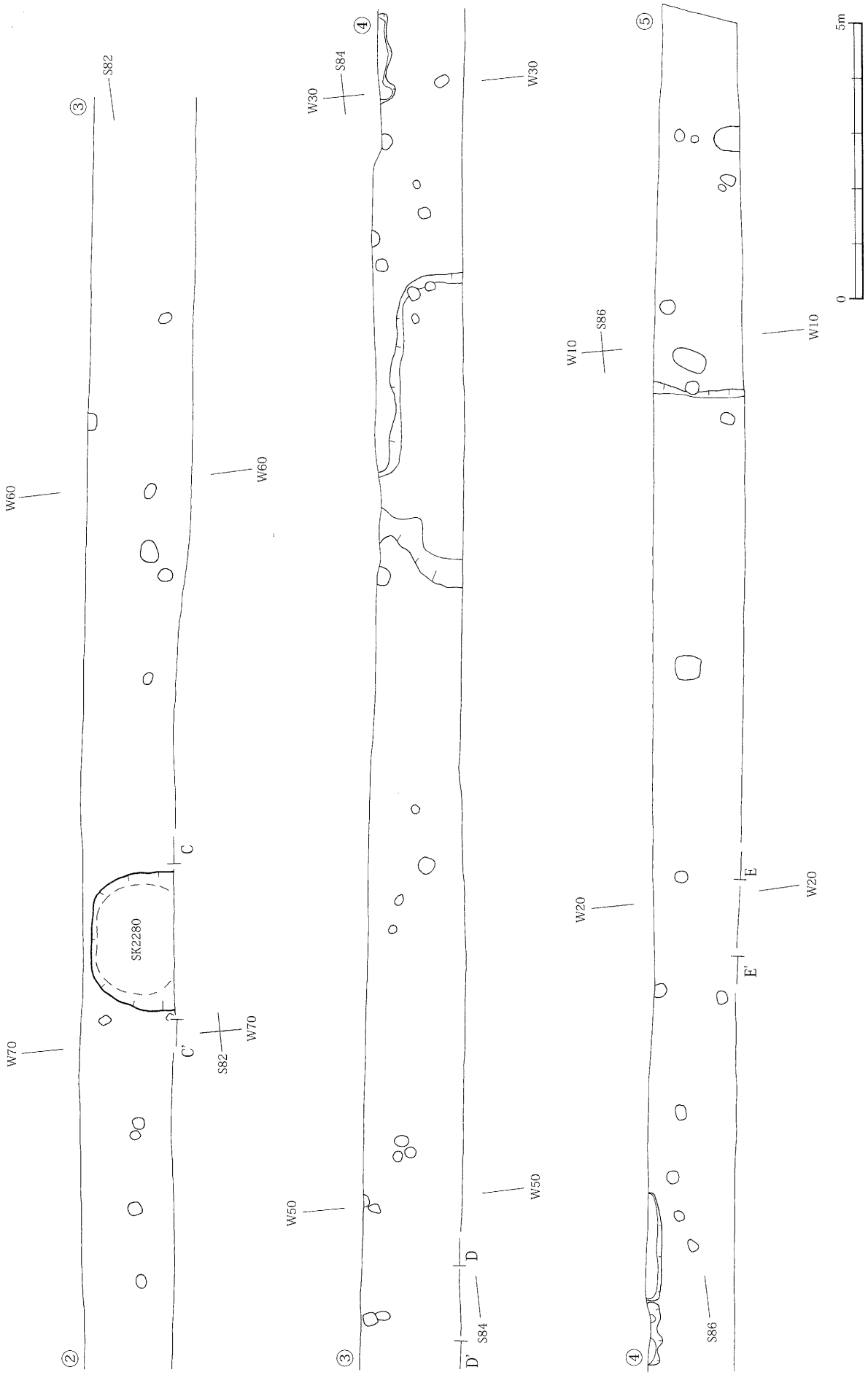


第 27 図　A 区・B 区－①区平面図（S ＝ 1/100）



	層　位	色　調	土　質	備　考
基本層	Ｉａ	10YR6/2　灰黄褐色	シルト	酸化鉄を多量に含む。
	Ｉｂ	10YR5/2　灰黄褐色	シルト	酸化鉄を多量に含む。
	Ｉｃ	10YR4/1　褐灰色	シルト	酸化鉄を下面に多く含み、マンガン粒を少量含む。
	Ⅱ	10YR6/4　にぶい黄橙色	粘土質シルト	酸化鉄をやや多く含む。

第 28 図　A 区東壁断面図・B 区南壁断面図（S ＝ 1/100）



第29図　B区調査区平面図（S＝1/100）

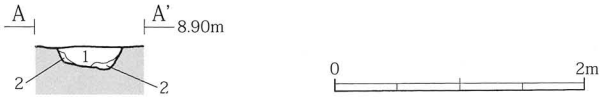
3　発見遺構と出土遺物

Ⅱ層上面で、溝跡１条、土坑２基、ピット 132 基を検出した。遺物は、Ⅰｂ層中より土師器片、須恵器片が出土し、遺構中からは土師器片・須恵器片・瓦片・鉄滓などが出土した。

（１）溝跡

SD2278 溝跡（第 27・30 図）

Ａ区東南部に位置する。方向はＳ－ 53°－Ｅである。検出長は 2.2 ｍで、規模は上幅 50 ～ 66cm、底面幅 39 ～ 54cm である。検出面からの深さは 10cm 程で、断面形は逆台形を呈する。堆積土は１層である。遺物は出土していない。



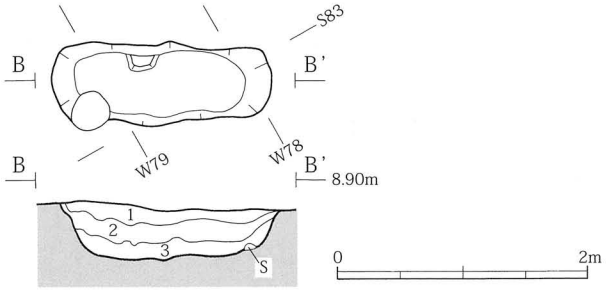
遺構名	層位	色　調	土　質	備　考
SD2278	1	10YR3/1　黒褐色	粘土質シルト	Ⅱ層土ブロックを少量含む。
	2	10YR3/1　黒褐色	粘土質シルト	Ⅱ層土ブロックを多量に含む。

第 30 図　SD2278 溝跡断面図（S ＝ 1/60）

（２）土坑

SK2279 土坑（第 27・31 図）

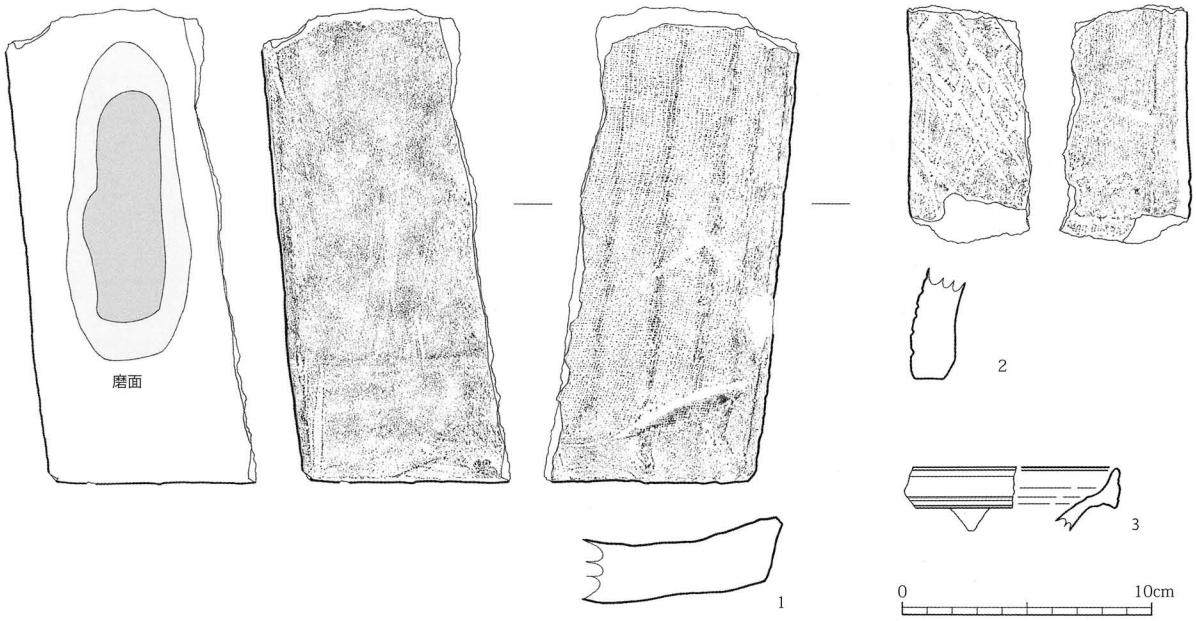
Ａ区東部に位置する。規模は長軸 175㎝、短軸 65㎝で、平面形は長方形を呈する。長軸の方向はＮ－ 68°－Ｗである。検出面からの深さは 45㎝程で、堆積土は３層で、ほぼ水平に堆積していた。１層は炭化物粒とⅡ層土をブロック状に少量含む黒褐色土で、２層は黒褐色土とⅡ層土をブロック状に含む褐色土、３層は炭化物を多量に含む黒色土である。断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。



遺構名	層位	色　調	土　質	備　考
SK2279	1	10YR3/1　黒褐色	粘土質シルト	炭化物粒、マンガン粒、遺物を少量含む。
	2	10YR4/6　褐色	粘土	Ⅱ層ブロックを多量に含む。
	3	10YR1.7/1　黒色	シルト	炭化物ブロックを多量に含み、Ⅲ層ブロックを少量含む。遺物（土器・鉄滓等）を多量に含む。

第 31 図　SK2279 土坑平・断面図（S ＝ 1/60）

遺物は、１層から土師器の坏や甕の小片、須恵器の瓶類の体部小片、径 3㎝前後の河原石９点、径２～ 7㎝の鉄滓５点が出土した。３層からは、土師器の坏や甕の小片、須恵器小片、径３～ 5㎝の河原石 33 点、径２～ 10㎝の鉄滓 18 点が出土した他に、Ｇ－ 138 平瓦（第 32 図 1）やＦ－ 109 丸瓦（第 32 図 2）、Ｅ－ 569 須恵器（第 32 図 3）が出土した。Ｇ－ 138 平瓦は、凸面に磨り面が見られることから、砥石に転用されたものと考えられる。Ｆ－ 109



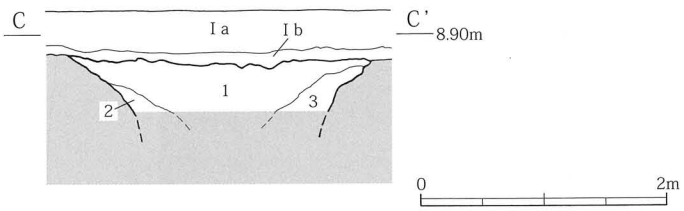
図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量（cm）	外面調整	内面調整	写真図版
1	F-138	瓦	平瓦	SK2279	3 層	縦 :19.0　横 :8.1　厚さ :2.4	凸面 : 縄叩き　磨消　磨り面	凹面 : 布目痕	12 － 1
2	G-109	瓦	丸瓦	SK2279	3 層	縦 :10.5　横 :5.0　厚さ :1.8	凸面 : ヘラケズリ　ヘラ刻み	凹面 : 布目痕	12 － 2
3	E-569	須恵器	長頸壺？	SK2279	3 層		口縁部 : ロクロナデ	口縁部 : ロクロナデ	12 － 3

第 32 図　SK2279 土坑出土遺物

丸瓦は、凸面に斜格子状のヘラ刻みが施され、わずかに粘土の捲れが観察される。このようなヘラ刻みは、軒丸瓦の瓦当と接合させるために施された可能性が考えられ、粘土の捲れについても、瓦当と接合する際に貼り付けた粘土の痕跡である可能性がある。E－569須恵器は、長頸壺などの瓶類の口縁部である。

SK2280土坑（第27・33図）

B区中央部に位置する。検出長は東西2.5 m、南北1.5 m以上で、平面形は円形を呈すると考えられる。検出面からの深さは50㎝以上である。形態や土の堆積状況からは素掘りの井戸跡の可能性がある。深度が深いことが想定されたため、調査区の安全を考慮し、それ以上の掘り下げは行わなかった。壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は3層で、遺物は出土していない。



遺構名	層位	色　調	土　質	備　考
SK2280	1	7.5YR3/1　黒褐色	粘土質シルト	Ⅱ層ブロック、酸化鉄粒を多量に含む。
	2	N3/0　暗灰色	粘土質シルト	Ⅱ層ブロック、酸化鉄粒を少量含む。
	3	10YR5/2　灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄をすだれ状に少量含む。

第33図　SK2280土坑断面図（S=1/60）

4　まとめ

第209次調査区は、郡山遺跡方四町Ⅱ期官衙の南門跡の東側、南辺大溝と外溝の間に位置している。南辺大溝と外溝の空間は、南門跡の西部で実施した第138次調査などから、遺構の分布が希薄な空閑地が広がっていることが明らかとなっている。この空閑地は、藤原宮の周囲にみられる空閑地と同じ特徴で、その設計との関連が指摘されている（今泉2005、林部2010）。

第209次調査区では、溝跡1条、土坑2基、ピットが検出されたが、官衙に関わる遺構は検出されず、また遺構の分布も希薄であった。第138次調査と同様に、南門東側の南辺大溝と外溝の間にも空閑地が広がっていることが明らかとなった。

郡山遺跡方四町Ⅱ期官衙の北辺に位置する第190次調査区において、北辺外溝が河川の浸食により遺構が削平されていることや、外溝想定位置に接する南側で郡山遺跡Ⅱ期官衙の時期の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出されていることから、北辺大溝と北側の空間と、南辺大溝の南側の空間の遺構のあり方が異なっているということが明らかとなってきている（仙台市教育委員会2011）。このような遺構のあり方については、今後の調査成果などを待ち、検討していくこととし、課題としておく。

〈引用・参考文献〉

今泉　隆雄　2005「付章　古代国家と郡山遺跡」『郡山遺跡発掘調査報告書　総括編（1）』仙台市文化財調査報告書第283集

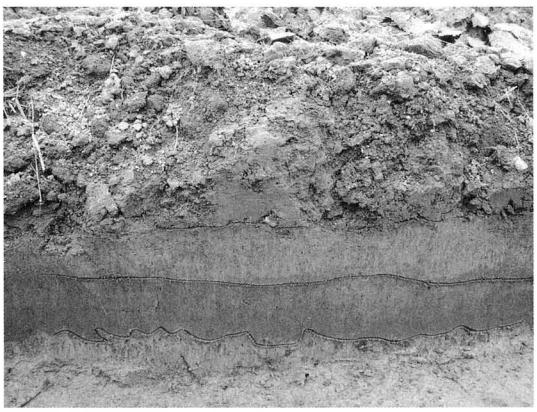
仙台市教育委員会　2003「Ⅲ　第138次発掘調査」『郡山遺跡22－平成13年度発掘調査概報－』仙台市文化財調査報告書第258集

仙台市教育委員会　2011『郡山遺跡第190次調査』仙台市文化財調査報告書第389集

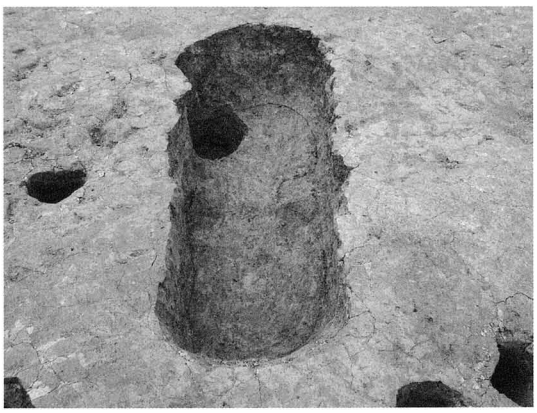
林部　均　2010「古代宮都と郡山遺跡・多賀城」『国立歴史民族博物館研究報告』第163号

1.　A 区全景（東から）

2.　B 区全景（西から）

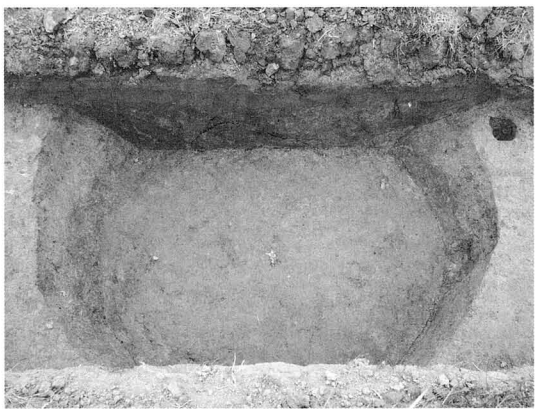


3.　B 区南壁断面（北から）



4.　SK2277 土坑（東から）

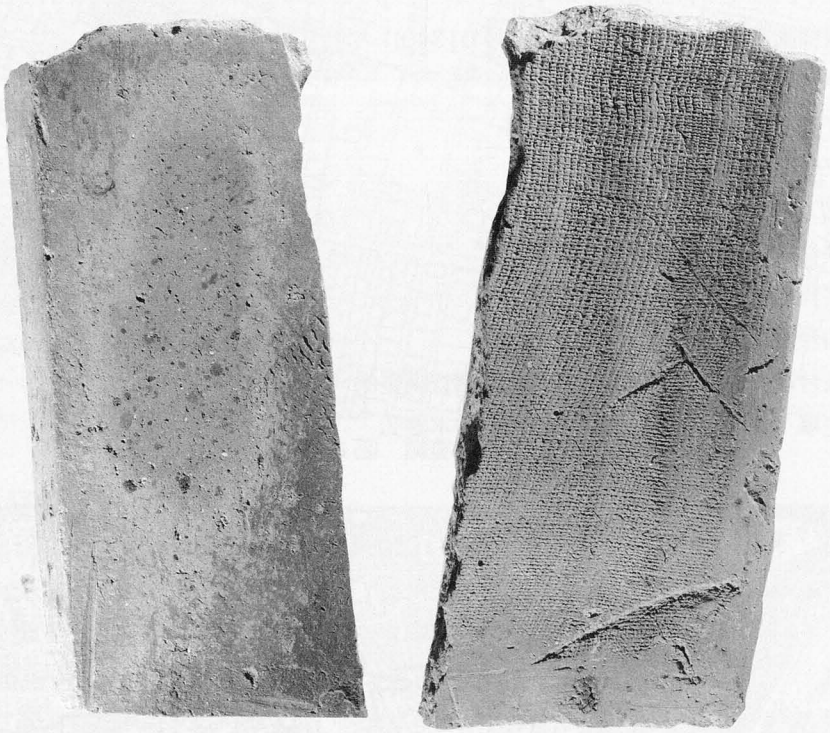
5.　SK2277 土坑断面（北から）



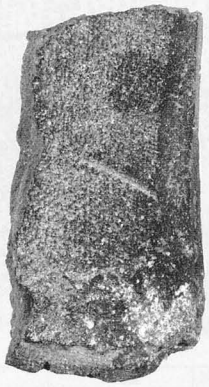
6.　SK2278 土坑（北から）

7.　SK2278 土坑断面（南から）

写真図版 11　第 209 次調査区



1(F-138)



2(G-109)

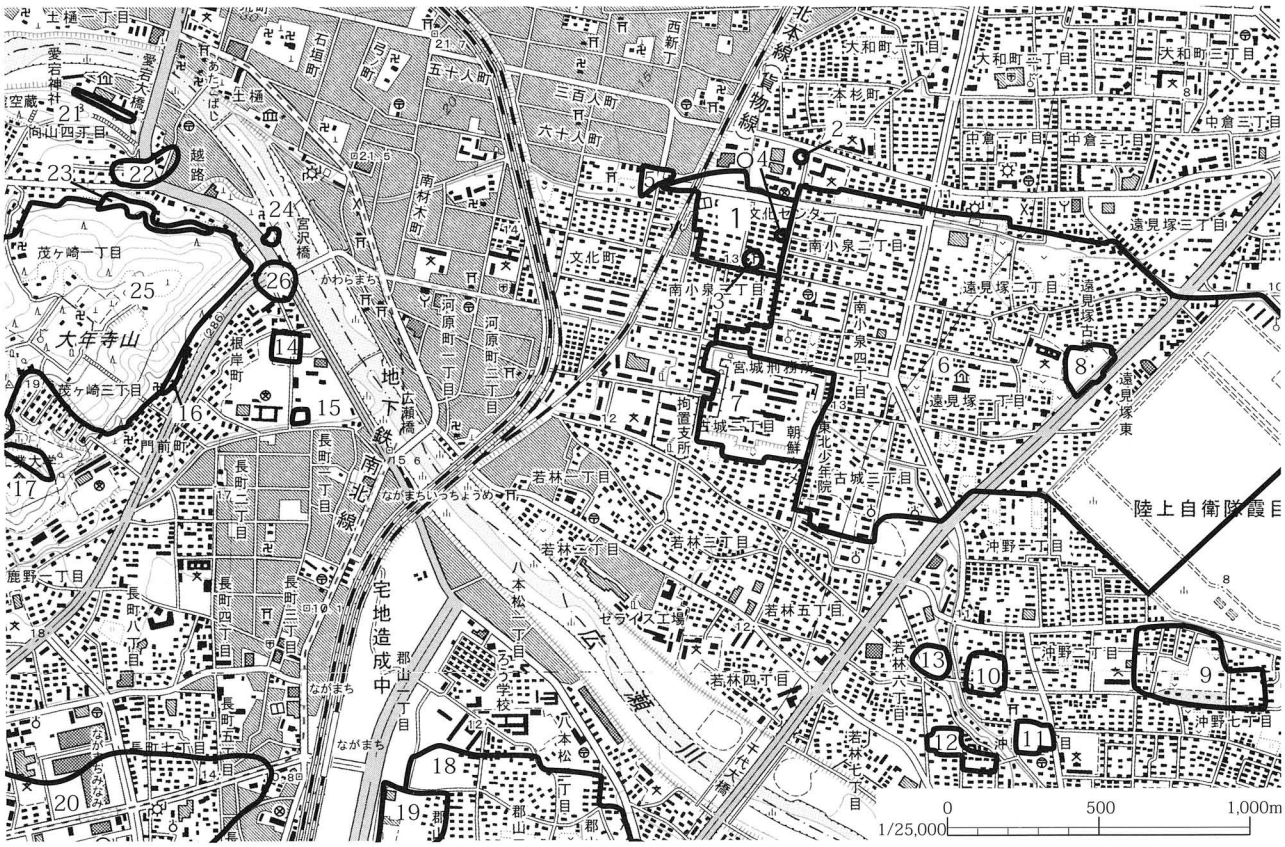
3(E-569)

写真図版 12　SK2279 土坑出土遺物

第２章　養種園遺跡第８次調査報告

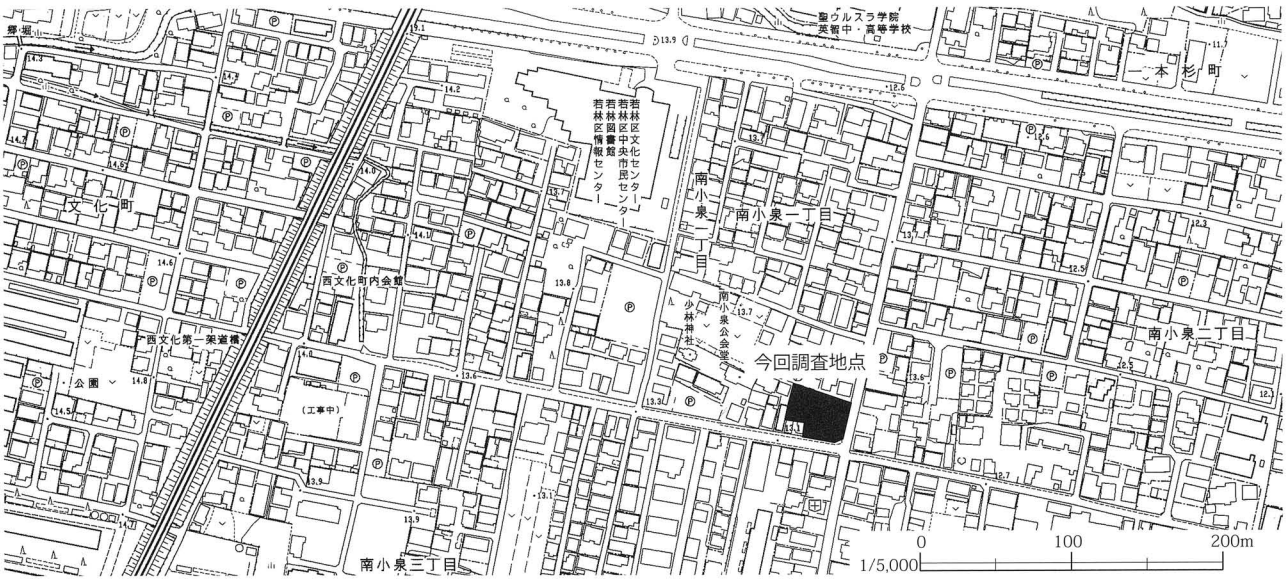
１　調査要項

遺　跡　名	養種園遺跡 (宮城県遺跡登録番号 01349)
調 査 地 点	仙台市若林区南小泉１丁目 14 － 85
調 査 期 間	平成 23 年１月５日～ 13 日
調査対象面積	190.52㎡
調 査 面 積	67.0㎡
調 査 原 因	鉄骨造平屋商業店舗建築工事
	鉄骨造ポール型看板建設工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担 当 職 員	主事　及川謙作　　文化財教諭　鈴木健弘



番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	養種園遺跡	集落跡・屋敷跡	自然堤防	縄文・古墳・平安～近世	14	兜塚古墳	前方後円墳（帆立貝式）	自然堤防	古墳中
					15	小兜塚古墳	円墳	自然堤防	古墳後
2	法領塚古墳	円墳	自然堤防	古墳後	16	杉土手（鹿除土手）	土手	丘陵・段丘	近世
3	猫塚古墳	円墳	自然堤防	古墳後	17	茂ヶ崎横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳末・奈良
4	蛇塚古墳	円墳	自然堤防	古墳後	18	郡山遺跡	官衙跡・寺院跡・包含地	自然堤防・後背湿地	縄文～奈良初
5	保春院前遺跡	集落跡	自然堤防	古代～近世	19	西台畑遺跡	包含地・甕棺墓	自然堤防	縄文～古墳
6	南小泉遺跡	集落跡・屋敷跡	自然堤防	縄文～近世	20	富沢遺跡	包含地・水田跡	後背湿地	旧石器～近世
7	若林城跡	円墳・集落跡・城館跡	自然堤防	古墳・平安・中世・近世	21	愛宕山横穴墓群 A 地点	横穴墓	丘陵北東斜面	古墳末・奈良
8	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳前	22	愛宕山横穴墓群 B・C 地点	横穴墓	丘陵南東斜面	古墳末・奈良
9	沖野城跡	城館跡	自然堤防	中世					
10	神柵遺跡	建物跡・包含地	自然堤防	古代	23	大年寺横穴墓群	横穴墓	丘陵北斜面	古墳末・奈良
11	中柵西遺跡	散布地	自然堤防	弥生・古墳・古代	24	宗禅寺横穴墓群	横穴墓	段丘	古墳末・奈良
12	砂押Ⅱ遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代	25	茂ヶ崎城跡	城館跡	丘陵	中世
13	砂押Ⅰ遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代	26	根岸遺跡	集落跡	段丘	縄文

第 34 図　遺跡の位置と周辺の遺跡



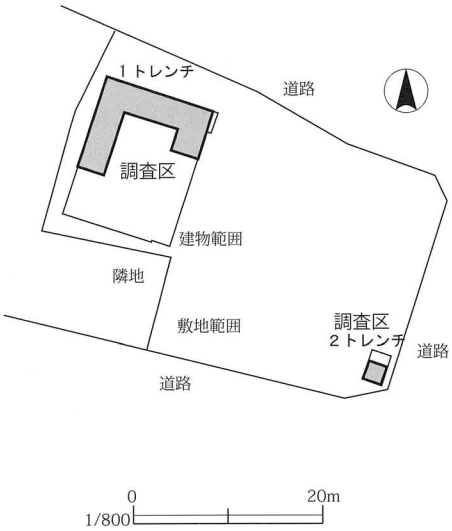
第 35 図　調査地点の位置

2　調査に至る経緯と調査方法

今回の調査は、平成 22 年 11 月 15 日付で、申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」に対して、文化財保護法第 93 条（H22 教生文第 114 － 208 号で回答）に基づき実施した。確認調査は平成 23 年 1 月 5 日に着手し、遺構が検出されたため、引き続き本発掘調査を実施した。調査区は、店舗建築予定範囲内（１トレンチ：63㎡）、看板設置箇所（２トレンチ：４㎡）にそれぞれ設定した。

重機により盛土およびⅠ、Ⅱ層を掘り下げ、Ⅲ層上面で人力により遺構検出作業、遺構精査を行った。

適宜、平面・断面図（S=1/20、1/40）を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。



第 36 図　調査区配置図

3　遺跡の位置と環境

養種園遺跡は、仙台市の東部、ＪＲ仙台駅から南東約 2.5km の地点に位置する。広瀬川と名取川の合流地点より北へ約３km の場所にあり、「宮城野海岸平野」と呼ばれる沖積平野の自然堤防上に立地する。標高は約 12 ～ 14 mで、遺跡の範囲は約 300m 四方に及ぶ。

遺跡内には、蛇塚古墳、猫塚古墳を含み、東部で南小泉遺跡と隣接している。また周辺には、法領塚古墳や遠見塚古墳、若林城跡、保春院前遺跡などが分布している。遺跡周辺は、仙台藩初代藩主伊達政宗の屋敷（若林城跡）造営に伴い、若林城下町が形成される。本遺跡はその町域に含まれており、若林城解体後、現在に至るまで、周辺の町並みは城下町の町割りを基本的に踏襲している。

本遺跡は、これまで７次の調査が実施されており、縄文時代から江戸時代にかけての複合遺跡であることが判明している。その中でも特に、近世の遺構群が注目される。二代藩主忠宗により御仮屋（別荘）が、四代藩主綱村により国分小泉屋敷と呼ばれる別荘が造営されるなど、伊達家との深い関わりがあり、それらに関係する堀跡や池跡などの遺構が発見されている。

４　基本層序

Ⅰ層：褐色（10YR4/6）の粘土質シルトで、にぶい黄橙色（10YR6/4）の粘土をブロック状に少量含む。層厚は６～15㎝である。遺構の掘り込み面である。

Ⅱ層：にぶい黄褐色（10YR5/4）の粘土質シルトで、砂質シルトを斑状に含む。層厚は 20 ～ 35㎝である。

Ⅲ層：黄褐色（10YR5/6）の砂質シルトで、砂質シルトを粒状に少量含む。遺構の確認面である。

５　発見遺構と出土遺物

溝跡４条、土坑１基、性格不明遺構１基、ピット８基を検出した。今回の調査で検出した遺構は、Ⅲ層上面まで掘り下げ検出したが、調査区壁面の観察などにより、すべて盛土直下のⅠ層上面からの掘り込みであることが確認された。

遺物は、表土、基本層、遺構堆積土から弥生土器、土師器、ロクロ土師器、須恵器、赤焼土器、陶器、磁器、土製品、瓦、鉄滓が出土している。

１）１トレンチ

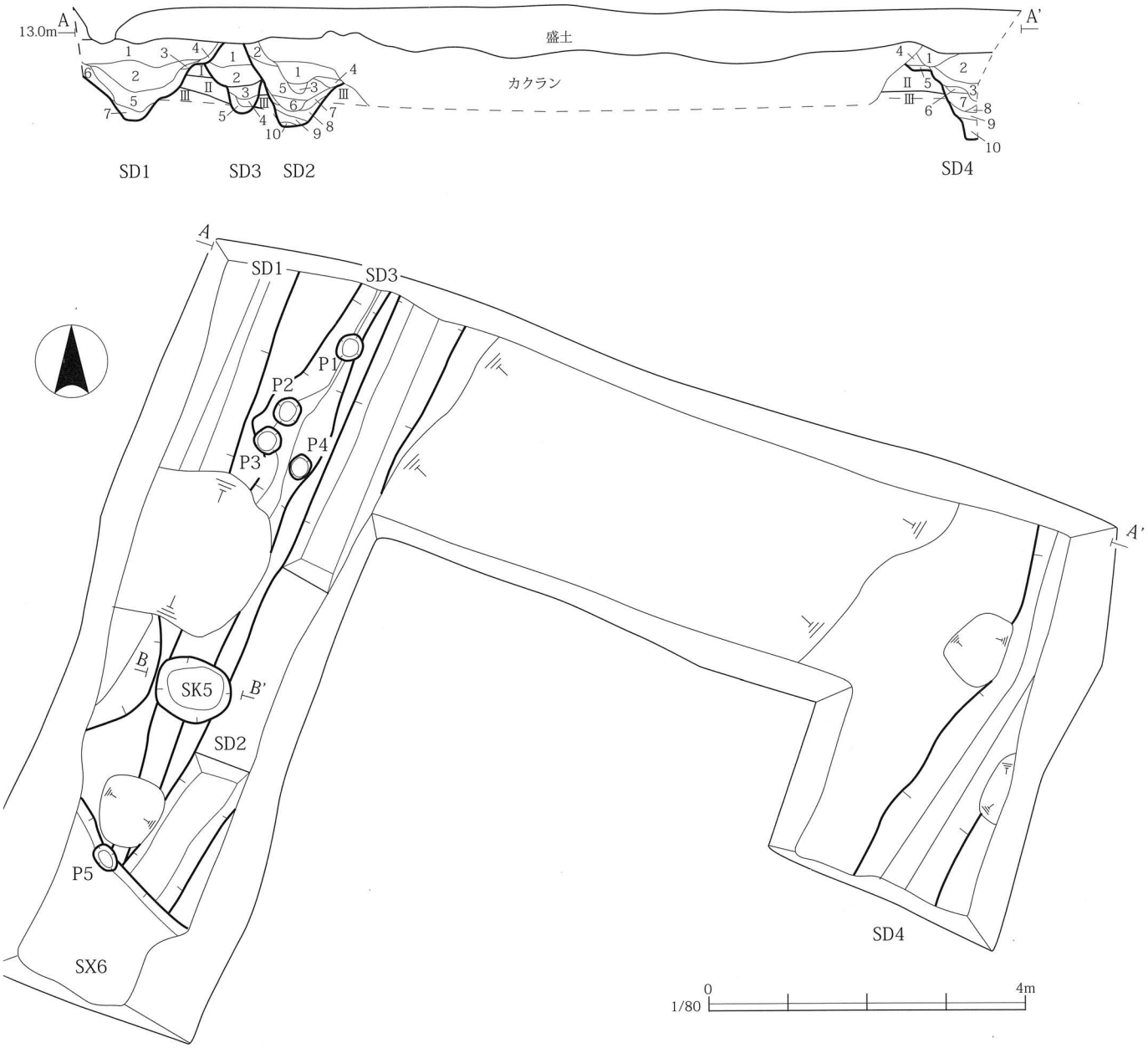
（１）溝跡

ＳＤ１溝跡　調査区西部に位置する南北方向の溝跡である。ＳＤ３溝跡と重複し、これよりも新しい。検出長は約6.2mである。規模は、北壁断面で、上端幅約 180cm 以上、下端幅約 20cm、深さ約 96cm を測る。断面形は逆台形状を呈し、上部で大きく開く。堆積土は７層に細分され、炭化物を含む褐色やにぶい黄褐色の粘土質シルト、砂質シルトである。

遺物は、土師器埦・甕が出土している。

遺構・層位		土色・土質	粘性	しまり	混入物等
SD1	1	10YR4/4 褐色粘土質シルト	あり	強	炭化物をブロック状に少量含む
	2	10YR4/6 褐色粘土質シルト	あり	強	炭化物をブロック状に含む
	3	10YR4/4 褐色粘土質シルト	あり	強	酸化鉄粒を含む
	4	10YR4/6 褐色粘土質シルト	あり	強	砂質シルトを粒状に少量含む
	5	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト	強	強	炭化物を粒状に含む
	6	10YR4/6 褐色砂質シルト	あり	強	炭化物を粒状に少量含む
	7	10YR4/4 褐色粘土質シルト	あり	強	砂質シルトを粒状に少量含む
SD2	1	10YR5/6 黄褐色粘土質シルト	あり	強	炭化物を粒状に、砂質シルトを粒状に少量含む
	2	10YR3/4 暗褐色粘土質シルト	あり	強	炭化物を粒状に少量含む
	3	10YR4/4 褐色粘土質シルト	あり	強	
	4	10YR3/4 暗褐色粘土質シルト	あり	強	砂質シルトを粒状に少量、炭化物を粒状に少量含む
	5	10YR3/4 暗褐色粘土質シルト	強	強	炭化物をブロック状に含む
	6	10YR4/6 褐色粘土質シルト	あり	強	炭化物を粒状に少量含む
	7	10YR3/4 暗褐色粘土質シルト	あり	強	砂質シルトを粒状に、炭化物を粒状に少量含む
	8	10YR3/3 暗褐色粘土質シルト	あり	強	炭化物を粒状に少量含む
	9	10YR4/4 褐色粘土質シルト	あり	強	砂質シルトを粒状に少量含む
	10	10YR4/6 褐色砂質シルト	あり	強	炭化物を粒状に少量含む
SD3	1	10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト	あり	強	炭化物をブロック状に含む
	2	10YR4/4 褐色粘土質シルト	あり	強	炭化物を粒状に少量、砂質シルトを粒状に少量含む
	3	10YR5/6 黄褐色砂質シルト	弱	強	
	4	10YR4/4 褐色粘土質シルト	あり	強	炭化物を粒状に少量含む
	5	10YR4/4 褐色砂質シルト	あり	強	炭化物を粒状に少量含む
SD4	1	10YR3/4 暗褐色粘土質シルト	あり	あり	炭化物をブロック状に、Ⅲ層ブロックを少量含む
	2	10YR4/6 褐色粘土質シルト	あり	あり	炭化物を粒状に少量含む
	3	10YR3/4 暗褐色粘土質シルト	あり	あり	炭化物を粒状に含む
	4	10YR3/3 暗褐色粘土質シルト	あり	強	炭化物をブロック状に少量、円礫を少量含む
	5	10YR4/4 褐色粘土質シルト	あり	強	炭化物を粒状に少量含む
	6	10YR3/3 暗褐色粘土質シルト	強	強	黄褐色の砂質シルトを少量、黄褐色の粘土をブロック状に少量含む
	7	10YR4/6 褐色粘土質シルト	あり	強	炭化物を粒状に微量含む
	8	10YR3/4 暗褐色粘土質シルト	あり	強	砂質シルトを粒状に、炭化物を粒状に少量含む
	9	10YR4/6 褐色砂質シルト	あり	あり	炭化物を粒状に少量含む
	10	10YR4/4 褐色砂質シルト	あり	あり	炭化物を粒状に含む
SK5	1	10YR3/3 暗褐色シルト質粘土	強	あり	炭化物をブロック状に、橙色 (5YR7/5) の粘土質シルトをブロック状に少量含む
	2	10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト	あり	強	炭化物をブロック状に少量含む
	3	10YR4/6 褐色砂質シルト	あり	強	炭化物を粒状に微量含む
SX6	1	10YR4/3 にぶい黄褐色粘土	強	あり	炭化物を粒状に少量含む
	2	10YR3/4 暗褐色粘土質シルト	強	強	炭化物を粒状に少量含む
	3	10YR3/3 暗褐色粘土質シルト	強	あり	砂質シルトを粒状に含む

第１表　土層註記表



基本層	土色・土質	粘性	しまり	混入物等
Ⅰ	10YR4/6 褐色粘土質シルト	あり	強	にぶい黄橙色 (10YR6/4) の粘土をブロック状に少量含む
Ⅱ	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト	あり	強	砂質シルトをブロック状に含む
Ⅲ	10YR5/6 黄褐色砂質シルト	あり	強	砂質シルトを粒状に少量含む

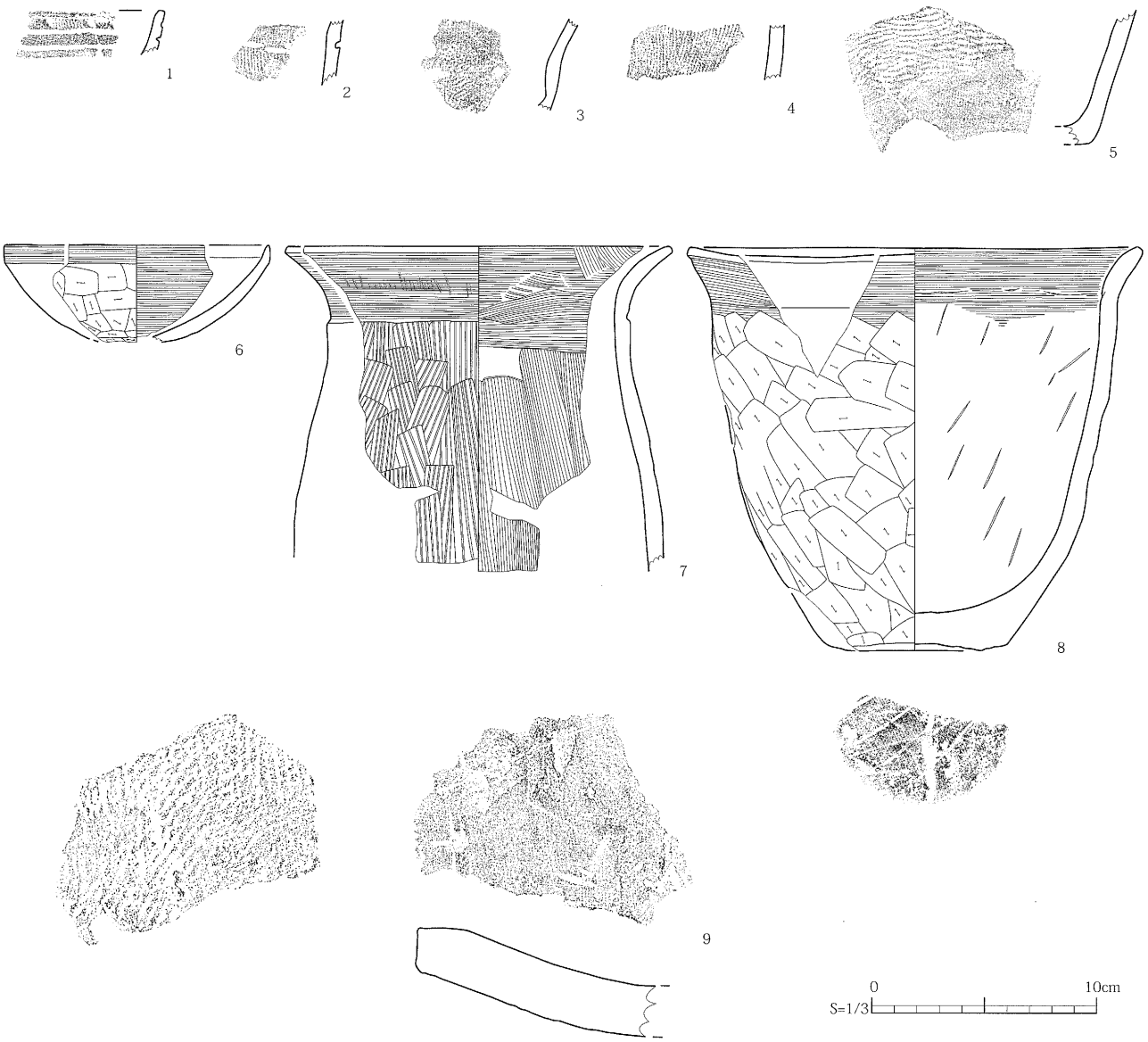
遺構	土色・土質	粘性	しまり	混入物等	規模			深さ
P1	10YR3/4 暗褐色シルト質粘土	強	強	黄褐色 (10YR5/6) の砂質シルトをブロック状に、炭化物を粒状に少量含む	30	×	25	25
P2	10YR4/6 褐色粘土質シルト	強	強	炭化物と橙色 (7.5YR6/8) の粘土質シルトをブロック状に少量含む	30	×	30	25
P3	10YR4/4 褐色粘土質シルト	強	強	炭化物と橙色 (7.5YR6/8) の粘土質シルトをブロック状に少量含む	35	×	30	25
P4	10YR4/4 褐色粘土質シルト	強	強	炭化物を粒状に少量含む	30	×	30	30
P5	10YR4/4 褐色粘土質シルト	強	あり	炭化物と明黄褐色 (10YR6/8) の砂質シルトを粒状に少量含む	45	×	25	40

単位：cm

第 37 図　1 トレンチ　平面・断面図

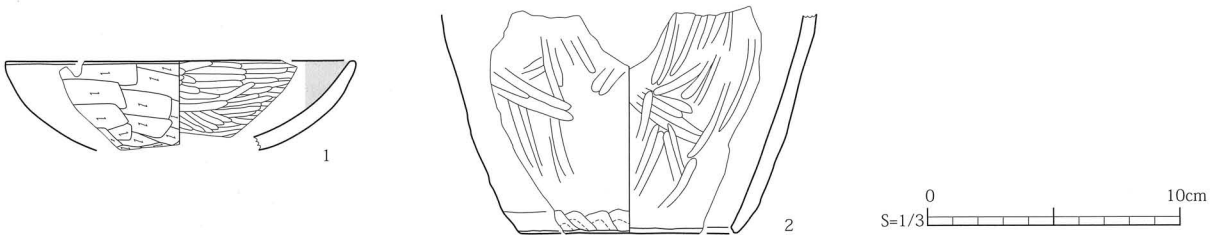
ＳＤ２溝跡　調査区西部に位置する南北方向の溝跡である。ＳＤ３溝跡、ＳＫ５土坑、ＳＸ６性格不明遺構と重複し、ＳＤ３溝跡よりも新しく、ＳＫ５土坑、ＳＸ６性格不明遺構よりも古い。検出長は約 9.7m である。規模は、調査区北壁面で、上端幅 120㎝以上、下端幅約 38㎝、深さ約 105㎝である。断面形は逆台形を呈する。堆積土は 10 層に細分され、炭化物を含む暗褐色や黄褐色の粘土質シルト、砂質シルトである。

遺物は、弥生土器（第 38 図―１～５）、土師器坏（第 38 図―６）・鉢・甕（第 38 図７～８）・甑、須恵器甕（写真図版 15―７～８）、平瓦（第 38 図―９）、陶器が出土している。



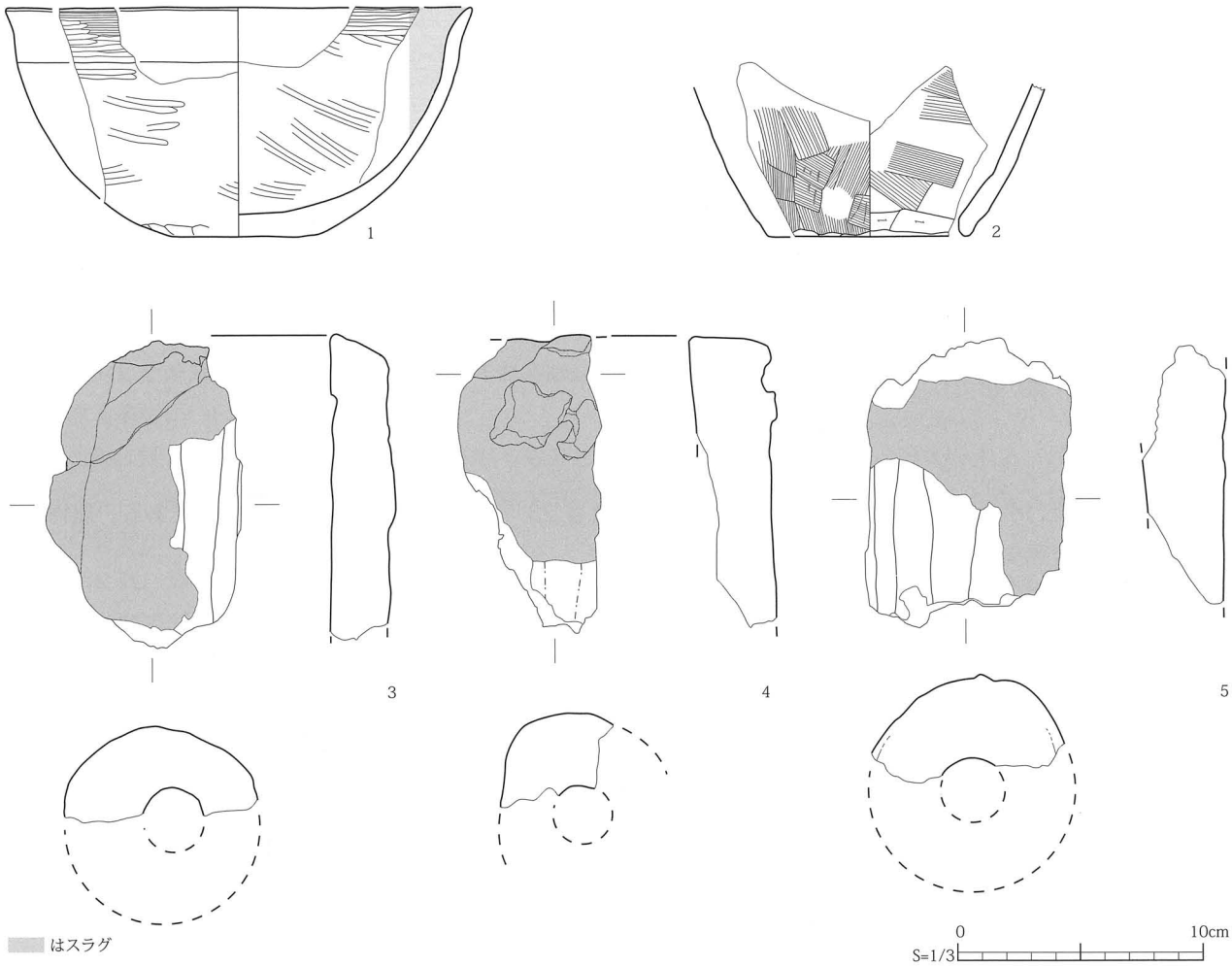
図中番号	登録番号	遺構名	種別	器種	法量（cm）			特徴・備考	写真図版
					口径（長）	底径（幅）	器高（厚）		
1	Ｂ－１	SD2	弥生土器	鉢	－	－	－	３条以上の平行沈線文　植物茎回転文	14-1
2	Ｂ－４	SD2	弥生土器	甕	－	－	－	列点文　ＬＲ縄文　内面：ミガキ	14-2
3	Ｂ－２	SD2	弥生土器	甕	－	－	－	ＲＬ縄文　外面体部下端：ミガキ	14-3
4	Ｂ－５	SD2	弥生土器	甕	－	－	－	ＲＬ縄文	14-4
5	Ｂ－６	SD2	弥生土器	甕	－	－	(6.0)	ＲＬ縄文　外面：体部下端ミガキ　内面：ミガキ	14-5
6	Ｃ－１	SD2	土師器	坏	(11.8)	－	(4.3)	外面：口縁部ヨコナデ　体部ヘラケズリ　内面：ヨコナデ	15-1
7	Ｃ－３	SD2	土師器	甕	(17.1)	－	(14.4)	外面：口縁部ハケメ→ヨコナデ　体部ハケメ　内面：口縁部ハケメ→ヨコナデ→ナデ　体部ヘラナデ	15-4
8	Ｃ－２	SD2	土師器	甕	20.1	8.0	17.9	外面：口縁部ヨコナデ　体部ヘラケズリ　底部木葉痕　内面：ヘラナデ	15-5
－	Ｅ－１	SD2	須恵器	甕	－	－	－		15-7
－	Ｅ－２	SD2	須恵器	甕	－	－	－		15-8
9	Ｇ－１	SD2	瓦	平瓦	－	－	2.3	凹面：布目　凸面：縄目タタキ	15-12

第 38 図　SD ２溝跡出土遺物



図中番号	登録番号	遺構名	種別	器種	法量（cm）			特徴・備考	写真図版
					口径	底径	器高		
1	C－4	SD3	土師器	坏	(13.9)	－	(3.5)	外面：体部ヘラケズリ　内面：体部ヘラミガキ→黒色処理	15-2
2	C－5	SD3	土師器	甑	－	(8.6)	(8.9)	外面：ヘラケズリ→ヘラミガキ　体部下端指オサエ　内面：体部ヘラミガキ　無底式	－

第 39 図　SD3 溝跡出土遺物



図中番号	登録番号	遺構名	種別	器種	法量（cm）			特徴・備考	写真図版
					口径（長）	底径（幅）	器高（厚）		
1	C－7	SD4	土師器	坏	(19.0)	5.6	9.3	外面：ヨコナデ　ヘラケズリ→ヘラミガキ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	15-3
2	C－8	SD4	土師器	甑	(7.1)	－	(8.2)	外面：体部ハケメ　内面：体部ヘラナデ　体部下端ヘラケズリ　無底式	15-6
－	E－5	SD4	須恵器	甕	－	－	－		15-9
3	P－1①	SD4	土製品	羽口	(12.5)	(8.0)	2.5	溶解物付着　胎土スサ混入	15-16
4	P－1②	SD4	土製品	羽口	(12.2)	(5.9)	2.7	溶解物付着	15-17
5	P－1③	SD4	土製品	羽口	(11.8)	(8.5)	3.2	溶解物付着	15-18
－	P－1④	SD4	土製品	羽口	－	－	－		15-13
－	P－1⑥	SD4	土製品	羽口	－	－	－		15-14
－	P－1⑦	SD4	土製品	羽口	－	－	－		15-15

第 40 図　SD 4 溝跡出土遺物

ＳＤ３溝跡　調査区西部に位置する南北方向の溝跡である。ＳＤ１・２溝跡、ＳＫ５土坑、ＳＸ６性格不明遺構、Ｐ１～５と重複し、いずれよりも古い。検出長は約 6.9m である。規模は、調査区北壁面では、上端幅 75㎝以上、下端幅約 27㎝、深さ約 90㎝である。断面形はＵ字状を呈し、上部で大きく開く。堆積土は５層に細分され、炭化物を含むにぶい黄褐色や褐色の粘土質シルトである。

遺物は、弥生土器、土師器坏（第 39 図―１）・甕・甑（第 39 図―２）が出土している。

ＳＤ４溝跡　調査区東部に位置する南北方向の溝跡である。他の遺構との重複はない。検出長は約 4.9m である。規模は、上端幅約 100㎝、下端幅 20 ～ 30㎝、深さ約 110㎝である。断面形は逆台形を呈する。堆積土は 10 層に細分され、炭化物を含む暗褐色や褐色などの粘土質シルトである。

遺物は、土師器坏（第 40 図―１）・埦・高坏・鉢・甕・甑（第 40 図―２）、須恵器甕（写真図版 15 －９）、常滑産甕、羽口（第 40 図―３～５、写真図版 15―13 ～ 15）、平瓦、鉄滓が出土している。

（２）土坑

ＳＫ５土坑　調査区西部中央に位置する。ＳＤ２・３溝跡と重複し、いずれよりも新しい。平面形は楕円形を呈する。規模は、長軸約 100cm、短軸約 80cm、深さは約 40㎝である。断面形は逆台形を呈する。堆積土は３層に細分され、炭化物を含む、にぶい黄褐色や暗褐色などの砂質シルト、シルト質粘土である。

遺物は出土していない。

（３）性格不明遺構

ＳＸ６性格不明遺構　調査区西部南端に位置する。ＳＤ２・３溝跡、Ｐ５と重複しており、ＳＤ２・３溝跡よりも新しく、Ｐ５より古い。検出長は東西約 210cm、南北約 180cm、深さ約 16 ～ 30㎝である。堆積土は３層に細分され、炭化物を含むにぶい黄褐色や暗褐色の粘土質シルト、粘土である。一部の検出であったため、性格等については不明である。

遺物は、常滑産甕が出土している。

（４）ピット

５基検出された。平面形は円形もしくは楕円形で、規模は径 25 ～ 45cm、深さは 25 ～ 40cm である。建物跡を構成するような有意な配列は認められなかった。

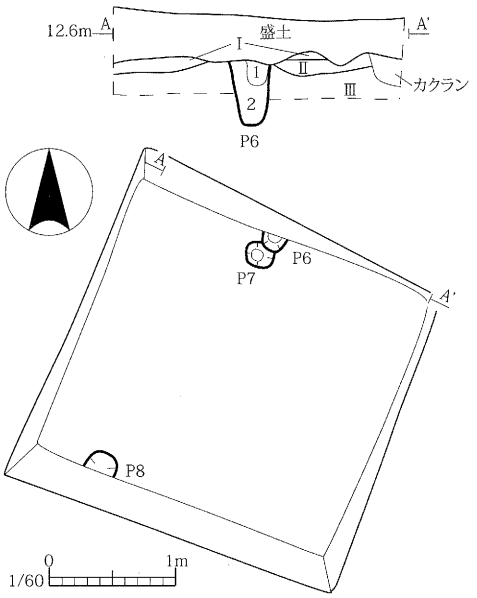
遺物は、土師器が出土している。

２）２トレンチ

（１）ピット

３基検出された。平面形は円形で、規模は径 15 ～ 30cm、深さは 35 ～ 52cm である。建物跡を構成するような有意な配列は認められなかった。

遺物は出土していない。



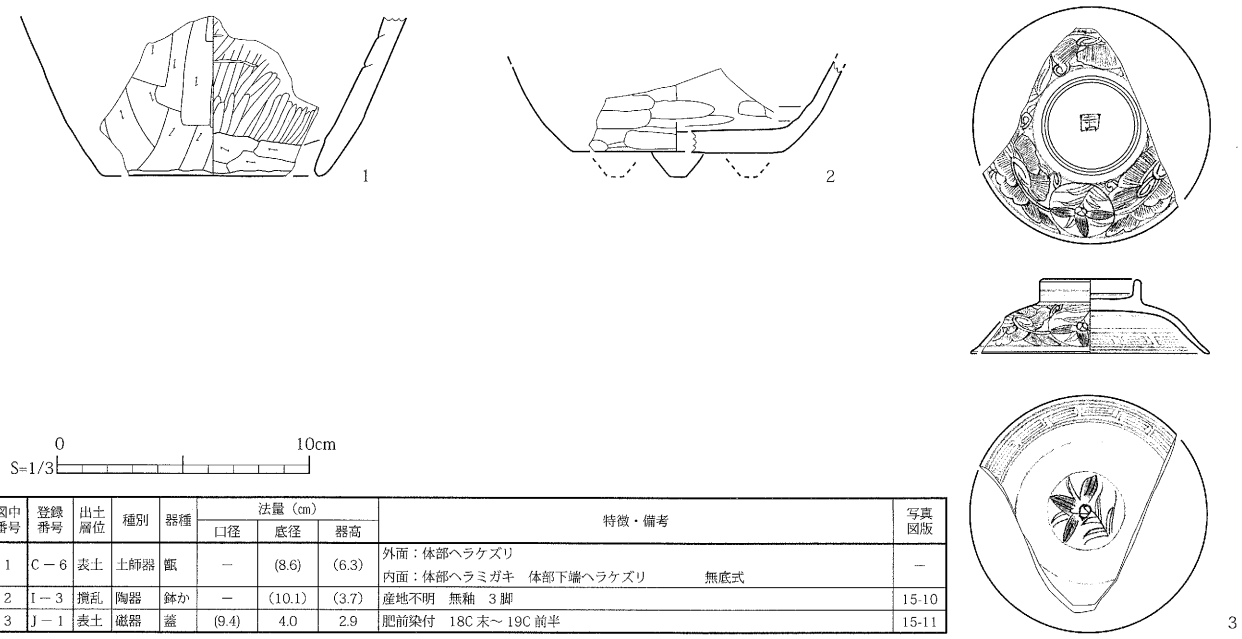
遺構・層位		土色・土質	粘性	しまり	混入物等	規模	深さ
P6	1	10YR2/3 黒褐色粘土質シルト	強	あり	炭化物を粒状に含む	30 × (20)	52
	2	10YR3/4 暗褐色粘土質シルト	あり	強	黄褐色（10YR5/6）の砂質シルトをブロック状に含む		
P7	1	10YR4/4 褐色粘土質シルト	強	あり	炭化物を粒状に含む	20 × 15	35
P8	1	10YR4/6 褐色粘土質シルト	強	強	炭化物と黄褐色（10YR5/6）砂質シルトを粒状に少量含む	20 × (20)	(35)

単位：㎝

第 41 図　２トレンチ　平面・断面図

３）その他の出土遺物

表土、撹乱、基本層から、弥生土器、土師器坏・甕・甑（第 42 図―１）、ロクロ土師器坏、赤焼土器坏、在地産甕、産地不明鉢（第 42 図―２）、肥前産染付蓋（第 42 図―３）、鉄滓が出土している。



図中番号	登録番号	出土層位	種別	器種	法量（cm）			特徴・備考	写真図版
					口径	底径	器高		
1	C－6	表土	土師器	甑	－	(8.6)	(6.3)	外面：体部ヘラケズリ 内面：体部ヘラミガキ　体部下端ヘラケズリ　　無底式	－
2	I－3	撹乱	陶器	鉢か	－	(10.1)	(3.7)	産地不明　無釉　３脚	15-10
3	J－1	表土	磁器	蓋	(9.4)	4.0	2.9	肥前染付　18C 末～ 19C 前半	15-11

第 42 図　その他の出土遺物

６　出土遺物についての考察

今回の調査の出土遺物には、弥生土器、土師器、ロクロ土師器、赤焼土器、須恵器、陶器、磁器、土製品、鉄滓がある。量的に土師器が主体を占める。なお、これらのほとんどが破片資料で、散在的に出土している。以下に特徴を把握できる遺物について、概要を記述する。

弥生土器には、文様が沈線によって構成されるものと、列点文が施文されるものが認められる。沈線によって構成されるものは、鉢類とみられる。列点文は、先端の角ばった施文具を用いて横方向に施したもので、甕類とみられる。これらの特徴から、桝形囲式に比定される。

土師器には、坏・埦・高坏・鉢・甕・甑などがある。破片資料が主体を占めるが、特徴がある程度捉えられるものには、栗囲式と国分寺下層式、関東系土師器がある。国分寺下層式には埦・甕がある。それぞれ１点を図示した。埦は体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部がわずかに開く。甕は長胴を呈する。頸部に軽い段がつき、外面の器面調整はヘラケズリである。関東系土師器は１点を図示した。丸底で、ヨコナデが施された口縁部が直立する。体部外面の器面調整はヘラケズリである。

陶器は、基本層、遺構堆積土から出土している。常滑産甕、白石産甕がある。いずれも断片的な破片資料で、年代を明らかにすることはできない。

磁器は１点を図示した。表土から 17 ～ 18 世紀代の肥前産蓋が出土している。

羽口、鉄滓、炉壁付着滓などの鍛冶関連遺物は、ＳＤ４溝跡から多く出土している。羽口は、いずれも破片資料である。尖端に溶着滓が認められるものと、溶着滓が見られない吸気部とみられる破片がある。また、胎土にスサを含むものと含まないものが認められる。鉄滓は、総量約 3.5kg 出土している。これには約 300 ～ 600 ｇの、いわゆる埦状を呈する炉底滓が含まれる。出土状況から、本溝跡の廃絶後に流入もしくは遺棄・廃棄されたものとみられる。今回の調査では、鍛冶関連遺構は確認されていないが、本調査区の西側に位置する養種園遺跡第２次・保春院前遺跡の調査では、中世から近世と考えられる炉跡をはじめ、鋳型、羽口、鉄滓など製鉄・鍛冶関連の遺構、遺物が確認されており、これに関連する遺物と考えられる。

※仙台市文化財調査報告書第 310 集「XI　養種園遺跡第６次発掘調査報告書」第 59 図を基に、加筆

第 43 図　養種園遺跡の屋敷堀跡推定ライン

7　まとめ

今回の調査では、溝跡４条、土坑１基、性格不明遺構１基、ピット８基を検出した。そのうち、溝跡４条は、いずれも規模や断面形状が類似し、その方向は、現在の区画に概ね平行もしくは直行している。現在の町割は、若林城とその周辺に形成された近世期の町割を踏襲しているものと考えられており、今回検出した溝跡は、この地割に規制されている可能性がある。このことから、近世に属する遺物は出土していないが、近世以降の溝跡と推定される。土坑、ピットなどの時期については、溝跡との重複関係から近世以降と考えられるが、それぞれの性格については、明らかにすることはできなかった。

本遺跡第１次調査では、近世の屋敷地の北辺を区画する最大上端幅 5.8m、深さ 2.0m ほどの規模を持つ堀跡が検出されている。また、第６次調査では、第１次調査で検出された近世の屋敷跡に伴う堀跡の延長部の可能性があり、この屋敷地の東辺にあたる上端幅 7.0m 以上の堀跡が確認されている（第 43 図参照）。今回の調査では、この堀跡や屋敷跡にかかわる遺構は検出されなかった。

＜参考文献＞

仙台市教育委員会 1997『養種園遺跡発掘調査報告書 －伊達家別荘跡の調査－』仙台市文化財調査報告書第 214 集
仙台市教育委員会 2009『養種園遺跡第２次・保春院前遺跡－都市計画道路「南小泉茂庭線」－関連遺跡調査報告書Ⅱ』仙台市文化財調査報告書第 344 集
仙台市教育委員会 2007「養種園第６次調査報告」『松森城跡他』仙台市文化財調査報告書第 310 集

1.　１トレンチ西部　遺構検出状況（南から）

2.　１トレンチ西部　遺構完掘状況（南から）

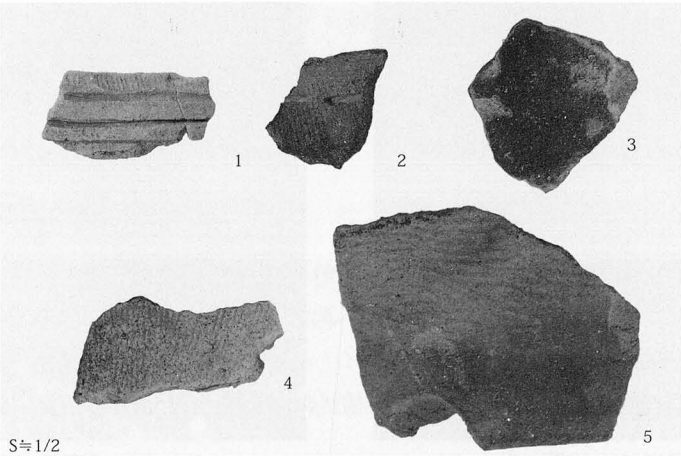
3.　１トレンチ東部　遺構検出状況（北から）

4.　１トレンチ東部　遺構完掘状況（北から）

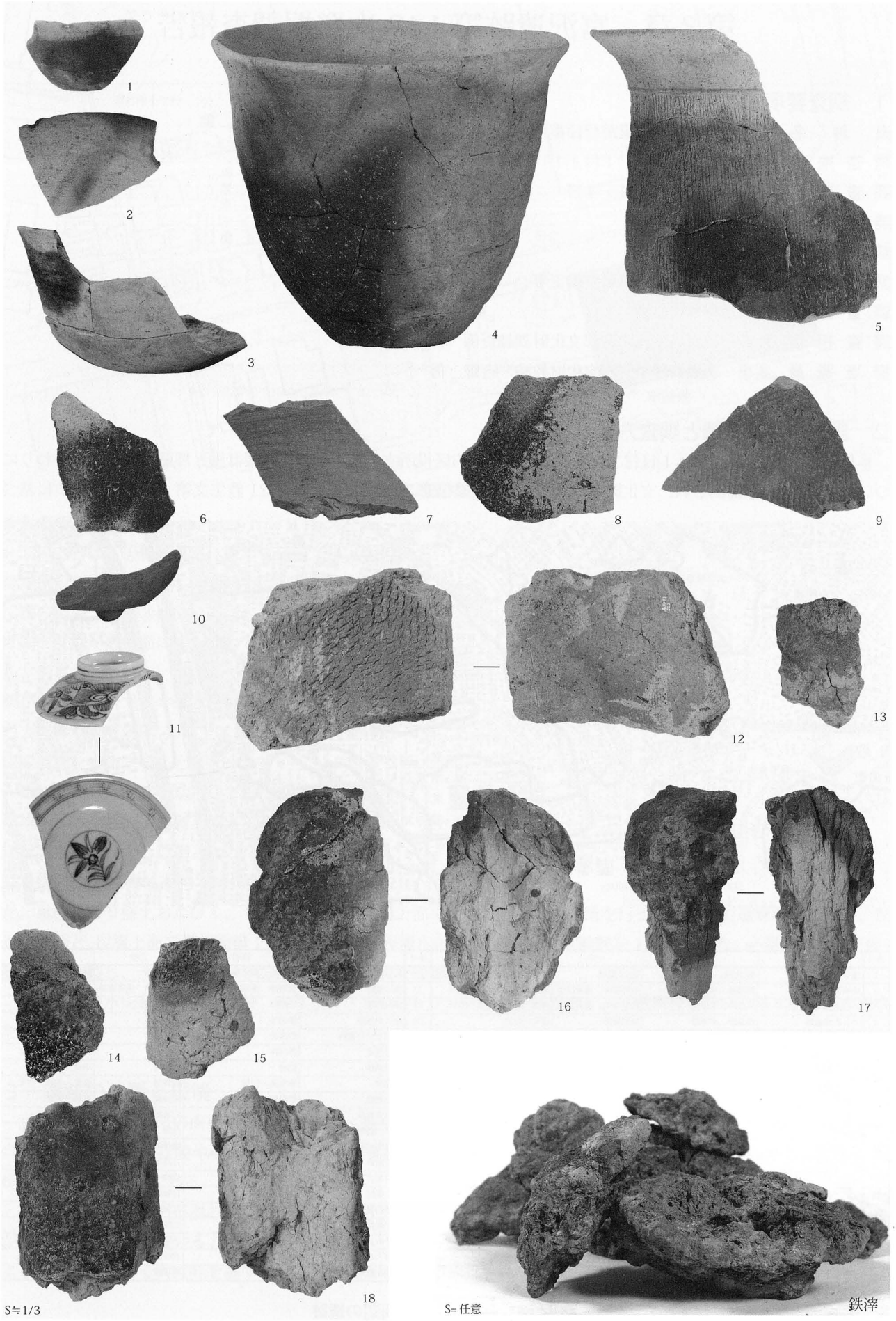
写真図版 13

5.　２トレンチ　遺構検出状況（西から）

6.　１トレンチ　調査区北壁断面



写真図版 14



写真図版 15

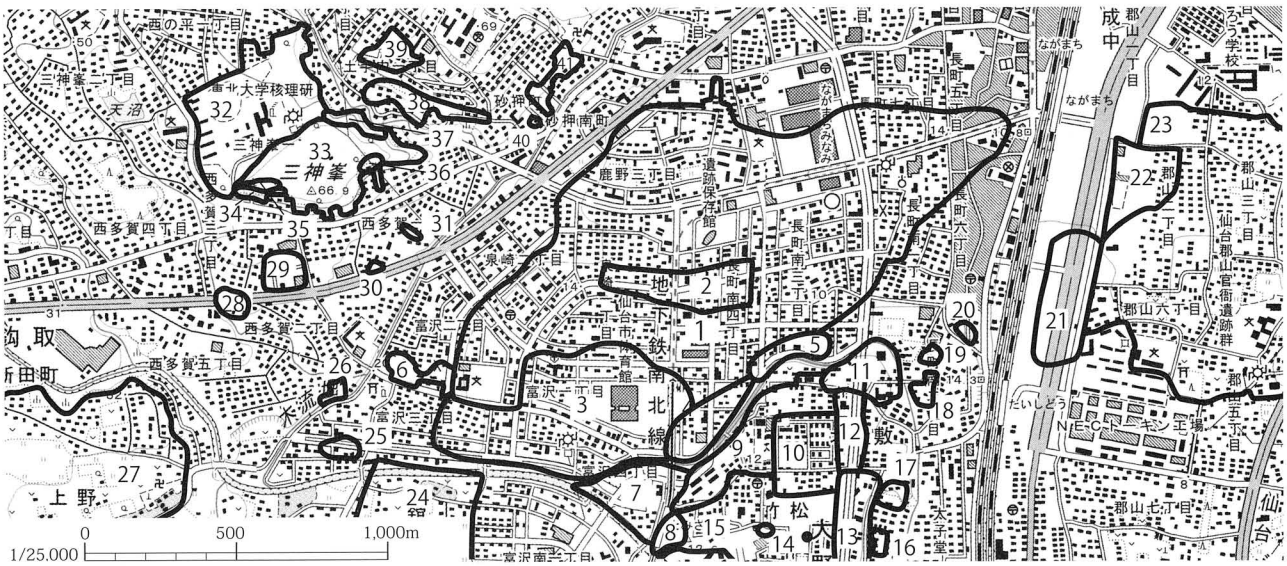
第３章　富沢遺跡第 143 次発掘調査報告

１　調査要項

遺　跡　名　富沢遺跡（宮城県遺跡登録番号 01369）
調 査 地 点　仙台市太白区長町三丁目 1-15
調 査 期 間　平成 22 年２月２日～４日
調査対象面積　626.42㎡
調 査 面 積　102㎡
調 査 原 因　太白区役所立体駐車場整備工事
調 査 主 体　仙台市教育委員会
調 査 担 当　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員　主事　廣瀬真理子　　文化財教諭　吉野　信

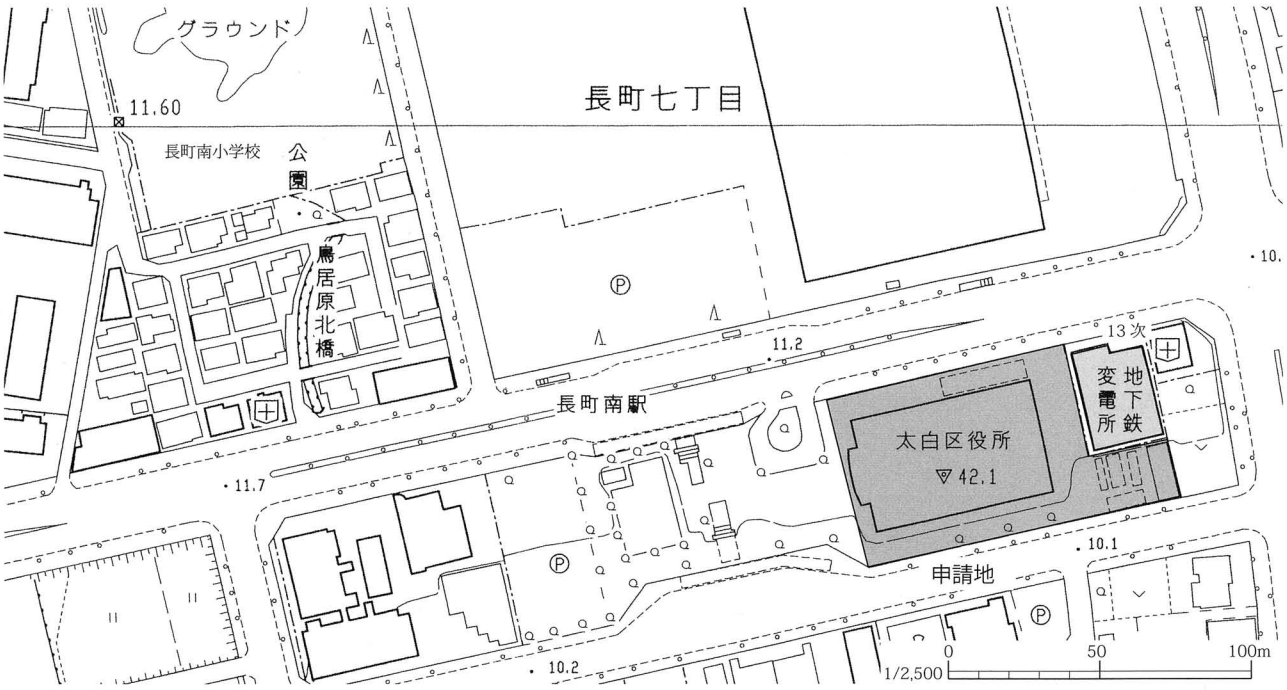
２　調査に至る経緯と調査方法

本件は、平成 21 年 12 月１日付で、申請者より「太白区役所立体駐車場整備事業計画と埋蔵文化財のかかわりについて（協議）」が提出され、文化財保護法第 94 条（県伝達　文第 1888 号、H21 教生文第 175 － 14 号）に基づ



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	富沢遺跡	包含地、水田跡	後背湿地	後期旧石器、縄文～近世
2	泉崎浦遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防、後背湿地	縄文～古墳、平安、近世
3	山口遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防、後背湿地	縄文、弥生、古墳～中世
4	下ノ内浦遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	縄文～中世
5	袋東遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安
6	富沢清水遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
7	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～奈良
8	伊古田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古墳～平安
9	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～平安、近世
10	大野田官衙遺跡	官衙跡	自然堤防	古代
11	元袋遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	弥生～近世
12	大野田遺跡	祭祀、集落跡	自然堤防	縄文～平安
13	王ノ壇遺跡	集落跡、屋敷跡	自然堤防	縄文～中世
14	春日社古墳	円墳	自然堤防	古墳
15	大野田古墳群	円墳	自然堤防	古墳
16	長町清水遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
17	北屋敷遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
18	新田遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
19	長町南遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
20	長町六丁目遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
21	長町駅東遺跡	集落跡	自然堤防、後背湿地	弥生～奈良
22	西台畑遺跡	包含地、甕棺墓	自然堤防	縄文～古墳
23	郡山遺跡	官衙跡、寺院跡、包含地	自然堤防、後背湿地	縄文～奈良
24	富沢館跡	城館跡	自然堤防	中世
25	堀ノ内遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安
26	富沢上ノ台遺跡	散布地	自然堤防	縄文、平安
27	上野遺跡	集落跡	段丘	縄文、奈良、平安
28	西台窯跡	窯跡	丘陵麓	奈良、平安？
29	原遺跡	集落跡・円墳	丘陵麓	弥生、古墳、平安
30	原東遺跡	散布地	丘陵麓	古墳～平安
31	裏町東遺跡	散布地	丘陵麓	平安
32	芦ノ口遺跡	集落跡	丘陵	縄文、弥生、平安
33	三神峯遺跡	集落跡	集落跡	縄文、平安
34	富沢窯跡	窯跡	丘陵南斜面	古墳～平安
35	三神峯古墳群	円墳	丘陵	縄文、平安
36	金山窯跡	窯跡	丘陵南斜面	古墳
37	土手内横穴墓群 A 地点	横穴墓	丘陵斜面	古墳
38	土手内横穴墓群 B 地点	横穴墓	丘陵斜面	古墳
39	土手内遺跡	集落跡	丘陵	縄文～平安
40	砂押古墳	円墳	丘陵麓	古墳
41	砂押屋敷遺跡	散布地	丘陵麓	奈良、平安

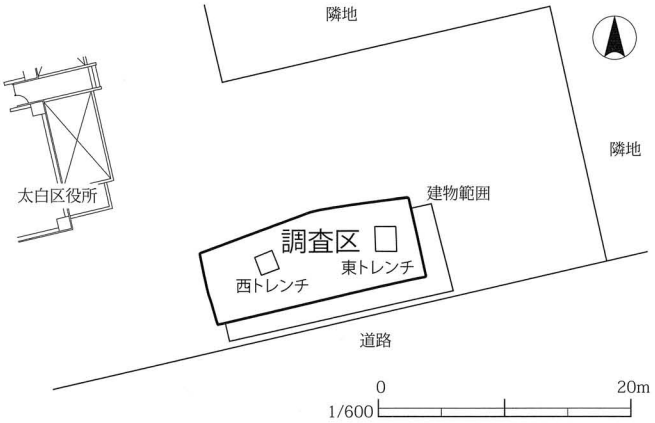
第 44 図　遺跡の位置と周辺の遺跡



第 45 図　第 13 次調査地点と今回の調査地点

くものである。

工事内容は、①機械式立体駐車場建設工事、②給排水施設切り回し工事、③車歩道改修工事である。協議の結果、②・③については、掘削幅が狭小または掘削深度が遺構面に達しないと判断されることから、工事立会いを行い、①については、建物建築範囲が富沢遺跡内で広く確認されている条里型地割りの大畦畔（真北方向）推定ライン上であることから、確認調査を実施することとなった。



第 46 図　調査区配置図

確認調査は平成 22 年２月２日に着手した。遺構が検出されたため申請者と協議を行い、引き続き本発掘調査を実施することとなった。調査区は、立体駐車場建築範囲内に東西 17m ×南北 6m に設定した。重機により盛土およびⅠ、Ⅱ層を除去後、Ⅲ層上面において遺構検出作業を行った。人力で遺構精査を行い、Ⅳ層水田跡と、Ⅳ層上面で溝状遺構１条を検出した。Ⅳ層水田跡の調査では、大畦畔を１条検出した。必要に応じて平面・断面図を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。

また、Ⅳ層水田跡の調査終了後、約 1.5 × 1.5m のトレンチを２箇所設定し、下層調査を行い、基本層の断面観察を行った。

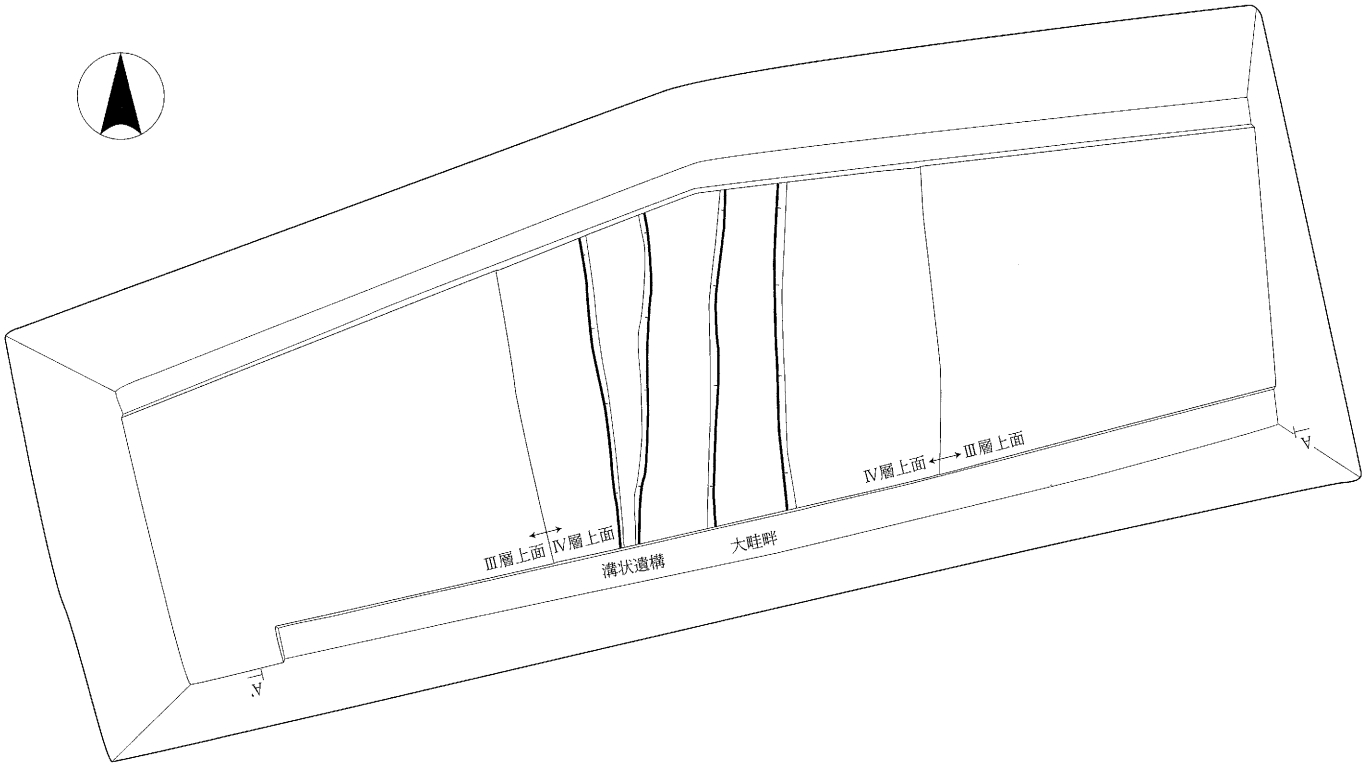
3　遺跡の位置と環境

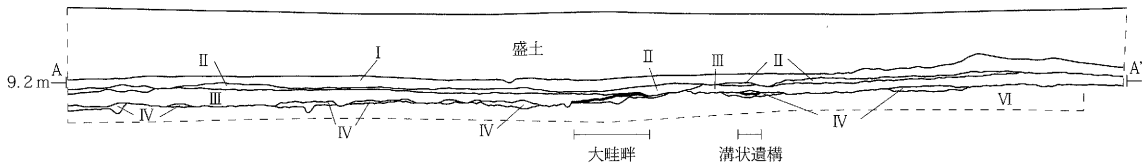
富沢遺跡は、仙台市の南東部、太白区泉崎・長町・富沢・鹿野等に位置する。名取川や広瀬川によって形成された自然堤防と、青葉山丘陵や茂庭丘陵によって囲まれた後背湿地に立地している。遺跡の総面積は約 90ha におよび、標高は約９～ 16m である。

富沢遺跡は、後期旧石器および縄文時代から近世にかけての複合遺跡として知られ、中でも弥生時代以降の水田跡が重層的に確認されている。特に 10 世紀を中心とする平安時代の水田跡は、自然地形の傾斜ではなく、真北方向およびそれに直交する大畦畔を基準とした、条里型地割りが確認されている。

４　基本層序

今回の調査では、大別 12 層を確認した。現代の水田層を除くと、Ⅲ・Ⅳ・Ⅸ・Ⅹ層が層相から水田層と判断された。また、Ⅶ層も水田層の可能性がある。





南壁断面図

0　4m
1/100

層位	土色・土質	しまり	粘性	備考	
Ⅰ	5Y3/2 オリーブ黒色シルト質粘土	ややあり	あり	均質	現代水田層
Ⅱ	7.5Y4/1 灰色シルト質粘土	ややあり	あり	酸化鉄が集積する	
Ⅲ	10YR3/2 黒褐色粘土	あまりなし	あり	層下半にⅣ層を巻き込む。灰白色火山灰を粒～ブロック状に含む	水田耕作土
Ⅳ	5Y4/2 灰オリーブ色粘土	あまりなし	あり	灰白色火山灰を粒～ブロック状に含む	水田耕作土
Ⅴa	10YR2/2 黒褐色粘土	あまりなし	あり	下層を斑状に少量含む	
Ⅴb	2.5Y4/2 暗灰黄色粘土	あまりなし	あり	黒褐色（10YR2/2）粘土ブロックを少量含む	
Ⅵa	10YR2/2 黒褐色粘土	なし	あり	灰黄褐色（10YR6/2）粘土との互層。植物遺存体を含む	自然堆積層
Ⅵb	10YR3/3 暗褐色粘土	なし	あり	灰黄褐色（10YR6/2）粘土を斑状に含む	自然堆積層
Ⅵc	5Y5/1 灰色粘土	なし	あり	灰黄褐色（10YR6/2）粘土を斑状に多く含む	自然堆積層
Ⅵd	7.5Y3/2 オリーブ黒色粘土	なし	あり	灰黄褐色（10YR6/2）粘土と植物遺存体の互層	自然堆積層
Ⅶ	2.5Y5/2 暗灰黄色粘土	あまりなし	あり	均質	水田耕作土か
Ⅷ	7.5Y3/2 黒褐色粘土	なし	あり	灰黄褐色（10YR4/2）粘土との互層。植物遺存体を含む	自然堆積層
Ⅸ	2.5Y4/1 黄灰色粘土	あまりなし	あり	均質	水田耕作土
Ⅹ	2.5Y5/1 黄灰色粘土	あまりなし	あり	下層を斑状に含む	水田耕作土
Ⅹ1	5Y4/2 灰オリーブ色粘土	なし	あり	ⅩⅡ層の小ブロックを含む	
ⅩⅡ	10YR3/2 黒褐色粘土	なし	あり	植物遺存体を含む	自然堆積層

第 47 図　調査区平面図・調査区南壁断面図

5　発見遺構と出土遺物

1）溝状遺構

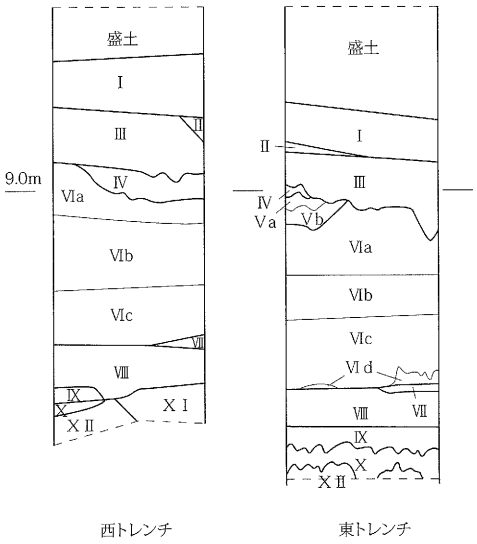
調査区中央西側に位置する。南北方向の溝状遺構で、さらに調査区外へ延びる。Ⅳ層上面で検出された。灰白色火山灰を堆積土とする。検出長は約 4.3 mである。規模は上端幅約 0.2 ～ 0.9m、下端幅約 0.18 ～ 0.74m で、深さは 4 ～ 8cm 程度である。底面には凹凸があり、断面形は不整形である。堆積土の灰白色火山灰は人為的に埋められている可能性がある。遺物は出土していない。

2）Ⅳ層水田跡

大畦畔１条と、それが形成する区画を２区画検出した。

耕作土は基本層Ⅳ層で、灰オリーブ色（5Y4/2）の粘土である。灰白色火山灰を粒状、ブロック状に含んでいる。

畦畔の検出長は約 4.4m、規模は下端幅約 0.9 ～ 1.1 mである。下面には、一部に擬似畦畔Ｂの存在が確認された。層厚は５～ 10㎝程度である。本来の水田面は、Ⅲ層水田跡の耕作によって失われているが、Ⅳ層水田跡の畦畔に擬似畦畔Ｂが存在していることから、畦畔位置が踏襲されていることが考えられる。遺物は出土していない。



第 48 図　深掘トレンチ　柱状模式図

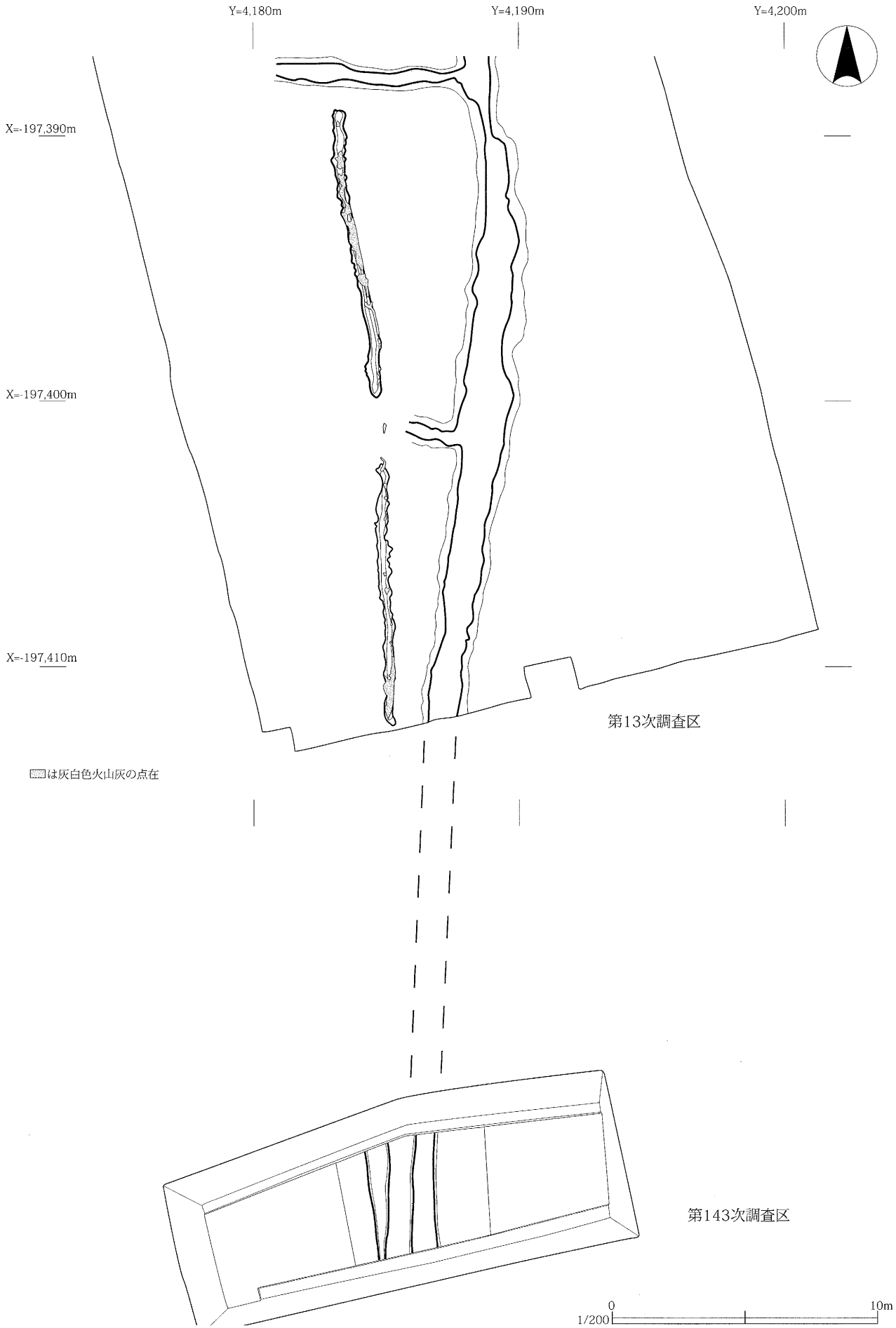
6　まとめ

- 今回の調査地点は、富沢遺跡の北東部に位置し、第 13 次調査区の南に隣接する。
- 平安時代の条里型土地割を基軸とする大畦畔の推定位置に該当しており、調査の結果、南北方向の大畦畔を検出した。第 13 次調査で検出した大畦畔がさらに南へ延び、調査区全域がⅣ層水田跡の水田域であったことが確認された。
- 溝状遺構は、本来のⅣ層上面から掘り込まれ、灰白色火山灰を埋めた可能性がある。
- 断面観察の結果、Ⅲ・Ⅳ・Ⅸ・Ⅹ層も水田耕作土と考えられ、Ⅶ層も水田層の可能性がある。
- 基本層の第 13 次調査区との対応関係と時期は、以下のとおりとなる。

本調査	第 13 次調査との対応	時期
Ⅰ層：現代水田耕作土	＝１層	
Ⅱ層：水田耕作土か	＝２層：調査区東半部に部分的に分布	
Ⅲ層：水田耕作土	＝３層：調査区全域に分布	
Ⅳ層：水田耕作土	＝４層：調査区東半部に分布	平安時代
Ⅴ層：東トレンチのみで確認	＝５層：水田耕作土の可能性あり	
Ⅵ層：自然堆積層	＝６層	
Ⅶ層：水田耕作土か	＝７層：下面の凹凸が顕著	弥生時代　中期後葉
Ⅷ層：自然堆積層	＝８層	
Ⅸ層：水田耕作土	＝ 11 層	弥生時代　中期中葉～後葉
Ⅹ層：水田耕作土	＝ 12a 層：下面の凹凸が顕著	弥生時代　中期中葉

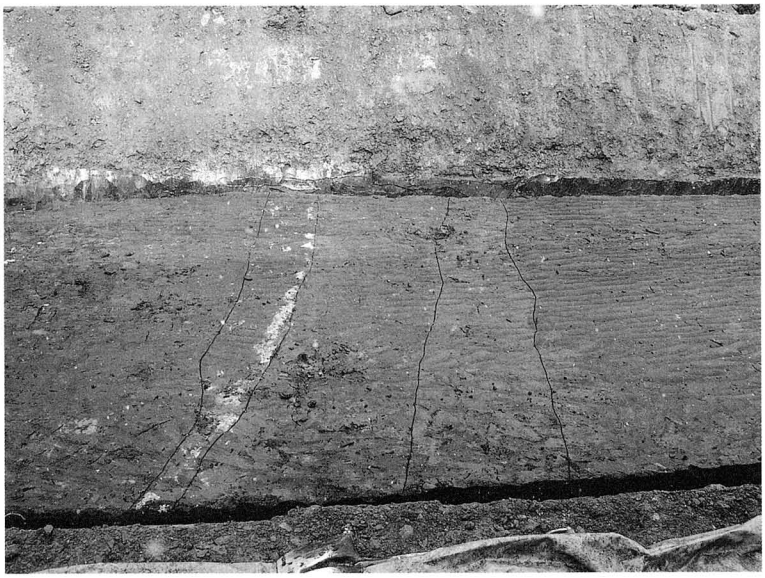
＜参考文献＞

仙台市教育委員会 1989『富沢遺跡・泉崎浦遺跡―仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅰ－』
仙台市文化財調査報告書第 126 集

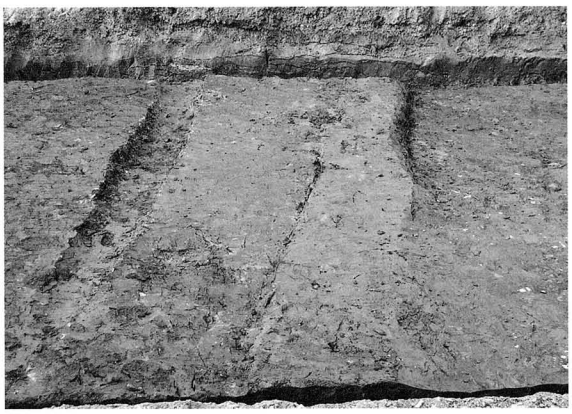


※仙台市文化財調査報告書第126集・第134図を基に作製

第 49 図　第 13 次調査区と今回の調査区



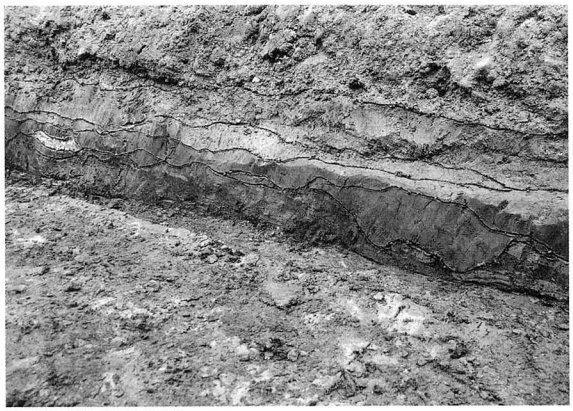
1.　大畦畔・溝状遺構検出状況（南から）



2.　Ⅳ層水田跡完掘状況（南から）

3.　調査区南壁東半部断面（北西から）

4.　東トレンチ断面（南から）



5.　調査区北壁・大畦畔・溝状遺構断面（南から）

写真図版 16

報告書抄録

ふりがな	こおりやまいせき ほか
書名	郡山遺跡 他
副書名	― 郡山遺跡第 206 次・郡山遺跡第 209 次・養種園遺跡第 8 次・富沢遺跡第 143 次 ―
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 405 集
編著者名	大久保弥生　佐藤正弥　廣瀬真理子　小泉博明
編集機関	仙台市教育委員会（文化財課）
所在地	〒 980-0802　宮城県仙台市青葉区二日町 1 － 1　　TEL022（214）8893・8894
発行年月日	2012 年 3 月 30 日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
郡山遺跡（こおりやまいせき）（第 206 次）	仙台市太白区郡山（せんだいしたいはくくこおりやま）二丁目 8 － 1 ほか	4100	01003	38° 13′ 18″	140° 53′ 21″	2011.6.30 ～ 2011.8.25	300㎡	記録保存（宅地造成）
郡山遺跡（こおりやまいせき）（第 209 次）	仙台市太白区郡山（せんだいしたいはくくこおりやま）五丁目 40 － 1・42 － 1	4100	01003	38° 13′ 16″	140° 53′ 35″	2011.9. 1 ～ 2011.9.15	280㎡	記録保存（宅地造成）
養種園遺跡（ようしゅえんいせき）（第 8 次）	仙台市若林区南小泉（せんだいしわかばやしくみなみこいずみ）1 丁目 14 － 85	4100	01349	38° 14′ 26″	140° 54′ 10″	2011.1. 5 ～ 2011.1.13	67㎡	記録保存（店舗建築工事）
富沢遺跡（とみざわいせき）（第 143 次）	仙台市太白区長町（せんだいしたいはくくながまち）三丁目 1 － 15	4100	01369	38° 13′ 27″	140° 52′ 40″	2010.2. 2 ～ 2010.2. 4	102㎡	記録保存（太白区役所立体駐車場整備工事）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
郡山遺跡 第 206 次	集落跡 官衙跡	飛鳥 ～平安	掘立柱建物 住居跡・溝跡	礫石器・土師器・須恵器 土製品・金属製品	Ⅰ期官衙掘立柱建物跡
郡山遺跡 第 209 次	官衙跡	飛鳥 ～平安	溝跡・土坑	土師器・須恵器・瓦・金属製品	
養種園遺跡 第 8 次	集落跡 屋敷跡	縄文 ～近世	溝跡・土坑 性格不明遺構	弥生土器・土師器・須恵器 赤焼土器・陶器・磁器・土製品・瓦・鉄滓	
富沢遺跡 第 143 次	水田跡	旧石器 ～近世	水田跡	なし	

要約		
	郡山遺跡 第 206 次	掘立柱建物跡 1 棟、竪穴住居跡 8 軒、溝跡 8 条、土坑 3 基、ピット 261 基を検出した。SB2256 掘立柱建物跡は、郡山Ⅰ期官衙を構成する建物跡と考えられる。遺物は、土師器を主体とし、須恵器、鉱滓などが出土した。
	郡山遺跡 第 209 次	溝跡 1 条、土坑 2 基、ピット 132 基が検出されたが、官衙に関わる遺構は検出されなかった。遺構の分布が希薄であり、藤原宮にみられるような空閑地が南門東部にも広がっていることが明らかとなった。遺物は、SK2279 土坑から土師器、須恵器、瓦、鉄滓が出土した。
	養種園遺跡 第 8 次	溝跡 4 条、土坑 1 基、性格不明遺構 1 基、ピット 8 基を検出した。溝跡は、いずれも近世以降の溝跡と推測される。遺物は、土師器を主体とし、羽口や鉄滓などの鍛冶関連の遺物が出土した。
	富沢遺跡 第 143 次	条里型地割に基づく平安時代の水田跡と南北方向の大畦畔を検出した。

仙台市文化財調査報告書第 405 集

郡山遺跡 他

発掘調査報告書

— 郡山遺跡第 206 次・郡山遺跡第 209 次・
養種園遺跡第 8 次・富沢遺跡第 143 次 —

2012 年 3 月

発 行　仙 台 市 教 育 委 員 会
仙台市青葉区二日町 1 － 1
文化財課　TEL　022（214）8894

印 刷　株式会社ホクトコーポレーション
仙台市青葉区上愛子字堀切 1 － 13
TEL　022（391）5661